俺と幼馴染とバカたちと！

FORCE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と幼馴染とバカたちと！

【Ｎコード】
Ｎ８９５８Ｘ

【作者名】
ＦＯＲＣＥ

【あらすじ】
試験召喚システムがある学園に入学した「荒井圭太」幼馴染たちといっしょにバカやって行きます！！

プロローグ（前書き）

詰めて書き込みますがお願いします。

プロローグ

～「クラス振り分け試験」当日　～

圭太サイド

圭太「よ～し、明久、小手調べでもするか！」
吉井「何でも来い！」
圭太「三権分立とは「司法」と「立法」ともうひとつは何でなりたっている？」
さすがに分かるだろう？幼馴染である雄二に確認してみるか！
圭太（雄二、明久はこの問題分かるかな？）
雄二（う～ん、分からん）
圭太（正解率は何割ぐらい？）
雄二（半々っというぐらいだな）
まぁそんなぐらいかな～～？
圭太「ほら、明久もうひとつは何で成り立っている？」
明久「あまり僕を見くびらないでくれよ圭太・・・二つまで絞れるよ」
圭太・雄二「「ほう」」
明久「「憲法」か「漢方」のどっちかだったはず・・・・」
圭太・雄二「「行政だ（だよ）」」
そこにある生徒が割り込む
島田「ウチからも～・・・では基礎問題！「ＣＨ３ＣＯＯＨ」とは何でしょう？」
明久「・・・（ぷいっ）」
明久？どうした顔なんかそむけて？
島田「吉井？」
明久「・・・・・英語は苦手なんだ」

はいそうですか・・・ってはいいいいい？
島田「え？・・・これって化学だけど・・・」
明久「じゃあ僕こっちの教室だから！」
「「「・・・」」」
明久はF決定ですか・・・
圭太「雄二！Fクラス代表になるならちゃんとしてくれよ？」
雄二「まぁ大丈夫だろう」
圭太「俺は明久と一緒の教室だから先に行くぞ！」
雄二「約束果たしてくれよ？」
圭太「お前こそ」
っと言って雄二たちと離れる
☆
教師「では、振り分け試験始め！」
これが振り分け試験か楽勝だな・・・
と言いたいところだが雄二の約束を果たさなくては！
圭太（・・・ん？姫路の様子がおかしい？）
バタッ
明久「姫路さん？！」
教師「姫路、途中退席は無得点扱いとなるが」
っあヤベ～ねむい・・・
そう思うと意識がなくなっていた。
☆
圭太「っは！ヤバイ遅れる～～」
現在、学園へ全力ダッシュ！
あっ！学園が見えてきｔ
？？？「荒井、遅刻だぞ」
学園に入る一歩前で呼び止められた。
？？？「荒井！聞こえとらんのか？」
圭太「聞こえてますって西村先生！あと遅れてすみまｓー「こら、吉井！」？」

明久「あ、鉄じーじゃなくて、西村先生おはようございます。」
西村「今、鉄人って言わなかったか？」
圭太「いいじゃないですか」
明久「そうだｙ一「黙れ」ひどいよ！」
西村「まぁいい、ほら受け取れ」
そういって振り分け試験の結果が渡される。
圭太「明久、聞いておくけど自信は？」
明久「Ｃクラスには行けそうｄ一「無理！」ってひどいよ！」
西村「荒井、お前はどうしたんだ？不調か」
圭太「いやそんなことはありませんよ」
といって俺は結果を見ておく見ても変わりは無いからな。

荒井圭太・・・Ｆクラス

明久「んなバカなぁぁぁぁ！」
明久も現実を見たことだし、連れて行くか・・・
☆
明久「ねぇ圭太、」
圭太「ん？」
明久「どうして学園にホテル並みの教室が・・・」
圭太「スポンサーってすごいね！」
明久「あっ僕の貴重なカロリーが！」
早く連れて行こう、こうなると邪魔になってしまう
圭太「明久行くぞ！」
俺たちは目的のＦクラスに到着した。
明久「なんだこの廃墟は・・・」
圭太「早く入ろう明久・・・・・（ガラッ）すみません遅れました。」
明久「すみません♪ちょっと遅れました♪」
雄二「早く座れ、うじ虫達」

教卓に幼馴染である雄二が立っていた。
よかったよ雄二ちゃんと約束を守れていたではないかってそうじゃねぇ
圭太「雄二・・・ひどいよ～」
雄二「スマン間違えた後ろのやつにいっている。あと、ありがとな圭太！」
圭太「気にすんな♪」
明久「・・・雄二、なにやってんの？」
雄二「見て分からんか？俺はクラスの代表だ！」
明久「えっ？このバカが代表？」
圭太「雄二、俺の席は？」
雄二「適当でいい」
なんという教室だ・・・なんて自由なんだ！
さぁ～てどこに座るかな？
？？？「圭太ではないか！」
圭太「ん？あぁ秀吉か」
そこには、近所に住んでいる秀吉が座っていた。
雄二とは小学校で知り合った仲だ
秀吉「なぜ、振り分け試験近くになると家にはいないのじゃ？」
圭太「Fクラス代表の家に泊まっていたからな」
まぁ振り分け試験が近くなると何か言われそうだからな
秀吉「ふ～ん、そうなのかの？けど一緒になれてうれしいのじゃ！」
っとなると・・・ヤバイ！秀吉の姉である優子が聞いたら俺の命が・・・
ん？誰か入ってきて・・・って福原先生か
福原「えーおはようございます。Fクラス担任の福原慎です。
よろしくお願いします。」
福原先生どうしたの黒板の溝なんて見て・・・あぁそうかチョークが無いのか
福原「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、廊下側の

人からよろしくお願いします。」
廊下側か俺は二番目か、んじゃ最初の人は？
秀吉「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。そこの荒井圭太とは幼馴染じゃ」
Fクラス『殺せぇーーーーー！』
なぜに？まぁいい
圭太「久しぶりに喧嘩するねぇ～」
～少々お待ちください～
五分後
死体（Fクラス）がそこら辺にくたばっている
圭太「荒井圭太（あらいけいた）だ雄二とも幼馴染だあと喧嘩はあまりしたくないのでよろしく」
喧嘩したあとだから説得力は無いだろう
他の人が復活して自己紹介を聞いていくと
俺の意識がなくなっていた。

☆

？？？「・・・き・・・じゃ、起きるのじゃ！」
誰だ俺の睡眠をとったやつは！って秀吉か
『大ありじゃぁぁぁぁぁあ』
て今度はなんだよ。
どこの合唱団だよ～
雄二に確認でもするか。
圭太（雄二これってなぁに？）
雄二（あぁ寝てたのか？今から召喚戦争を行う）
俺が寝ていた間に引き金が引かれていた。

プロローグ（後書き）

どうも文才の無い作者のＦＯＲＣＥです。
いつ書けるのか分からないので詰め込みました。
これからも「俺と幼馴染とバカたちと！」よろしくお願いします～
！

オリ主設定！♪

名前　荒井圭太（あらいけいた）

年齢　１７歳

身長　１７２ｃｍ

体重　５３ｋｇ

性別　男

趣味　寝ること、読書

性格　優しい？、楽しめたらそれでいい、友達思い

容姿　中性的な顔で、黒髪に赤色の目、髪の長さは秀吉と一緒

身体能力　雄二達より喧嘩は上の方

能力　完全記憶であり、両手でテストが受けれる。

召喚獣の設定　容姿はそのままデフォルトされていて、
腰にＭ９２Ｆ（ベレッタ）二丁と日本刀が一本
腕輪は、まだ未定です。小説を書いていく中考えて行きます。

オリ主設定！♪（後書き）

ヒロインはどうするべきか考えています。
なにかあったらコメントでもお願いします。
というより
文才がほしい・・・

第一話　Dクラス戦　宣戦布告（前書き）

問題　以下の問いに答えなさい

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用意するべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え
「問題点：・・・マグネシウムに炎をかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。
合金の例：・・・ジュラルミン」

教師のコメント
正解です。合金なので『鉄』では駄目というひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え
「問題点：・・・ガス代を払っていなかったこと」

教師のコメント
そこは問題ではありません。

吉井明久の答え
「合金の例：・・・未来合金（↑すごく強い）」

教師のコメント
すごく強いと言われましても。

荒井圭太の答え

「問題点　火力が低いためおもしろ反応が見れない、そのためマグネシウムと酸素の化合を激しくするためには、マグネシウムが酸素とちゃんと化合できるように満遍なく潰す。」

教師のコメント

激しくしないでください。迷惑です。

第一話　Dクラス戦　宣戦布告

F『勝てるわけがない』
F『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』
F『姫路さんがいたら何もいらない』
姫路さんのラブコールが飛んでるけど？
雄二「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」
おぉさすが雄二へこたれないね
F『何を馬鹿なことを』
F『できるわけないだろう』
F『何の根拠があってそんなことを』
さすがに常識はありますね。Fクラスで・・・
雄二「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。
　それを今から説明してやる」
雄二「おい、康太。畳に顔つけて姫路のスカート覗いてないで前に来い」
さすがは康太（ムッツリ）だな
康太「・・・・・・（ブンブン）」
姫路「は、はわっ」
雄二「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性職者（ムッツリーニ）だ」
康太「……！！（ブンブン）」
F『ムッツリーニだと……？』
F『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……？』
F『だが見ろ。あそこまで覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ……』
F『ああ。ムッツリの名に恥じない姿だ……』
康太、今否定しても無駄だ
雄二「姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力は

よく知っているはずだ」
姫路「わ、私ですかっ？」
雄二「ああ。うちの主戦力の一人だ。期待してる」
Ｆ『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった』
Ｆ『彼女ならＡクラスにも引けをとらない』
Ｆ『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』
雄二「木下秀吉だっている」
Ｆ『おお……！』
Ｆ『ああ。アイツ確か、木下優子の……』
雄二「当然俺も全力を尽くす」
Ｆ『確かになんだかやってくれそうな奴だ』
Ｆ『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』
Ｆ『実質、Ａクラスレベルが二人もいるのか！』
雄二も人気じゃないか！
雄二「それに、吉井明久だっている」

……シン――

明久「ちょっと雄二！　僕の名前を呼ぶ必要あった！？　ていうか完全にオチ扱いだよね！」
雄二「ちなみにこいつは《観察処分者》だ」
明久「あぁーもう、折角上がった士気が凄い勢いで直下下降していくっ！」
さすが明久（オチ）ｗ
けど士気はどうやって持ち直す？
雄二「それに・・・」
それに？
雄二「荒井圭太だっている」
Ｆ『木下姉妹の幼馴染か』
Ｆ『さっきの異端者じゃないか！』

F『・・・殺したいほど妬ましい』
最後のは康太カナ？
雄二「ほら圭太さっさと前に来い！」
圭太「はぁ～い」
と言って前に行く。
雄二「こいつは、Fクラスの切り札だ！」
圭太「？」
雄二「圭太は、Aクラスの学年主席を圧倒する実力がある」
圭太「一回だけだけど？」
雄二「圭太がFクラスに来たのは、世の中は学力だけではないことを証明するためだ！
　そのことで、俺と、この圭太がいる」
約束だからね
それは守らないと
F『それならいけるかもしれないな』
F『あのAクラスを圧倒する力があるなら』
雄二「皆、この境遇におおいに不満だろ？」
F『当然だ！』
ノリのいいクラス（バカ）は単純だから扱いやすいな～
覚えておこう。
雄二「ならば全員筆を取れ。出陣の準備だ！」
F『おおーーーーー！』
雄二「俺達に必要なのはちゃぶ台じゃない！Aクラスのシステムデスクだ！」
F『うおおーーーーー！』
姫路「お、おおー。」
姫路もがんばってもらわないと・・・
圭太「イテッどうしたんだ秀吉？」
秀吉「知らんのじゃ」
圭太「・・・そうか？まぁいいけど、あぁ秀吉！優子はどこのクラ

スだ？」
秀吉「Ａクラスじゃのう、それを聞いてどうしたのじゃ？」
圭太「・・・俺の命にかかわる・・・」
Ａクラス戦までには祈りを済ませとかないとな～
ばれていなければいいかな？
☆
雄二「明久には、Ｄクラスへの宣戦布告の死者なってもらう。無事大役を果たせ。」
明久「・・・・・下位勢力の宣戦布告の使者って大抵酷い目に遭うよね？しかも今字がちがく無かった？」
よく分かったね。その通りだよ！
雄二「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加えることは無い。騙されたと思って行ってみろ」
明久「本当に？」
雄二「本当だ、俺達を誰だと思っている」
圭太「そうだ、俺達を信じろ。俺達は友人を騙すような真似はしない」
これで生贄（あきひさ）になってくれるかなぁ？
明久「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」
明久はやっぱりバカだ・・・
雄二・圭太「「ああ、頼んだぞ（よ）」」
クラスメイトの歓声と拍手で明久を送り出した。
俺もついていきますか・・・俺も一応、騙したからな
圭太「雄二！拾ってくる」
雄二「分かった」
☆
ん？明久が面白いようにリンチ食らってるな・・・
助けるか！
圭太「明久」
明久「あっ圭太じゃないか！さっきはよくも（バキッ）・・・」

しゃべる余裕があるならどっか逝けよ
圭太「（バキッ）明久、今日は弁当やるから見逃してくれ」
明久「分かったよ」
明久が教室に帰っていくところを見守った
Dクラスからのイロイロな視線が圭太に集まる（女子から）
圭太「（バキッ）は～い、次の方～どっからでもかかって来いやぁ～！」
数分後・・・
D『すんませんしたぁ～～』
D『調子くれてました～～』
うんFクラスより弱いね！断言できるよ！
そう思いつつDクラスを後にする・・・
ん？メールが
あぁ屋上に集合か・・・
屋上に向かって歩き出した

第二話　Dクラス戦　屋上（前書き）

問題　以下の意味を持つことわざを答えなさい。
『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』
『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きるたとえ』

姫路瑞希の答え
『（1）弘方も筆の誤り』『（2）泣きっ面に蜂』

教師のコメント
正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え
『（1）弘方の川流れ』

教師のコメント
シュールな光景ですね。

吉井明久の答え
『（2）泣きっ面蹴ったり』

荒井圭太の答え
『（2）一般人には3コンボまで！』

教師のコメント
ひどすぎます。

第二話　Dクラス戦　屋上

屋上に近づくにつれて、いつものメンバーと合流する。
屋上で雲一つない空から眩しい光が差し込む。
とても気持ちがいい♪
明久「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」
圭太「それじゃ、先にお昼ご飯ってことだよね？」
雄二「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなもの食べろよ？」
圭太「それについては、俺が分けるから関係ない」
約束だからね
姫路「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」
やっぱり姫路はやさしいなぁ・・・痛い！痛いから秀吉そんなにつまむな！
明久「いや、一応食べてるよ。」
圭太「ゑ？」
明久のせいで間違えたじゃないか！
雄二「・・・・アレは食べてると言えるのか？」
けど本当にどうやって生きてきた？明久（ゴキブリ）？
明久「人を虫扱いはひどいよ！」
圭太「本音を読むな！」
明久「って雄二、何が言いたいのさ」
雄二「いや、お前の主食って――――――水と塩だろう？」
明久「失礼な。きちんと砂糖だって食べてるさ！」
姫路「あの、吉井君？水と塩と砂糖って、食べるとはいいませんよ・・・・？」
秀吉「舐める、が表現としては正解じゃろうな」
仕方ない、温かい目で見守るか
雄二「まっ、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いんだよな」

明久「し、仕送りが少ないんだよ！」
圭太「俺も仕送りだけど？」
親は海外にいてあんまり帰ってこないからな・・・
明久「僕よりも仕送りが多いじゃないか！」
圭太「そうかな？三十万くらいだけど？」

姫路「・・・・・あの、良かったら私がお弁当作ってきましょうか？」
明久「ゑ？」
よかったじゃないか明久！女子の手作り弁当だぞ！
明久「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久し振りだよ！」
姫路「はい。明日のお昼で良ければ」
雄二「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」
明久「うん！」
島田「・・・・・・ふーん。瑞樹って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」
島田おまえは嫉妬深いんだな・・・
姫路「あ、いえ！その、皆さんにも・・・・」
雄二「俺達にも？いいのか？」
姫路「はい。嫌じゃなかったら」
秀吉「それは楽しみじゃのう」
康太「・・・・・・・・・・（コクコク）」
島田「・・・・お手並み拝見ね」
圭太「ありがと～姫路！」
姫路「わかりました。それじゃ、皆さんに作ってきますね」
明久「姫路さんって優しいね」
姫路「そ、そんな・・・・」
明久「今だから言うけど、僕初めて会う前から君のこと好き――――」

雄二「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」
明久「――――にしたいと思ってました」

明久・・・ついにお前は変態になったんだな。

秀吉「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」
雄二「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるな」
明久「だって・・・お弁当が・・・・」
圭太「っということで雄二」
雄二「ん？」
圭太「明日は弁当いらないよね？」
雄二の家に泊まっているからね、
雄二「姫路が作ってくるんだその必要はないだろう」
明久「えっ？いつも作ってくるの？」
圭太「雄二の家に泊まっている時だけだど？」
雄二「圭太の料理は結構いけるぞ！」
明久「へぇ～そうなんだ、ってそうじゃないよ圭太！弁当分けてくれるんだよね？」
圭太「もちろん」
と言って弁当を分けてあげる
秀吉「わしにも分けてくれんかのぅ？ひさしぶりに食べたいのじゃ！」
圭太「ん？べつに構わないけど」
といって秀吉にもわける・・・康太・・・弁当がほしいのか？視線が弁当にしか、いってないけど？
圭太「康太もたべる？」
康太「・・・（コクコク）」
康太にも分けたら・・・って俺の弁当がもう・・・無い・・・

まぁいいよ、昼飯抜いたぐらいで死なないだろう明久（ゴキブリ）がいるからな
明久「また虫扱いにしたなぁ！」
圭太「だから本音を読むなっての！」
雄二「話がかなりそれたな。さて、試召戦争の話に戻ろう」
ヤバイッそのこと忘れてた！
秀吉「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなのじゃ？段階を踏んでいくのならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」
姫路「そういえば、確かにそうですね」
圭太「なんだ、雄二。皆にまだ話してなかったのか？」
雄二「あまり時間が無いからな」
圭太「そうか？」
雄二「まぁいい。当然考えがあってのことだ」
姫路「どんな考えですか？」
雄二「色々と理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めないのは簡単だ。戦うまでも無い相手だからな。」
明久「え？でも、僕らよりクラスが上だよ？」
さすがは明久（バカ）だな
こんどの本音はばれていないはず！！
雄二「だから、Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」
明久「？それならDクラスは正面からぶつかると厳しいの？」
雄二「ああ。確実に勝てるとは言えないな」
俺でもそう思うよ
明久「だったら、最初っから目標のAクラスに挑もうよ」
だから明久はバカなのか・・・
圭太「さっき雄二が言ってたろ？色々と理由があるって。」
雄二「その通りだ。初陣だからな、派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？それに、打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」
姫路「あ、あの！」

ん？何かつじつまでも合わないところが？
それ位、姫路にしては珍しく大きな声を出していた。
雄二「ん？どうした姫路」
姫路「えっと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」
雄二「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて――――」
明久「それはそうと！」
明久は意気地なしだなぁ
いやっただのバカか？
明久「さっきの話、Ｄクラスに勝てなかったら意味が無いよ？」
雄二「負けるわけ無いさ」
圭太「神童（ゆうじ）にかなう奴なんかいると思うか？」
雄二「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」
圭太「この戦いは負けられない、世の中、学力だけではないことを証明するために！」
雄二・圭太「「いいか、お前ら。俺らのクラスは――――――最強だ。」」
みんな意見は違うけど、やることは一緒だからな
島田「いいわね。面白そうじゃない！」
秀吉「そうじゃな。Ａクラスの連中を引きずり落としてやるかの」
康太「・・・・・（グッ）」
姫路「が、頑張りますっ」
よしみんなはやる気だな！俺もそれに答えないとな
雄二「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

ここに、最下層が最上層に対する下克上？が始まった。

第三話　Ｄクラス戦　開始！（前書き）

問題　以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい。『光は波であって、（　）である』

姫路瑞希の答え
『粒子』

教師のコメント
よくできました。

土屋康太
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
先生もＲＰＧは好きです。

荒井圭太の答え
『スペ〇ウム光線』

教師のコメント

先生も子どものころは、流行りました。

第三話　Dクラス戦　開始！

現在Fクラスにて・・・

圭太「ねぇ雄二！いつになったら殺っていいの？」
雄二「字が違うぞ！圭太は秀吉達が戻ってきたら殺ってこい」
圭太「字は間違ってないじゃないか！」
まったくこいつは、人のことだけいいやがって！
それにしても暇だ・・・あぁあのことは教えておかないと！
圭太「振り分け試験の結果はFクラス並みのままだけど、べつにいいのか？」
雄二「関係ない、今は、圭太の結果を見せて次のクラスには隠せるからな」
そうかならいいか！
雄二「もうそろそろか・・・横溝！これを明久たちに！」
横溝「・・・・・！わかった！ｗ」
どうしたんだ横溝！急に笑って、不気味だぞ！
F『ウォーーー』
どうした？急に士気が上がっているぞ？
圭太「雄二！なにを持って行かせたの？」
雄二「『圭太の名において逃げたら殺す』っと」
圭太「そこで俺を使うな！」
まったく油断もすきも無いな・・・
須川「坂本！吉井からの伝言だ！」
雄二「なんだ？」
須川「先生たちに偽情報をながしてくれ、と」
雄二「そうか・・・ムッツリーニ！」
康太「・・・・・ここに（シュタ）」
雄二「Dクラスが呼んだのは誰だ？」

康太「・・・・船越先生だ」
雄二「そうか、だったら・・・」
圭太「おいっ、雄二！また俺の名を使うなよ？」
雄二「わかっている、よしっ須川！これを校内放送でながせ！」
といって何か紙を渡す
俺の名は使われないよね？しかも校内放送だし

《ピンポンパンポーン》

《船越先生、船越先生》

《吉井明久が体育館裏で待っています》

そういうことだったのかｗ
やばい腹がｗ・・・

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

明久、冥福を祈る
雄二「圭太、明久（ゴミ）を拾いにいくぞ！」
ついにゴミになったか明久、がんばったじゃないか！
明久を助けるために・・・いろんな意味で

☆

戦場にて
雄二「明久、持ちこたえろ！」
Ｄ『援軍だ！合流される前に一気に潰せ！』
Ｄ『代表もいるぞ！代表の首も取れ！』
雄二はここでも人気だな～～って今はそうじゃないよな？
圭太「明久！今行くぞ！試験召喚獣！！試獣召喚（サモン）」
こうして俺の召喚獣が召喚されって

『えええぇぇぇぇぇ！』
こっちが『えええぇぇぇぇぇ』だよ

俺が

召喚獣になるなんて！！聞いてないよ～（泣）

ん？どうしたみんな口があんぐり状態になっているぞ！
雄二「圭太？お前はプログラムを壊したか？」
圭太『しないよ！逆にこっちが聞きたいよ～』
くそっこうなれば！
圭太『西村先生これはどういうことで？』
西村「荒井おまえは実験体だ」
圭太『マジかよ！と言うより俺が実験体？あとフィードバックは？』
西村「もちろん付いてくる」
圭太『そですか・・・』
まぁいい、その方が召喚獣とやり合いやすいし
フィードバックは付くらしいけど
まずは、そこにいる召喚獣からっと

Ｆクラス　荒井圭太　ｖｓ　Ｄクラス　６人

物理　　７８点　　平均　５７点

物理で殺り合ってたか
このぐらいの点数でいけるか？
にしても相手は動かないな？
切りかかったら動くかな～

圭太が日本刀で切りかかる

ザシュッ

あれっ？
やっぱ動いてないけど
圭太『雄二！みんな動いてないけど？』
雄二「当たり前だ！お前が召喚獣になってるからな！」
そういうものなのか？
あっ！やっと動いてくれた～
Ｄクラス『召喚獣だろうが相手は一人だ潰せ！』
あいつが司令官か？
圭太『かかって来いや～』
この点数でいけるかな～？
とびかかってきた召喚獣一（２体）をＭ９２Ｆで打ち落とす。

いいねぇ～この視線で拳銃とは！あとで学園長にお話があったんだけど無しにするか！
切りかかってきた召喚獣（３体）をまとめて日本刀できり落とす
あいての防具はもろいな（俺の防具　制服）っま俺が言えるほどではないけど・・・（泣）
これならまだいけるな！
圭太『雄二！この前線を俺が保つ！その他は一旦退却だ！』
雄二「任せた！」
雄二たちは明久たちを拾って帰っていく
いつまでこらえていれるかな？

☆

雄二「圭太！」
あっ雄二じゃないか！姫路まで？
あぁそういうことか今使えるのは・・・
圭太『明久！一気にいくぞ！』
明久「分かってるよ！試獣召喚（サモン）！」

Fクラス吉井明久

物理　３２点

どうしようもないな・・・

圭太『明久！近衛部隊に宣誓布告だ！』

明久「吉井明久！近衛部隊に宣戦布告をします！」

よし！あとは姫路が仕留めるだけか

明久「姫路さん、そっちはよろしくね」

平賀「は？」

いやいや、何を言ってるんだこのバカはみたいな顔されても・・・

姫路「あ、あの・・・・」

平賀「え？あ、姫路さん。どうしたの？Ａクラスはこの廊下は通らなかったと思うけど」

姫路「いえ、そうじゃなくて・・・・・・・Ｆクラス姫路瑞樹です。Ｄクラス平賀君に現代国語勝負を挑みます。」

平賀「・・・・はぁ。どうも」

姫路「あの、えっと・・・・・さ、サモンです」

Ｆクラス　姫路瑞樹　ｖｓ　Ｄクラス　平賀源二

現代国語　３３９点　　１２９点

「え？あ、あれ？」

「ご、ごめんなさいっ」

さずがは姫路！反撃無しで殺すとは

こうしてＤクラス戦はたったの一撃で終わった。

第三話　Dクラス戦　開始！（後書き）

圭太「明久！」
明久「ん？なに？」
圭太「フィードバックってきついんだな」
明久「わかってくれるかい？」
圭太「もちろんだ！」
ココには絆？が結ばれていた！

第四話　Ｄクラス戦　終結！（前書き）

すみませんが問題は無しで・・・

第四話　Ｄクラス戦　終結！

Ｄクラス代表　平賀源二　討死

Ｆ『うおおーーっ！』

Ｆクラスの勝鬨が校内にこだました。

Ｆ『凄ぇよ！本当にＤクラスに勝てるなんて！』

Ｆ『これで畳や卓袱台ともおさらばだな！』

Ｆ『ああ。アレはＤクラスの連中の物になるからな！』

Ｆ『坂本雄二サマサマだな！』

Ｆ『荒井圭太は軍神だ！』

Ｆ『姫路さん愛してます！』

俺が軍神だなんて

照れるじゃねーかコノヤロ～♪

Ｆ『坂本！握手してくれ！』

Ｆ『俺も！』

雄二が照れてる

はっ！雄二はツンデレか？気持ち悪い・・・

秀吉「わしは圭太と握手したいのう」

秀吉、雄二がここまでやってたんだから雄二に求めてみては？

そう思っていると

明久「雄二！」

雄二「ん？明久か」

雄二が振り向くとそこには包丁を握りしめた明久が颯爽と駆け寄って、

って包丁？ペンチを持ってこなくては！

明久「僕も雄二と握手を！」

明久が雄二に包丁を突き立てようとした時

ガシッ（雄二が明久の手首を抑え）

グリッ（明久の手首をねじる）

カランカランッ（包丁が落ちる音）

雄二「・・・・・」
明久「・・・・・・」
沈黙に耐えきれず俺は
圭太「おい！雄二！ペンチだ！」

シュ（ペンチを投げる音）

パシッ（雄二がソレをつかむ）

明久「！？す、ストップ！僕が悪かった」
雄二・圭太「「・・・・・・チッ」」
生爪・・・
っはそれどころではない！
圭太「雄二早く帰ろう？」
雄二「ちょっと待て！代表と話がある」
早くしないと！俺の命が・・・（ガシッ）ほらキタァ～
秀吉「今日は一緒に帰れるかのう？」
圭太「そんなことして優子がきたらクラスのことを聞かれて折檻されるのがオチじゃねぇか！」

メシ！メシッ（掴まれているところの悲鳴）

圭太「雄二！早くしろ～命がおれの命が・・・」
雄二「今、終わったところだ」
雄二も終わったことだし早く秀吉の手を・・・
そうして逃走劇が始まった・・・

☆

雄二の家にて

圭太「危なかった～～」
秀吉たちは雄二の家を知らないはず・・・
雄二「あぁそうだ圭太」
圭太「なに？」
雄二「秀吉たちにここを教えておいたからなｗ」
圭太「こんのバカァァァァ！」

ピンポ～ン♪
地獄の鐘（インターホン）がなる
雄二「ちょっと出てきてくれないか？」
くそっ仕方が無い腹をくくるしかないか・・・（泣）

ガチャ（ドアを開ける音）

そこには優子と秀吉がいた

そのあとの記憶が無く
雄二の家に居たはずの俺が自分の家にいてベットで寝ていた
（ｂｙ　圭太　談）

第五話　屋上

現在　圭太の家にて・・・

目覚まし時計の音から圭太の朝は始まる。

ハッ！なんだもう朝か・・・
というより、なぜに木下姉弟？が家にいるのか？
秀吉「おはようじゃ圭太！」
優子「おはよう、圭太！」
圭太「なんで俺の家に居るんだ？」
優子「抵抗するからじゃない！」
圭太「俺がFクラスにいくとお前が折檻・・・じゃなくてお話になるじゃないか！」
優子「当たり前でしょ！それとも私といることが嫌なわけ？」
ヤバイ・・・ここで選択を間違えたら

・・・・殺される！

圭太「いや！そういうことではない、ただ俺は世の中は学力だけではないことを証明するためにFクラスに行ったんだ・・・じゃなくて行きました優子様～」
このジャンピング土下座でこの口調なら許される？

ガシッ（優子が間接を握る音）

優子「それほど行きたくなかったんだ～」
優子さん？殺気がとてつもなく痛いんですけどぉぉぉぉぉぉぉぉ
そのまま間接が逝ってしまった。

そして、今は、Fクラスに至る

☆

圭太「雄二！おはよう♪（昨日はよくも！）」
雄二「あぁ圭太かおはよう（仕方が無かったんだ）」
圭太「（今回は許してやる）」
雄二「（すまない）」
圭太「って何で今頃勉強だなんてしてんの？」
雄二「回復試験だからな」
圭太「えっ今日なの？」
秀吉「そのことも知らなかったのかのう？」
あたりまえだ！秀吉たちのせいだ！
まぁやっと実力が出せる・・・
ん？誰か来た
明久「おはよう圭太♪」
圭太「おはようバカ久♪」
明久「いきなり罵倒？！」
一日一回はこういうことを言わないと・・・ね？
雄二「おう！明久おはよう！」
明久「雄二にしたつもりは無いんだけど・・・」
雄二「なんだと！やるか明久（バカ）！」
明久「こっちのセリフだ！このゴリラ！！」
雄二・明久「「なんだとゴラァ」」
この中に入りたくないな～～
いまから勉強でもするか・・・

☆

圭太「あぁ～疲れた～～」
久しぶりに本気で解いたよ～
秀吉「うむ。疲れたのう」
康太「・・・・・（コクコク）」

だよねぇ～疲れるよねぇ～
えぇ～と今は昼だから屋上でも行きますか。
雄二「よし、昼飯食いに行くぞ！　今日はラーメンとカツ丼と妙飯とカレーにすっかな」
炭水化物ばっかだなそれでよく太らないことで
姫路「あ、あの。皆さん……」
姫路さんどったの？つつみ？
あぁ弁当ですか
姫路「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」
秀吉「おお、もしや弁当かの？」
姫路「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」
明久「迷惑なもんか！　ね、圭太！雄二！」
雄二「ああ、そうだな。ありがたい」
姫路「そうですか？　良かったぁ～」

そのときはまだ誰も知らなかった・・・あんな伏兵がいるだなんて

☆

現在屋上にて

秀吉「天気が良くてなによりじゃ」
姫路「あ、シートもあるんですよ」
明久「気持ちいいね！」
康太「……（コクリ）」
あぁ、平和だなぁ。
姫路「あの、あんまり自信はないんですけど……」
姫路が重箱を取り出し、その中身に圧倒される。

『おおっ！』

みんなが歓声を上げる。
明久「それじゃ、雄二には悪いけど、先に――」
圭太「さすがにフライングはちょっと・・・」
康太「・・・・・（ヒョイ）」
明久「なっ！ムッツリーニ！」
康太！エビフライを一気に口に入れては――

バタン

ガタガタガタガタ

顔面から地面に豪快に倒れた。

「……」

なんだ何がおきた？
姫路「わわっ！土屋君！？」
康太「・・・・・（ムクリ）」
康太は起き上がり、
康太「・・・・・（グッ）」
姫路に向かって親指を立てた。…足は尋常じゃないぐらいガクガクしてるけど？
姫路「あ、お口に合いましたか？　良かったですっ」
天然だここに天然がいる！
姫路「良かったらどんどん食べてくださいね」

ん？明久たちからアイコンタクトで通信を受信した。
明久（・・・・・さっきのどう思う？）

秀吉（演技には見えんのう）
圭太（当たり前だろ！人が倒れたんだぞ！）
明久（どうする？姫路さんには心配かけたくないのに・・・）
秀吉（仕方が無いのう・・・）
圭太（やめろそんなことしたら命が・・・）
そんなこんなで雄二（イケニエ）たちが帰ってきた。
雄二「おっ！うまそうだな」
雄二がひとつ弁当（兵器）をてにもつ
俺は止めたりしない！
昨日の仕返しだ！！

バタン（雄二が召されて倒れる音）

カランカラン（ジュースが倒れる音）

雄二！お前のことは忘れない！・・・多分
おっ！今度は雄二からのアイコンタクト通信を受信した。
雄二（毒を盛ったな）
失礼な奴だ
圭太（毒じゃない、これが姫路の実力だ）
明久（毒じゃないよ。姫路さんの実力だよ）
圭太（明久この弁当は俺が全部逝く）
明久（そんなことしちゃダメだよ）
秀吉（そうじゃ！なぜそんなことをして・・・）
クソッ時間が無い！
圭太「姫路！あれは何だ？」
よし！今ならいける

意識が・・・・ヤバイ

圭太（明久あとはたのんｄ）
姫路「あとデザートもあるんですよ！」
圭太（・・・明久・・・頼む）
明久「姫路さんあれはなんだ？」
姫路って引っかかりやすいね・・・感心している場合ではない
逝くぞ！荒井　圭太！今逝く！
姫路の料理の中でデザートを頼んではいけない
圭太「ちょっと明久・・・保健室逝ってくる・・・」
明久「行ってらっしゃい（ありがとう）」
秀吉「行ってくるがよい（すまぬ）」
圭太「じゃあな（いいんだ）」

そして圭太は階段を下る前に意識が落ちた・・・

第六話　Ｂクラス戦（前書き）

問題　以下の問いに答えなさい。
『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え
『Ｃ６Ｈ６』

教師のコメント
簡単でしたかね。

土屋康太の答え
『ベン＋ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント
君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え
『Ｂ－Ｅ－Ｎ－Ｚ－Ｅ－Ｎ』

教師のコメント
あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

荒井圭太の答え
『Ｗ☆Ａ☆Ｋ☆Ａ☆Ｒ☆Ｉ☆Ｍ☆Ａ☆Ｓ☆Ｅ☆Ｎ♪』

教師のコメント
そうですか・・・補習室に来てください。

第六話　Bクラス戦

現在Fクラス

ハッ・・・ココどこ？
そしてこの川は何なのさ～
あぁあそこに！
圭太「あぁ、あそこにおじいちゃんが手招きしてる！」
どこかに船渡しはないのか！
あの川を渡らなければ！

☆

圭太「・・・・・ハッ！」
秀吉「大丈夫かのう？」
秀吉がそういって緑茶を渡してくる。
っというより緑茶で姫路の料理は殺菌できるの？
まぁもらっておこう

圭太は緑茶を飲みながらFクラスを見渡す
ん？あれ？明久が居ない？
そうだ雄二に聞こう！
圭太「ねぇ雄二！」
雄二「なんだ？」
圭太「明久は？」
雄二「Bクラスのイケニエになった・・・」
雄二が合掌してるし・・・
明久（バカ）が悪いんだし助けに行かなくていいかな？
臨死体験した後だし・・・大丈夫だよね？
圭太はそのまま寝ることに専念した。

☆

明久「・・・言い訳を聞こうか」
やっぱりボロボロだな・・・みっともない
雄二・圭太「「予想通りだ」」
明久「くきぃー！殺す！殺し切るーっ！」
雄二「落ち着け」
ボスッ
ぬわ！っとそこは・・・鳩尾じゃね？
あ～ぁ伸びてんじゃねえか？
明久の死体？が転がっている・・・
秀吉「わしは帰るとするかのう～・・・圭太？」
圭太「久しぶりに一緒に帰るか！秀吉？」
秀吉「そうじゃのう」
圭太「じゃあ～そういうことで先に帰るよ雄二！」
雄二「あんまり寝てるんじゃないぞ！あと勉強もー」
圭太「わかってるって！」

俺と秀吉はFクラスを出て行った（というより帰った）

☆

雄二「さて皆、総合科目テストご苦労だった」
教壇に立った雄二が皆の方を向いている。
やっと全教科のテスト受けれた。
雄二「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」
F『おおーっ！』
あれだけテスト出来ないのに何でモチベーション下がらないんだろう。
雄二「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」
F『おおーっ』

雄二「そこで、前線部隊は姫路と秀吉に指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んでこい！」
姫路「が、頑張ります」
秀吉「うむ。任せるのじゃ」
Ｆ『うおおーっ！』
凄いな。こいつら

キーンコーンカーンコーン

雄二「よし、行って来い！目指すはシステムデスクだ！」
Ｆ『サー、イエッサー』

無駄に勢いが有るな

Ｆ「いたぞ、Ｂクラスだ」
Ｆ「高橋先生を連れているぞ！」
Ｆ「生かして帰すなーっ！」
無駄に強気だし・・・大丈夫か？

Ｂクラス　野中長男　ＶＳ　Ｆクラス　近藤吉宗

総合　　１９４３点　　７６４点

おぉ～！本当に大丈夫か？
しゃあない
圭太「近藤！そこをどけ！俺がもてあそんでやる！」
Ｂ『あいつは・・・Ｄクラス戦の前線を一人で保ったやつだ！』
Ｂ『けどあいつは学力が低いから一気にかかれ！』
ッ！！まぁ言うだけ言っとけ！

潰してやる！！
圭太「Ｆクラスだからってなめんなよぉ～～
荒井圭太！殺ります！試獣召喚（サモン）！」

Ｂクラス　野中長男　ＶＳ　Ｆクラス　荒井圭太
総合　１９４３点　７４８０点

Ｂ・Ｆ『なんだってぇぇ～～！』
Ｂ『あいつはバカじゃないのか？』
Ｂ『あんなのに勝てる気がしない・・・』
Ｆクラスだからってなめるからいけないいんだよ！

そのまま勢いでＢクラスの召喚獣を切り捨てる
西村「戦死者は補習～～」
がんばるんだ！西村先生～～！ん？

Ｂ「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」
姫路も殺ったみたいだな
Ｂ「なっ！そんな馬鹿な！？」
Ｂ「姫路瑞希、噂以上の相手だ！」
Ｂ「それに一人化け物みたいのがいるぞ！」
Ｂ「何！姫路瑞希よりも危険だというのか？」
Ｂ「ああ。姫路瑞希を軽く凌駕している」
うれしいですねぇ～
褒めてくれます！
えっ！褒めてないの？
まぁ～いまは戦争に集中だ～♪
けど・・・・
圭太『そろそろ根本が何かしてくるころだろうからな・・・明久！』

明久「？」
圭太『一旦退却だ！』
明久「じゃあ、姫路さんも一緒に」
圭太『そうだな。おい！姫路』
姫路「ああ、はい。何ですか？」
圭太『一旦教室に戻るぞ』
姫路「分かりました。それでは皆さん頑張ってください！」
F『やったるでぇーっ！』
F『姫路さんサイコーっ！』
やっぱりバカばっかりだ・・・

☆

圭太「根本って想像してたよりもっと器が小さい男だったんだな」
姫路「酷いですね」
秀吉「まさかこうくるとはのう」
明久「卑怯、だね」
教室に戻ったら穴だらけの卓袱台とヘシ折られたシャープや消しゴムが俺達を迎えてくれた
許すマジ根本！！
圭太「雄二。どうしてこうなったんだ？姫路を下げるんだから協定何ぞ受ける必要ないだろう？」
俺の一番の疑問を雄二に質問する。
雄二「嫌、そうでもないぞ。相手が持ち込んできたから話を聞くために教室を出たんだが、どうやらその間にやられたらしい」
たったそれだけで行ったのか・・・
明久「雄二！どういうことさ？」
おっ！よくいいところに気がついたな
雄二「簡単な事だ。Fクラスの主力は姫路と圭太だからな。それと姫路の体力面に問題があるからな。いくら後方や護衛に回してキツイもんはキツイからな」

圭太「成程。そういう理由なら仕方ないな」
そうだったのか・・・
秀吉「それでは儂らは前線に戻るぞ」
圭太「雄二！あとは頼んだよ～」
雄二「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう」

さぁて
根本次（ゴミ）は何をしてくれるんだ？

俺は秀吉たちと一緒に戦線に戻った

第六話　Bクラス戦（後書き）

戦闘シーンがうまくかけません（泣）

第七話　Ｂクラス戦

現在廊下にて

圭太「じゃあ秀吉よろしく～」
秀吉「任せるのじゃ」
秀吉は殺る気満々で圭太たちと別れる

さて明久たちの軍隊の様子でも見ますか！
明久「あぁ！圭太！」
圭太「どったの？明久」
明久「Ｂクラスの連中が卑怯な手を使ってるんだ！」
その場所を見ると
島田がＢクラスにつかまっていた・・・
圭太「試獣召喚（サモン）」

Ｆクラス　荒井圭太　ＶＳ　Ｂクラス２人

英語Ｗ　　７２３点　　平均２３点

どこまで弱ってんだ、Ｂクラス・・・
明久「ダメだよ！圭太！あれは偽者だよ！」
バカか・・・明久・・・あぁバカだったな明久は

Ｂ『こいつがどうなってもいいのか』
Ｂ『そ、そうだぞ』
圭太『関係ない』

バンバンっ（Ｍ９２Ｆで打ち落とす音～）

西村「戦死者は補習～」
圭太『お疲れ様です。ＢＩＧ　ＢＯＳＳ！』
西村先生に敬礼！　（ビシッ）
明久「みんな！離れるんだ！そいつは偽者だ！」
まだ勘違いしてるのか・・・
どっか行こう

明久「あぁー島田さん！その右腕だけはまがらなっ・・・・」
聞いてないことにしておこう

☆

教室に付いたら何か死体？になった明久がいた
圭太「コイツに何が有ったんだ？」
雄二「ああ、どうも島田を怒らせたらしいんだ」
そうか、やっぱりか・・・

圭太「雄二、戦況は？」
雄二「ん？ああ、これだ。こちらの被害も少なくないが、一応計画通り教室前に攻め込めたぞ」
言いながら雄二はこちらの被害が書かれたメモを渡してくる。
被害は予想内だけど
圭太「戦死者多くない？」
雄二「嫌。これでも俺の予想よりは少ないから大丈夫だろう」
そういうものなのか？

康太「・・・・・・・（トントン）」
雄二「お、康太。どうした」
ビックリしたぁ～いきなり出てこないでよ～
雄二「何、Ｃクラスが怪しい？」

康太「・・・・・・・・・（コクリ）」
雄二「漁夫の利って訳か。下らん奴等だ」
ん？Ｃクラス代表って確か
圭太「雄二。今Ｃクラスに行くのは不味いと思う」
雄二「圭太？どう言うことだ？」
圭太「Ｃクラス代表は確か小山だったよね雄二？」
雄二「それがどうしたんだ」
圭太「あいつは根本と付き合っているらしい」
雄二「本当か。それは？」

みんな？
あの小物がつきあってるからって殺気立つな！

雄二「まあ、どっちにしても行かないとな。このままじゃ面倒なことになる」
明久「そうだね。早く行かないとＣクラス代表が帰るかもしれないし」
圭太「んじゃあ、行くか」
秀吉「うむ。行くのじゃ」
雄二「いやっ！秀吉にはここにいてほしい」
秀吉「何故じゃ？」
雄二「秀吉の顔を見られると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな
あと圭太はこの協定に失敗したら血路を広くため外で待機してくれ」
圭太「は～い」

こうして協定を結びにＦクラスを出ていった。

☆

Cクラスが騒がしいな、失敗デモシタノカナ雄二？

そう思っていると雄二たちが出てきた

やっと殺れる！

ん？明久じゃねえか？何そこで壁作ってんの？

圭太「明久！援軍だ！」

明久「圭太！援軍はいらない島田さんといっしょにここでBクラスを潰す！」

圭太「分かった！Fクラスで待ってるよ！」

明久たちと離れる・・・って俺がココに来た意味は？

☆

教室にて

圭太「雄二！Cクラスはどうする？」

雄二「あぁそのことなら明日に実行するから楽しみにしてろ」

楽しみにでもしますか！

第八話　Bクラス戦（前書き）

これでBクラス戦終わらせます！

第八話　Bクラス戦

現在Fクラスにて

圭太「じゃあ雄二！昨日の作戦を！」
雄二「分かっている・・・まず秀吉！」
秀吉「なんじゃ？」
雄二「秀吉にはこれを着てもらう」
雄二が出したものは女子の制服だった
というより
なぜ

2着？

秀吉「あと一人は誰が着るのじゃ？」
秀吉が俺が疑問に思っていたことを先に言ってくれた。
雄二・・・さっきから目線が気持ち悪いほど来てるんだけど・・・

雄二「あと一人は圭太に着て貰う」
圭太「何で！？」
明久「う～ん、じゃあこれをかぶって！」
明久がカツラをとりだす
どっからだしたんだ？

圭太はシブシブ、カツラをかぶる

F『美少女キターーーー』
F『男の娘キターーーー』
F『付き合ってくださ・・・（バキッ）・・・』

最後のやつは気にさわる！

こうして俺たちは女装した。

F『おぉ～～～～』

変な目線で見られた・・・
このやろう雄二め・・・借りを返してやる
雄二「その格好で挑発して来い」
秀吉「では行って来るのじゃ！」
圭太「・・・・・・・・・・・・」
秀吉に引っ張られて
Cクラスへ出発した

☆

現在Cクラス

秀吉『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

あれ？優子ってこんな感じ？

小山『な、何よアンタ達』
秀吉『話かけないで！豚臭いわ！』
小山『Aクラスの木下と誰かしら？可愛いわね・・・じゃなくてちょっと点数良いからって良い気になってるんじゃないわよ！何の用よ？』

ちょっと待つんだ小山さん俺のことをそんな風に仕立て上げないで！

秀吉『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

Fクラスは豚小屋と言っているのですか？

小山『なっ！言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！？』

ほら来たぁ～

秀吉『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達全員を始末してあげようと思うの』

特別なんだー（棒読み）

秀吉『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私たちが薄汚い貴方達を始末してあげるから！』

そう言い残しCクラスを出る

俺って空気的な存在じゃなかった？

秀吉「これでよかったかのう？」

すっきりしてるよ秀吉の顔！

雄二「すばらしい仕事だった」

小山『Fクラスなんて相手してられないわ！全力でAクラスを潰しにいくわよ！』

C『おおーっ！』

あっ！ヤバイこのことが知れたら秀吉の命が・・・

けど試召戦争まで時間が無いし急ぐか・・・

早足でFクラスへと向かった

☆

秀吉「ドアと壁をうまく使うのじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ

圭太「お前ら！勝負は単教科で挑め！常に2～3人で囲んで潰してしまえ！後、補給は念入りに行え！」

F『おおーっ！』

F「左側出入り口、押し戻されています！」

F「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」

流石に負けそうだなぁ。

圭太「俺が行く！試獣召喚（サモン）！」

Fクラス　荒井圭太　ＶＳ　Bクラス　１２人

古典　　５８２点　　合計　１４６７点

約三倍以上か

やばいかも

圭太がBクラスの召喚獣が来る前に身構える

そして一体が圭太に攻撃を仕掛ける

っが、あまりにも直線的攻撃だったためＭ９２Ｆの銃弾で剣の軌道をそらし日本刀で切る！

ザシュっとね♪

あと１１人か・・・

圭太『さっさとかかってこいや～！』

ん？明久？どうした？

戦線離脱か？まぁいい

今はこの勝負に集中するか・・・・

圭太は５分でＢクラスを蹴散らした

メールが！

フム・・・分かったよ雄二！この作戦だな！

☆

ドンドンッと壁が鳴り響く

雄二と小物が何か話しているが戦闘に集中していて聞こえない

ドンッ

雄二「圭太！一旦引くぞ！」

圭太『へ～い』

ドガンッ（Ｄクラスの壁とＢクラスの壁が開通する音～）

壊した穴から明久や島田が飛び出してくる。
随分と豪快な作戦だな
というより明久
フィードバック大丈夫？

島田「遠藤先生！Ｆクラス島田が――――」
Ｂ「Ｂクラス山本が受けます！試験召喚（サモン）」
まだ、生きてたのか近衛部隊
てか、小物ビビり過ぎじゃね？

圭太「残りの相手は俺がしてやるから早く根本倒せよお前ら」
雄二の方を向くと頷いたから殺っていいってことか

明久「分かってるよ圭太！」

明久たちが近衛部隊を引き付けている間に

ダンッ！ダンッ！

康太がＢクラスの窓から出てきた！

康太「・・・・・・Ｆクラス、土屋康太」

全員戦闘中で根本の助けに行けないねぇ。

小物「き、キサマ・・・・！」

康太「・・・Ｂクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」
小物「ムッツリィ二ィーーッ！」

康太を見ただけでその名が浮かぶ彼はダメな気しかし無いけど・・・

康太「――――――――試験召喚（サモン）」

Ｆクラス　土屋康太　ＶＳ　Ｂクラス　根本恭二
保健体育　４４１点　２０３点

流石は康太だ。
保健体育だけならＡクラスより高いからな。

こうして

Ｂクラス戦は終結した！

第八話　Bクラス戦（後書き）

圭太「まさか女装させられるとは・・・ＯＴＬ」
作者「仕方が無いんだよ・・・中性的な顔だから」
圭太「しかも変な目線で見られて・・・小山さんから可愛いといわれ・・・
　　みんな嫌いだぁ～～（泣）」
作者「あ～ぁ帰っちゃったよ～あとこれからも
『俺と幼馴染とバカたちと！』をよろしくお願いします～」

第九話　Ｂクラス　対戦後（前書き）

第九話　Bクラス　対戦後

現在Bクラス

圭太「明久、随分豪快な作戦を実行したな」
秀吉「明久、随分と思い切った行動に出たのぅ」

終戦後明久の近くに行って話かける。

明久「ううー・・・。痛いよう、痛いよう・・・・」

何て言うか

圭太「フィードバックがあるのに・・・自業自得だ。明久」
秀吉「なんとも・・・・・お主らしい作戦じゃったな」

秀吉?明久にバカって直に言いそうになっただろ?

明久「で、でしょ?もっと褒めていいと思うよ」
秀吉「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」
圭太「後先考えず自分の不利になることばかりする、何とも明久(バカ)らしい作戦だ」
明久「遠まわしに馬鹿って言ってるでしょ!」

そうだけど?

雄二「ま、それが明久の強みだからな」

だよね～～

雄二「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表」

雄二が根本の方に向き直る
小物、今までの強気が嘘のようだ。

雄二「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言をにザワつく一同
まぁクラスが変わらなくて済むからな～

雄二「お前ら、俺達の目的はＡクラスだ。ここは通過点に過ぎない」

雄二が言うと皆納得したように頷いた。

小物「条件はなんだ」
小物が力なく問う。

雄二「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」
小物「俺、だと？」
雄二「ああ、お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」
圭太「ってその条件は・・・これを着てもらおう！」

俺は女子の制服（Ｃクラスに行くときに手に入った）を取り出す
どういう風に女子の制服を処理するか迷ってたんだよね～

圭太「そして、そのままの格好でAクラスに試召戦争の準備ができてますっていって来たら免除っと言うことで♪」
B『Bクラス全員で実行しよう！』
B『それでBクラスが守られるのなら』

人望無いね～小物？
っとおもっていると小物がBクラスにやられている
それより女子の制服って複雑だなぁ～
着せ方が分からない・・・

B『私たちがやってあげようか？』

ありがたい！
そう思って振り返ると姫路にやられた岩下さんと菊入さんだった

圭太「ありがとう～岩下さんに菊入さん！（ニコッ）」

女子（姫路・島田を除く）『・・・・・／／』

どったの女子の皆さん？
顔赤いですよ・・・？
秀吉もどうしたんだ？熱か？

圭太「まぁ～とりあえずよろしく♪」

小物の女装が出来上がるまでFクラスで寝ていた

PS　小物の女装まじハンパねぇ

☆

ところ変わってFクラス

雄二「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している」

雄二が礼を言ってる。

明久「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

明久に同意

雄二「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

ああ、やっぱりこいつは格好良いな。

雄二「残るAクラス戦は一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

F『どういうことだ？』

F『誰と誰が一騎打ちするんだ？』

F『それで本当に勝てるのか？』

圭太「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二「やるのは当然、俺と翔子だ」

まあ、当然だな。

代表同士の一騎打ちで決着はすぐつくし交渉も簡単に終わるからな～

問題は勝てるかどうかということだ。

明久も同じことを思ったらしい

明久「馬鹿な雄二が勝てるわけなぁぁっ！？」
雄二「次は耳だ」
圭太「そこは目だろ！まったく何を考えているんだ雄二！」
明久「怖いよ！それまた怖いよ！」
圭太「で、雄二の事だ。勝てる勝負をするんだろう？しかし、翔子に苦手科目何て有ったっけ？」
雄二「ああ。日本史でレベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、純粋な点数勝負だ」

翔子って日本史苦手だったかな。
なんかで気をそらすのかなぁ

明久「でも、それじゃあブランクのある雄二には厳しくない？」
秀吉「確かに明久の言うとうりじゃ」
圭太「どうせ雄二の事だ。何か秘策でも有るんだろう？」
雄二「圭太の言う通りだ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると俺が知っているからだ」

ある問題？翔子にその問題は無いだろう？

雄二「その問題は――――『大化の改新』」
圭太「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるか見たいな感じか？」
雄二「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」
圭太「単純というと――――何年に起きた、とかか？」
雄二「ビンゴだ圭太。その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ」

確か６４５年だったな。
翔子がそんな問題答えられないとはとても思わんが

雄二「ちなみに、大化の改新が起きたのは６４５年だ、明久」

今、思いっきり目逸らしやがった。

何年で覚えているんだ？

雄二「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばだ」

姫路「あの、坂本君に荒井君」

雄二「ん、何だ姫路？」

圭太「ん、俺もか？姫路？」

姫路「霧島さんとは、その・・・・仲が良いんですか？」

雄二・圭太「「ああ。アイツとは幼なじみだ」」

明久「総員、狙えぇっ！」

雄二「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

圭太「ちょっと待て、関係ないだろう！？」

こいつらは、何でこんな時だけスペックが高いんだ？

明久「黙れ、男の敵！Ａクラスの前にキサマ達を殺す！」

圭太「そんなの関係ねぇじゃねぇか！」

くそ、無駄な団結力を見せやがって

明久「遺言はそれだけか？・・・・・待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

須川「了解です隊長」

本当に無駄なスペックだ。

姫路「あの、吉井君」
明久「ん？なに、姫路さん」
姫路「吉井君は霧島さんが好み何ですか？」
明久「そりゃ、まあ。美人だし」

バカだな明久

明久「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと、美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険物を投げようとしているの？」

自業自得だ。

秀吉「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

俺の命が助かった。

明久「む。秀吉は雄二と圭太が憎くないの？」

俺たちは関係ないだろう

秀吉「良くかんがえるのじゃ、相手はあの霧島翔子じゃぞ？それに男である雄二と圭太に興味があるとは思えんじゃろうが」

うんうん♪

秀吉「むしろ、興味があるとすれば・・・・・・・」

目線が姫路に集まっている・・・

翔子、お前凄い誤解を受けているぞ。ほら、姫路が困ってるじゃないか。

雄二「とにかく、俺と圭太と翔子は幼なじみで、小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ。アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

まぁ俺もそうだが・・・

雄二「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は――――――」

F『システムデスクだ！』

そしてAクラスへと向かった

第十話　Ａクラス戦　戦争開始！

優子「一騎討ち？」

宣戦布告中です。

雄二「そうだ。ＦクラスはＡクラスに代表同士の一騎討ちを申し込む。」

優子「何を企んでいるのかしら？」

雄二「Ｆクラスの勝利それ以外に目的はない。」

優子「面倒な試召戦争を手っ取り早く終わらせるのはいいけれど、わざわざリスクを侵す必要はないかな。」

雄二「懸命な判断だ。そういえば今日のＣクラス戦はどうだった？」

優子「時間をとられただけよ。」

雄二「Ｂクラスとやり合う気は？」

優子「Ｂクラスって、昨日来てたあの女装野郎？」

雄二「すごいだろ。うちのクラスの奴がやったんだ。さて、まだ、宣戦布告はされてないようだが、この先はどうなるかな？」

優子「ＢクラスはＦクラスに負けたから、宣戦布告は出来ないのでしょう。」

雄二「ところがどっこい、和平交渉って、ことになっているから、出来るんだよ。」

圭太「Ｄクラスとも、和平交渉っということで終わらせているぞ」

優子「脅されてる訳ね。」

そうです。

雄二「そんな、ただのお願いだよ。」
優子「Fクラスのくせして。」
圭太「それなら5回戦勝負でお願いします。」

現在土下座という姿勢です。
ガチでお願いします

優子「う～ん・・・・それならいい（翔子）「……ちょっと待って優子。」だ、代表！」
霧島「……科目選択権は2つは私達がもらう。あと負けたほうはなんでも言うことをひとつ聞くこと」
雄二「わかった！交渉成立だ」

そうしてAクラスを後に・・・？

優子「圭太！ちょっと良いかしら？」
圭太「よろしくありません・・・あっ！ちょっと待って、すみませんでしたから折檻だけはどうかお慈悲を！」
優子「それぐらいどうでも良いわ・・・あの交渉ってあなたにも有効なのよね？」
圭太「内容によるけどたぶん良いんじゃない？」
優子「そう？ならいいわ、もどっていいよ」

拷問？から帰省した圭太の姿があった。

☆

高橋「では、両名共準備は良いですか。」
雄二「ああ。」
霧島「……問題ない。」

高橋「それでは、一人目の方どうぞ。」
佐藤「私から行きます。科目は物理でお願いします」

相手は佐藤さん。この5対5の勝負に出てくるということは相当な実力者だろう。

雄二「よし。頼んだぞ、明久」
明久「え!?　僕!?」
圭太「明久(イケニエ)がんばれ～♪」

まあ他の誰かを出すよりかは観察処分者で召喚獣の操作に慣れている明久が適任だろう。
生け贄としても・・・・・・

雄二「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

雄二、お前はそこまで明久のことを信頼しているんだね。
負けるということに

明久「ふぅ・・・・・・やれやれ、僕に本気を出せってこと?」

本気?　まさか俺が知らない明久(バカ)の真の力があるというのか!?

雄二「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」
F『おい、吉井って実は凄いヤツなのか?』
F『いや、そんな話は聞いたことはないが』
F『いつものジョークだろ?』
佐藤「吉井君、でしたか?　あなた、まさか・・・・・・」

だよね～！明久（バカ）が何をしでかすか・・・お兄さん心配だなぁ

明久「あれ、気づいた？　ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

明久はそう言い終わると袖をまくり、手首を振る。

佐藤「それじゃ、あなたは・・・・・・！」

明久「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕――――」

大きく息を吸い・・・・・・

明久「――――左利きなんだ」

言い放った。明久の観測でもしてみようかな～

どうやって生きているのかとか～　常識は持ち合わせているのかとか！

Ａクラス　佐藤美穂　ＶＳ　Ｆクラス　吉井明久

物理　３８９点　ＶＳ　６２点

島田「このバカ！　テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

明久「み、美波！　フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

雄二「よし。勝負はここからだ」

明久「ちょっと待った雄二！　アンタ僕を全然信頼してなかったでしょう！」

雄二「信頼？　何ソレ？　食えんの？」

圭太「信頼かぁ～材料は何かな～」

悪ノリしてみる

高橋「では、二人目の方どうぞ」

康太「・・・・・・・・・・・・・（スック）」

康太が立ち上がる。

工藤「じゃ、ボクが行こうかな」

工藤か・・・情報はあんまり知らないな

工藤「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

高橋「教科は何にしますか？」

康太「・・・・・・・・・・・・・保健体育」

康太が保健体育か・・・心配無用か！

工藤「土屋君だっけ？　随分と保健体育が得意みたいだね？」

やっぱり康太も名が高いな

工藤「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？　・・・・・・キミとは違って、実技で、ね♪」

実技って・・・スポーツだよね！

工藤「そっちのキミ、吉井君だっけ？　勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えようか？　もちろん実技で」

明久、お前に矛先が向いてるぞ

明久「フッ。望むところ――――――」
島田「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」
姫路「そうです！　永遠に必要ありません！」

スポーツってすぐに機会が訪れる思うけど・・・？

『・・・・・・・・・・・・』
雄二「島田に姫路。明久が死ぬほど悲しい顔をしているんだが」
工藤「それじゃあ～そこの荒井君よかったらどう？」
優子「圭太～事と言葉によって・・・」
秀吉「どうなるかわかるかのう？」
優子・秀吉「「圭太！」」

優子と秀吉が怖いです。
だれか！誰か！支援救済を要請します！

高橋「・・・・・コホンッそろそろ始めてください。」

ありがとう先生！助かったよ！

「はーい。試獣召喚（サモン）」

「・・・・・・・・・・・・試獣召喚（サモン）」

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

Ａクラス　工藤愛子　ＶＳ　Ｆクラス　土屋康太

保健体育　４４６点　ＶＳ　５７６点

フンッ！どうだ工藤！康太の実力を・・・理論派を！

工藤「っ！？　ならこれでどうだ！」

工藤がスカートを捲りあけてスパッツが見える

康太「・・・・・・・・・（ブシャァァァァァァァァァ）」

圭太「康太ァァァァアアアア！」

やばいこの量は・・・・・・・・・・尋常じゃない！

圭太「雄二！これじゃあ康太は使えない！」

雄二「あぁ・・・そうだな・・・高橋先生こちらは棄権で」

圭太「康太！大丈夫か？今すぐ保健室行くぞ！」

そうやって康太を保健室に連れて行く

いきなり０勝２敗か・・・

Ａクラス戦は続きます。

第十話　Aクラス戦　戦争開始！（後書き）

ここでオリキャラを出したいと思います！

多分・・・・

第十一話　Ａクラス戦

康太を保健室に連行して圭太はＡクラスへと向かっていた。

ん？秀吉が倒れてるけど・・・・・・

圭太は、恐る恐るＡクラスを覗いた

犯人は優子か・・・

じゃあまず、やることは・・・

圭太「すんません遅れました～」

雄二「圭太！お前のせいで秀吉が犠牲にな――」

圭太「って相手は？」

雄二「人の話を最後まで聞け！・・・まぁいい・・・相手は学年次席の」

えっ？学年次席って久保君だよね？その相手って姫路じゃないの？

雄二「――お前の

妹だ！」

圭太「Ｗｈｙ？ＭＹ　ＳＩＳＴＥＲ？」

荒井　椎？

俺の妹だと！ちょっと待つんだ！俺の妹だと！

両親が海外で監禁してたはず！
それが来ているだと・・・・
ちょっと待て！こっちに来ているならメールが来ているはず！

圭太は携帯を取り出す。

・・・

そうか～そういうことだったのか～（棒読み）
両親からメールが来ていただなんて・・・知らなかった。それも

一週間前にきていただなんて

雄二「圭太！ボサッとしてないでさっさとして来い！」
圭太「へ～い」
椎「あっ！圭太ちゃん！このまえ家に行ったけど、家がないんだけど？」
圭太「引っ越したからな・・・優子たちの近所に・・・」

そう、優子たちは引越しした先で知り合ったそのときに椎は居ない

椎「あっそうなの？優子？」
優子「・・・うん。」

優子？どうした？暗いぞ？

圭太「まぁいい、やるぞ！椎！試獣召喚（サモン）」
椎「試獣召喚（サモン）」

Fクラス　荒井圭太　ＶＳ　Ａクラス　荒井椎

総合　　７８３０点　　５８９０点

Ａ・Ｆ『学年主席を抜いただと!?』

圭太『椎!お前!その学力はどうしたんだ?』

椎「ここに圭太ちゃんがいるって教えてくれたからね♪」

圭太『おい!雄二!なにが、学年次席だ～!主席レベルじゃねえか～』

雄二「お前が人のことを言うか?」

みんなビックリしてるね。俺も椎の勉強があれほど凄いとは知らなかった・・・

さあ始めようか

圭太は椎の召喚獣に向けて銃弾を放つ

っが打ち払われてしまう。

圭太『操作技術が高いだと!?』

椎の召喚獣は一向に攻撃してこない・・・なぜにそれにたいして椎がこっちに近づいているそして・・・・・

椎「圭太ちゃん!捕まえた～」

そういって俺が捕まる・・・召喚者が召喚獣に危害をくわえていいの?

圭太『高橋先生！この状況どう思いますか？』
高橋「荒井椎さんの行為は違反に入りますのでこの勝負はＦクラスの勝ちとします。」

あっぶなかった～
あのままあの点数で切られていたら一溜まりもない
というかショック死すると思う・・・たぶん

圭太「すまない椎！これは戦争だからな」
椎「別にいいけど、家に帰ったらいろいろして貰うから」

そのいろいろって言う言葉が引っかかるな～

高橋「これで２対２です。最後の一人、どうぞ」
翔子「・・・・・はい」
雄二「俺の出番だな」

二人が前に出る

高橋「教科はどうしますか？」
雄二「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

雄二の言葉でＡクラスにざわめきが生まれた。

Ａ『上限ありだって？』
Ａ『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』
Ａ『注意力と集中力の勝負になるぞ・・・・・』
高橋「わかりました。そうなると問題を用意しなければいけません

ね。少しこのまま待っていてください」

先生が出て行った後、みんなが雄二に駆け寄る。

明久「雄二、後は任せたよ」

雄二「ああ。任された」

康太「・・・・・・・・・・・・・・（ビッ）」

雄二「お前の力には随分助けられた。感謝している」

康太「・・・・・・・・・・・・・・（フッ）」

姫路「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」

雄二「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」

姫路「はいっ

圭太「今しか証明ができないぞ・・・しくじるなよ雄二」

雄二「あぁわかっている」

圭太「行ってらっしゃい」

雄二「おう、行ってくる」

それぞれが言いたいことを言った。

視聴覚室・・・

高橋『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は１００点です』

高橋『不正行為等は即失格になります。いいですね？』

翔子『・・・・・・はい』

雄二『わかっているさ』

高橋『では、始めてください』

黙々と問題を解いていく二人。
果たしてあの問題はあるのか？

《次の（　）に正しい年号を記入しなさい》

（　）年　平城京に遷都
（　）年　平安京に遷都
（　）年　鎌倉幕府設立
（　）年　大化の改新

あ・・・・・・！　あった！

明久「秀吉、これで・・・・・・」
秀吉「うむ、ワシらの卓袱台が」

秀吉がいつのまに！？

F『システムデスクに！』

明久「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

F『うぉぉぉぉっ！』

明久の声と共に皆が叫ぶ。

《日本史勝負　限定テスト　１００点満点》

《Ａクラス　霧島翔子　９７点》
ＶＳ
《Ｆクラス　坂本雄二　５３点》

Ｆクラスの卓袱台がみかん箱になった。

第十一話　Aクラス戦（後書き）

圭太のもとに妹さんが帰省しました。
このあとはどうなることやら。

第十二話　Ａクラス戦　終結

「三対二でＡクラスの勝利です」

無情にも響き渡る高橋先生の声。

翔子「・・・・・・雄二、私の勝ち」

雄二「・・・・・・殺せ」

明久「良い覚悟だ、殺してやる！　歯を食いしばれ！」

姫路「吉井君、落ち着いてください！」

姫路さんが明久を止めるために後ろから抱きつく。

明久、胸当たってるのに気づいて無いのかな？

明久「だいたい、５３点ってなんだよ！　０点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だとーーー」

雄二「いかにも俺の実力だ」

明久「この阿呆がぁーっ！」

あぁ雄二はバカだそして明久も

島田「アキ、落ち着きなさい！　アンタだったら３０点も取れないでしょうが！」

明久「それについて否定はしない！」

姫路「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

明久「くっ！　なぜ止めるんだ姫路さんに美波！　この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

姫路「それって体罰じゃなくて処刑です！」
翔子「・・・・・でも、危なかった。雄二が所詮小学生の問題だと油断していなければ負けてた」
雄二「言い訳はしねぇ」
翔子「・・・・・ところで、約束」

さてさて、雄二、こっからが地獄だ

康太「・・・・・・・・・・・・・！（カチャカチャカチャ）！」

流石は康太早くも撮影の準備をしている。

雄二「わかっている。何でも言え」
翔子「・・・・・それじゃーーー」

翔子「・・・・・雄二、私と付き合って」

雄二「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」
翔子「・・・・・私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」
雄二「その話は何度も断っただろ？　他の男と付き合う気はないのか？」
翔子「・・・・・私には雄二しかいない。他のひとなんて、興味ない」

昔から一途だからね

雄二「拒否権は？」

翔子「・・・・・無い。約束だから。今からデートに行く」
雄二「ぐぁっ！　放せ！　やっぱこの約束はなかったことにーーー」

がんばれ～翔子

西村「さて、Ｆクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

この野太い声、まさか！

明久「あれ？　西村先生。僕らに何か用ですか？」
西村「ああ。今から我がＦクラスに補習についての説明をしようと思ってな」

マジですか？

西村「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるようだ。
これから一年、死にものぐるいで勉強できるぞ」

Ｆ『なにぃっ！？』

なにぃ！？　（ガシッ）ってぬわぁ～

圭太が引っ張られた先には優子の姿が・・・

優子「さぁ圭太？約束があるんだけど？」

やけにテンションが高いですね

優子「それじゃあ～二人っきりで買い物でも――」

秀吉「待つのじゃ姉上！」
椎「そうよ！優子！明日は圭太ちゃんと映画でも見に行こうとしてたのに！」

っはい？俺は圭太ちゃんではありませんよ？
って気づくとこのそこじゃないの？

圭太「なら４人で行くッというのは？」
秀吉「それがいいのう」
椎「仕方が無いわね」

椎・・・仕方が無いのですか・・・

優子「でも、約束が・・・まぁいいわ、それで」
圭太「なら決定～」

こうして家へと帰った

☆

帰路にて

なんで三人は買い物に行きたいのかな？
椎なら分かる気も・・・知れないが
なぜに？

ここには圭太（バカ）という鈍感が居た・・・

第十二話　Aクラス戦　終結（後書き）

やぁっと終わりました～～
あとは清涼祭に強化合宿などですね～

オリ話はどうしたら良いのか分かりません。
誰か助けて～～

じゃなくて、感想などよろしくお願いします。

第十三話

Aクラス戦が終わり圭太の家では・・・・・

圭太「どこの部屋がいい？」

椎「もちろん、圭太ちゃんの部屋♪」

そうか・・・なら

圭太「じゃあ俺は違う部屋に変えるか」

椎「ちょっと待ってよ！それじゃあ意味がないじゃない圭太ちゃん」

圭太『ちゃん』？

圭太「まず、その圭太『ちゃん』はやめよう！」

椎「それで、圭太の部屋はどうするの」

そうなったら・・・

圭太「あたらしい家でも探すか・・・」

椎「大丈夫！ちゃんと付いてきてあげるから♪」

圭太「来ないでください！俺の自由がまた無くなる！」

俺に一人暮らしが・・・（泣）

椎「それじゃあ、今日は一緒に風呂にでも入ってくれたら良いけど？」

圭太「マジ！すんませんした。自分調子くれてました！自分が悪かったです！それだけは勘弁を！」

椎「そこまで嫌がることは無いんじゃない？」
圭太「たとえ兄妹だろうと変態というレッテルを貼られたら生きていけません！」

そんなへんなレッテル張られている状態で世間にさらされたくない！

そうしてそんなこんなで部屋は別々になりました。

（たすかった　ｂｙ圭太）

☆

目覚ましと、ともに朝が始まる。

（う～ん・・・・・ん？）

体の横に何か居る！

恐る恐る横を見ると椎の姿があった

圭太「おぉ～い起きろ～」
椎「うぅ～ん・・・・・あっおはよう圭太♪」
圭太「ここって椎の部屋？」
椎「違うけど・・・・・なんで？」
圭太「問題大有りでしょう！？ったく、とにかく！この部屋から出ていってよ！」
椎「着替えを見るまで・・・（ジーッ）」

危ないこの人！絶対危ない！

圭太「あぁもう！早く出て行け！」
椎「はいはい分かりました！（ポチッ）」

ん？ポチッ？

圭太「何だ？今の音？」
椎「この部屋のカメラが作動してるの」
圭太「・・・・そうですか・・・・・でてってください。」
椎「はぁ～い♪」

椎が出て行って、監視カメラを取り外すのに5分かかった。
そして圭太がリビングに向かうと

優子「おはよう♪圭太♪」
秀吉「おはようじゃ♪圭太♪」

うっ！これは罠だ！孔明の罠だ！嘘だ嘘に決まっている。
戸締りはちゃんとしているのに！

圭太「おはよう～優子に秀吉～」

そして圭太が殺気を出しながら

圭太「ねぇ・・・どうやって入ってきたの？」
優子「そ、それは～ね、ねぇ秀吉？」
秀吉「そ、それはじゃのうあ、姉上？」

しらを切る気か！断じてさせん

圭太「本当のことを言わないと実力行使と行くよ～？」

秀吉「わ、分かったのじゃ・・・・ムッツリーニにのう合鍵を作ってもらったのじゃ」

康太さん？君がハンニンナノ？

圭太「それより、なんで俺の家に来てるんだ？」

優子「きまっているじゃない、映画を見に行くって話」

圭太「あっ」

秀吉「忘れておったんじゃのう」

忘れて無かったよ・・・・・たぶん

圭太「それなら待たせてすまない、今着替えてくる」

こうして、圭太たちは出かけていった・・・・・・

☆

どうして・・・・・

どうして・・・・・・・・・・・・

首輪をつける必要があるんだ？

圭太「おい！首輪をはめる必要がどこにあるか？」

椎「圭太が逃げるに決まってるじゃない？」

圭太「それについては否定はしないけど・・・って腕が千切れるように痛いぃぃぃ」

優子・秀吉・椎『わかってくれたのなら許すわ（許すのじゃ）！』
圭太「さいですか・・・・・」

こうして映画館についた

圭太はある人物を見つける

圭太「明久ぁぁぁぁぁぁ」
明久「って圭太じゃないか！どうしてこんなところに居るのさ？」
圭太「拷問だ！察してくれ」
明久「ゴメン・・・それよりその首輪は？」
圭太「鎖の元をたどれそうすれば分かる」
明久「なんか本当にゴメン」
圭太「いいんだ分かってくれれば・・・」

どこかで見たことがあるような影が見える

雄二「男とは無力だ・・・」
圭太「雄二？雄二じゃないか！しかも、手錠まではめて何プレイ？」
雄二「圭太だって！首輪をつけて何プレイだ！」
圭太「・・・・・（シクシク）」
雄二「・・・・・（シクシク）」
明久「お互い傷つくならその物体に触れなければ良いのに・・・」

悲しくなって来るんだよ！

圭太「でっ明久たちは何を見るんだ？」
明久「まだ決まってないけど？（本当はお金が無くて困ってるんだ）」
圭太「俺たちもだな（明久！金は俺が出すから、一緒に行動してく

れ！じゃないとヤバイ！）」
明久「（わかったよ・・・けどその部分に触れたらいけないよね？）」
圭太「（当たり前だ・・・・・）」

こうして一緒に映画を見ることになって、そのあとはどうするかで
島田がクレープを食べたいと
言ってきたのでクレープを食べている。

圭太「おっ！このクレープうまいなぁ」
明久「久しぶりのカロリーだよ♪」
島田「あ、アキ！ウチのも食べる？」
姫路「わ、私のだって！」

明久は妙にモテるなぁ～～～～

優子「圭太、ア～ン」
秀吉「圭太、ア～ンじゃ」
椎「圭太、ア～～ン♪」

クソっこっちにまで飛び火してきた

そんなときに

清水「この豚野郎がお姉さまの口付けのクレープを食べるだなんて
汚らわしいです！」

ん？明久が厄介ごとになってるな・・・支援するか・・・

圭太「明久逃げるぞ！」

明久「逃げるってどこに？」
圭太「文月学園だ」
明久「分かった」

☆

圭太が文月学園で立会人になってくれる教師を探していると・・・
英語の遠藤先生がいた

圭太「遠藤先生！召喚許可を！」
遠藤「わ、分かりました承認します！」

英語のフィールドが広がっていく

『試獣召喚（サモン）』

Ｆクラス　明久・圭太・秀吉・島田・姫路・優子・椎

英語　　７３点・６５３点・５０点・４３点・３９８点・３６８点・５９４点

清水「お姉さまへの愛を邪魔するのですか？試獣召喚（サモン）」

Ｄクラス　清水美春

英語　　１０２点

これならいける

清水の召喚獣が飛び掛ってきた

島田の召喚獣に

島田「え？えぇぇぇぇ！」

この間に圭太たちの召喚獣たちが清水の召喚獣を消し去っていた。

西村「戦死者は補習～～」

島田「イヤャャャァァァァ！」

清水「お姉さま～～♪」

怖い！何この人、怖い！！

圭太「明久・・・・」

明久「何？圭太・・・・」

圭太「今日のことは見てないことにしよう・・・」

明久「そうだね・・・・」

こうして無事に今日という危ない一日が終わった・・・・ＯＴＬ

第十四話　清涼祭（前書き）

やっと清涼祭に入れます。

第十四話　清涼祭

清涼際の準備の声が響き渡る中

俺たちは

秀吉「プレイボール！」

現在野球中です！

圭太「行くぞ明久！」

明久「来い！圭太！」

圭太「お前なんかこのストレートだけで十分だ！」

そして、明久がバッター、俺がピッチャーをやっていて

圭太「（雄二！配球はどうする？）」

代表である雄二がキャッチャーだった

雄二「（圭太のストレートを）」

圭太「（ストレートを？）」

雄二「（バッターの頭に！）」

その配球は絶対間違えてると思う

ん？電話が・・・翔子からか

圭太「すまん雄二、明久！ちょっと電話に出るから」

圭太「って何だ翔子？」
雄二「何翔子だと！？」
圭太「黙ってろ」
翔子『・・・・・圭太そのストレートを』
圭太「ストレートを」
翔子『・・・・・雄二の股間に』
圭太「理由はイヤでも分かった、ぜひやって見せよう」
翔子『・・・・・分かった』

ピッ

圭太「よし！行くぞ！お前ら！」

俺はこれほどにもない力をボールに・・・

そしてその威力を

雄二の股間に・・・・

雄二「なぜだ圭太ぁぁぁぁ」
翔子「・・・・・雄二、大丈夫？」
雄二「大丈夫なわけないだろう！？」
翔子「・・・・・なら一緒に保健室に行く、そして当たった場所を見せて」
雄二「んなわけあるかぁ！」
明久・圭太「・・・・・・・・・」

チッ！保健室に逝かなかったか・・・・・

西村「お前ら何をやっておるか！」
明久「げっ！鉄人！」
西村「貴様が主犯か吉井！」
明久「何で僕だけ目の敵にするんですか！主犯は、そこにうずくまっている雄二に決まっているじゃないか～」
西村「全員教室にもどれこの時期にもなってもまだ出し物が決まっていないクラスはうちのクラスだけだぞ」
全員『へ～～～い』

こうして鉄人の登場により俺らの清涼祭への準備がほかのクラスより遅れて始まった。

☆

それにしても清涼祭か・・・・・・
楽しくないなぁ～～～
一眠りでもするか

こうして圭太は眠りについた

・
・
・

秀吉「・・・きるのじゃ・・・おきるのじゃ」
圭太「ふぁ～あ・・・どうした秀吉？」
秀吉「ちょっと手伝ってほしいのじゃ」
圭太「理由は？」
秀吉「姫路の転校が危ういのじゃ」

なに!?姫路が転校!?そうなったら試召戦争の駒が無くなるじゃないか!?

圭太「わかった、手伝わせてもらおう」

秀吉からの殺気の視線が怖いが今は気にしてられない

圭太「って明久!雄二は?」
明久「それが居ないんだよ~」
圭太「あと~出し物はどうなったの?」
明久「中華喫茶『ヨーロピアン』になったよ」
圭太「明久がその喫茶店の命名者か・・・」
明久「何で分かったの?もしやこの僕のネームングセンスが良いからかな~」
圭太「いやっこのアホが書くような名前だから」
明久「・・・・・・(シクシク)」
圭太「っとなると、俺は厨房班だな!」
明久「駄目じゃないか圭太!女装すると綺麗なのに勿体無いよ!」
圭太「わかった、ならこうしようFクラスのみんな!俺の女装が見たいか?」

フンッ!どうせ誰も上げないに決まって――

F『(ビシッ　手を上げる音)』

なかった・・・・・

圭太「わかった、ならホール班で『男装』でやるからな」
明久「みんな!圭太を女装させるぞ!」
F『うぉ~~~』

圭太「ちょっと！てかおい！ヤメ（ボコッ）・・・・・・」

少々お待ちください

F『おぉぉ～～～』

圭太「みんな・・・見ないで・・・・」

ただいま女装中です。（泣）

明久「さすがだよ圭太！」

圭太「その不名誉な言葉が身にしみる・・・・・」

明久「雄二は、どうやってこっちに持ってくるか分かる？圭太？」

圭太「話をそらすな明久！清涼祭はちゃんとやるからこれぐらいはお前らがやっとけ！」

雄二よりも

早く！早くしないと！

俺が秀吉扱いになってしまうじゃないか！

こうして圭太は制服を見つける旅に出かけた

☆

ったくどこにあるんだ？

おれの制服は・・・

仕方が無い、明久に聞くしかないか

現在Ｆクラスにて・・・

圭太「明久～俺の制服は？そして雄二お疲れ様～」

雄二「圭太のせいで翔子に襲われたじゃね～か！」
圭太「アハハハハッ・・・ゴメン」
明久「ってどういうことなのさ！雄二！」

雄二が理由を言ってくれてるだろうし
制服を探さなくては・・・・

圭太は制服を探していた・・・

第十四話　清涼祭（後書き）

へんな終わり方ですけど
なんかすみません

第十五話　清涼祭　学園長室にて

俺が制服を探していると

雄二「明久、圭太、行くぞ！」
明久「どこに？」
雄二「学園長室だ・・・圭太、制服を探す前に手伝ってくれ」
圭太「あぁわかった今行く」

クソッここにもないか（制服）

☆

圭太「ん？中に誰か話てるぞ？」
雄二「失礼しまーす。」
学園長「本当に失礼なガキどもだねぇ。普通は返事を待つもんだよ」

俺もそう思う。

教頭「やれやれ。取り込み中だというのにとんだ来客ですね。これでは話を続けることができませんね。・・・・・まさか、貴女の差し金ですか？」

チッ！教頭が居やがったか！

圭太「クソメガネ！スマねぇが、ここから出て行ってくれねぇか？」
教頭「おっそこに居るのは圭太君ではないかというより本当に圭太君か？」
圭太「ヒドイですよ。クソメガネ！」

圭太サイド終わり

雄二サイド

（圭太が教頭にいやがっているだと！？圭太は言葉で本人に直接言うことはないからな・・・・何かあるな近いうちに）

そう悩んでいると明久からアイコンタクトを要請してきた。

雄二「（何だ明久？）」

明久「（いや～圭太がここまで嫌がるのは初めてだから・・・）」

雄二「（これはなかなかお目にかかれないからな・・・・後、明久！今の圭太に喋りかけるなよ）」

明久「圭太！どうしたの？」

雄二「おい！バカッ」

圭太「ん？どうしたの明久？もしかして～教頭とグルですか～？もしそうなら～今殺す！！」

そういった圭太は明久を目にも留まらない速さで右ストレートを決める。

雄二「おい！圭太！明久は関係ねぇ！」

圭太「あっそうなの？」

雄二「クラスの問題について話しあってたじゃねぇか！」

圭太「あぁそうだったね・・・・ゴメン明久つい・・・・・」

何とかおさまったな・・・さぁここからどうする？

雄二サイド終わり

圭太サイド

うぅ～やっちまったなぁ～～大丈夫かな？明久

現在明久を蘇生中

教頭「では失礼するよ」

そういって教頭は学園長室から出て行く

学園長「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

雄二「今日は学園長にお話があって来ました。」

学園長「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原に言いな。

それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀ってモンだ。覚えておきな」

雄二「失礼しました。俺は二年Ｆ組代表の坂本雄二。それと今救助活動をしているのが――」

学園長「荒井圭太、さね？そいつには去年から世話になっているからねぇ」

雄二「で！そこに居るのは――」

雄二・圭太「二年を代表するバカです。」

学園長「ほぅ・・・・・。そうかい。アンタ達がＦクラスの坂本と吉井かい」

明久「ちょっと待って学園長！僕はまだ名前を言ってませんよね！？」

明久・・・・ここで帰ってきたか・・・・場が悪いときに帰ったな

学園長「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」
雄二「ありがとうございます」
学園長「礼なんか言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」
雄二「わかりました」

雄二が壊れていきそうな・・・・

雄二「Fクラスの設備について、改善を要求しにきました」
学園長「そうかい。それは暇そうで羨ましい限りさね」
雄二「今のFクラスの教室は、学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

あ、やっぱり壊れてきた

雄二「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が高いと思われます」

雄二・・・普通の口調で言ってもいいんだよ！

雄二「要するに、隙間風の吹き込んでくる教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババァ、というワケです。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「あの、学園長……？」

沈黙に耐えかねた明久が学園長に問い掛けます。

学園長「……ふむ、ちょうどいいタイミングさね……（ボソッ）」

タイミング？・・・・・一体何のことでしょう？

学園長「よしよし。お前達の言いたいことはよくわかった」
明久「え？それじゃ、直してもらえるんですね！」

学園長がそんなことそんなことというはずがないじゃないか！
だからバカなんだよ。・・・・元から明久はバカだったか

学園長「却下だね」

ほら、やっぱり。

明久「雄二、圭太。このババァをコンクリに詰めて捨ててこよう」
圭太「……明久。本音が漏れてるよ」
明久「ハッ！しまったぁっ！」

落ち込んでる暇はないと思う。

雄二「まったく、このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババァ」
明久「そうですね。聞かせてください、ババァ」
圭太「……お前ら、それで本当に話してくれると思ってんのか？」

学園長も呆れ顔で2人を見ています。

学園長「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちょろいガキどもが」
雄二「お言葉ですが学園長。このままでは本当に体の弱い子はいつか倒れてしまいます。それに学園としても教室設備のせいで生徒が倒れた、なんて話が外に出るのは好ましくないんじゃありませんか

？」

学園長「……まったく無駄に頭の働くガキだね。……いつもならバッサリ斬り捨てるところだけど、今回は特別にこちらの頼みも聞くなら話に乗ってやろうじゃないか」

雄二「ありがとうございます」

・・・・交換条件か、何かあるな

雄二「……」

隣の雄二を見ると、俺と一緒のところで引っかかったのだろう

雄二「その条件って何ですか？」

僕達2人が黙り込んでしまったので、代わりに明久が質問しました。

学園長「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

明久「ええ、まぁ」

学園長「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

明久「え？優勝賞品？」

なるほど・・・・だいだい読めた

学園長「学校から贈られる正賞には、賞状とトロフィーと『白金の腕輪』、副賞には『如月ハイランド　プレオープンプレミアムペアチケット』が用意してあるのさ」

ペアチケット・・・雄二が反応を表に出した

圭太「はぁ……。それと交換条件に何の関係が」

学園長「話は最後まで聞きな。慌てるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」
明久「知りません」
学園長「……それでこの副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」
明久「回収？それなら、賞品に出さなければいいじゃないですか」
学園長「そうできるならしているさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆すわけにはいかないんだよ」

竹原か・・・・・

明久「契約する前に気付いて下さいよ。学園長なんだから」
学園長「うるさいガキだね。白金の腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

学園長・・・心中察します

明久「悪い噂っていうのはどういうことですか？」
学園長「如月グループは如月ハイランドに1つのジンクスを作ろうとしているのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジンクスをね」
明久「？それのどこが悪い噂なんです？良い話じゃないですか」

ところが雄二にしたら

学園長「そのジンクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやってきたカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」
雄二「な、なんだと！？」

ほらキタぁ

明久「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」
雄二「慌てるに決まっているだろう！今ババァが言ったことは、『プレオープンプレミアムペアチケットでやってきたカップルを如月グループの力で強引に結婚させる』ってことだぞ！？」

翔子に脅されたか・・・がんばれ雄二！

明久「う、うん。言い直さなくても分かるけど」
学園長「そのカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」
雄二「くそっ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな……」
明久「え？どういうこと？」
圭太「明久、つまりはこういうことさ。そんな風に話題性溢れる文月学園の生徒が学生から結婚までいけばジンクスとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然ってことだよ。わかった？明久（バカ）？」
明久「圭太！貴様は明久と書いてバカって読んだな」
圭太「それくらいも分からないから言ってるんだよ？バカ」
明久「直に言わないでよ」
学園長「ふむ。流石は神童や≪神童の中の神童≫と呼ばれているだけはあるね。頭の回転はまあまあじゃないか」

あら？そういうの始めて聞いたかも！しかも俺のほうは長いなぁ

圭太「学園長！そういうの始めて聞きましたが？」
学園長「小学校にサーチを入れているからね。そしたらそこの神童をはるかに越える荒井がいたさね

私は荒井をこう読んでるけど、他のやつは違う言い方もするさ」
圭太「へぇ～そうだったんだ～」
雄二「知らなかったのか？」
圭太「神童は雄二だけだと思ってたから」

まっそれはおいといて

明久「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪いことでもないし、第一僕らはその話を知っているんだから、行かなければ済む話じゃないか」

明久、その考えは甘いですよ。“あの”翔子がそんなことを許すはずがない

雄二「……絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる……。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚……。俺の、将来は……！」

雄二の目が危ないな翔子と何かで掛け合ったな

「雄二、もしかしてペナルティは『翔子との婚姻届に判を押す』とか？」

多分これであっているはず！

雄二「……圭太、このことには察してくれ……」

やっぱりか・・・・ドンマイ

学園長「ま、そんなワケで、本人の意志を無視して、うちの可愛い

生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

が、学園長が・・・可愛い生徒？そんなことはないはず！
きっと違うはず、裏があるはず！

雄二「つまり交換条件ってのは――」
学園長「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら、教室の改修くらいしてやろうじゃないか。無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじゃないよ。譲ってもらうのも不可だ。私はお前達に召喚大会で優勝しろ、と言ってるんだからね」
明久「……僕たちが優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね？」
学園長「何を言ってるんだい。やってやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ」

学園長は厳しいな

学園長「ただし、清涼祭で得た利益でなんとかしようっていうなら話は別だよ。特別に今回だけは勝手に設備を変更することに目を瞑ってやってもいい」
明久「そこをなんとかオマケして設備の向上をお願いできませんか？僕らにとっては教室の改修と同じくらい設備の向上も重要なんです」
学園長「それで？」
明久「もしも喫茶店がうまくいかずに設備の向上が危うかったら、そっちが気になって大会に集中できずに僕らも学園長も困ったことに……」
学園長「なんだ、それだけかい。ダメだね。そこは譲れないよ」
明久「でも！設備の向上を約束してくれたら大会だけに――」
雄二「明久、無駄だ。ババァに譲る気が無いのは明白だ。この取引

に応じるしか方法はない」
圭太「雄二の言う通りだよ、明久。これ以上は時間の無駄だ」
明久、ここは納得しろ
明久「わかりました。この話、引き受けます」
学園長「そうかい。それなら交渉成立だね」
学園長は『計画通り』といった顔をしてニヤリと笑いました。気持ち悪い
雄二「ただし、こちらからも提案がある」
雄二がいきなり学園長に話しかけました。
学園長「なんだい？言ってみな」
雄二「召喚大会は二対二のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一回戦が数学だと二回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」
学園長「それがどうかしたのかい？」
雄二「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」
雄二、ここで学園長を試すか・・・
学園長「ふむ……。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」
雄二「……ありがとうございます」
雄二の目つきが鋭くなってくる

学園長「さて。そこまで協力するんだ。当然、召喚大会で優勝できるんだろうね？」

学園長が念を押してきます。

雄二「無論だ。俺たちを誰だと思っている？」

明久「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」

明久もすっかりやる気モードですね。

学園長「そっちのアンタはどうするんだい？」

圭太「ちょっと話すことがあるので・・・」

学園長「そうかい。それじゃ、ボウズども。任せたよ」

雄二・明久「了解っ！」

こうして、今ここに文月学園最低コンビが誕生しました。

明久たちが出て行ってその後の学園長室では

圭太「学園長！なんで俺が召喚獣になるんですか？（学園長、ここに盗聴器がある、だぶん竹原だ）」

学園長「ちょうどいいからさね（そうかいそこまで腐っていたとは）」

圭太「なんでだよ！（どうしますか？）」

学園長「まっ、任せたよ（とりあえずこのままにするさね）」

圭太「ハイ・・・・分かりました」

学園長「ではたのんださね」

こうして学園長室を後にした圭太の姿があった

第十六話　清涼祭

清涼祭初日

島田「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」
明久「ホント、いつもはただのバカなのにね」
圭太「雄二ってそういう印象なんだ・・・」

俺らの教室は見違えるほど変わっていた

明久「このテーブルなんて、パッと見は本物と見分けがつかないよ」

本当に良くできてるな

姫路「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこからか綺麗なテーブルクロスをもってきて
こう手際よくテキパキと」
圭太「さすがは秀吉だな（ナデナデ）」
秀吉「そうでもないのじゃ／／・・・でも見かけはそれなりのものになったのがのう、その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

そういってクロスを捲るといつもの机？（というより箱）がお迎えしてくれた。

圭太「これを見られたら致命的だな・・・」
明久「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」
康太「・・・・・飲茶（ヤムチャ）も完璧」
圭太「厨房班の方は大丈夫か？」

康太「・・・・・・味見用」

そういって康太が胡麻団子を差し出す。っというより良く作れたな

康太「・・・・・・紳士の嗜み」

そうですか・・・・

島田「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

康太「・・・・・・（コクリ）」

秀吉「ではいただくとするかのう」

試食中

姫路「お、美味しいです！」

島田「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感もいいし」

秀吉「あますぎないところもいいのう～」

評判は高いですね。

明久「それじゃあ僕らももらおうかな」

圭太「康太、もらうぞ？」

康太「・・・・・・（コクリ）」

さ～てもらおうかなと胡麻団子に手を差し出すと、

秀吉が取りやがった（泣）

圭太「秀吉？どうした？俺に恨みでもあるか？」

秀吉「そうではない・・・・ア～ンじゃ♪／／」

圭太「Ｗｈｙ？（なぜ）」

秀吉「英語で言うでない」
圭太「とりあえずもらおうか」
といって秀吉からもらう
圭太「表面はゴリゴリで中はネバネバこの何ともいえない味が――
―ゴパァッ」
圭太は意識が落ちた。

☆

現在三途の川にて

圭太「なんか久しぶりにここに来たような?」
圭太はあたりを見渡すと雄二も居た・・・・・・・・・・
圭太「雄二?どうした?三途の川に来て?」
雄二「おぅ圭太か、まずは聞いてくれこの川渡しに相場が分かっていないんだ」
圭太「この前もここに来た時もそうだったけど?」
雄二「そうなのか?ッ」
雄二が・・・・・・消えた!?
圭太「雄二?どこに行ってんだ?まさか!この世界で瞬間移動を――ってハッ!」
圭太は復活した

☆

圭太「秀吉！なんて物を食わせる？おかげで雄二がアッチの世界で瞬間移動を使ったじゃないか！」
秀吉「すまなかったのじゃ・・・・・」

秀吉がこのままでは落ち込むな・・・

圭太「まぁいい帰ってこれた、それだけでもよしとするよ。秀吉そう落ち込むな！」
秀吉「うむ／／」
圭太「それより雄二は？」
秀吉「召喚大会にいっておるぞ？」
圭太「そうなのか？」
秀吉「ついでにワシらも出るぞ」
圭太「ん？『ワシら』？」
秀吉「そうなのじゃ！さっさといくぞ圭太！」

圭太は蘇生された後、休む暇もなく召喚大会に向かった

第十六話　清涼祭（後書き）

あとがき～

圭太「あ～ぁまた行ってきたよ」

作者「あ～三途の川にか・・・」

圭太「まったく・・・なんであああいうものができるのかな？
しかも本人の自覚無しで」

作者「聞かない方がいいだろう」

感想などなど！お願いします。

圭太「てめぇ！作者！絶対にオチを考えてなかっただろう！」

作者「ソンナコトデモナイヨ～（ダッ　作者逃亡！）」

圭太「こんな作者ですがよろしくお願いします。・・・・・おいコラ！作者！
待ちやがれ～」

第十七話　清涼祭　召喚大会

木内先生「えーそれでは、試験召喚大会第一回戦を始めます。」

現在、召喚大会一回戦！

秀吉「それではいくかのう圭太？」

圭太「まさか参加するとは聞いてなかったけど、ここまできたら殺るしかねぇか・・・って相手は誰だ？」

秀吉「対戦表を見ておらんのかのう？」

圭太「当たり前だ！三途の川に旅行してたからな、教科は？」

秀吉「数学じゃ」

圭太「よかった・・・保健体育ではなかった・・・（ホッ）」

そうだよ！保健体育だったら終わってたよ！？

木内先生「三回戦までは、一般公開もありませんのでリラックスして全力を出してください」

リラックスしてたら、切られて痛いんだけど？

菊入「がんばろうね律子」

岩下「そうね。がんばろう真由美」

相手は・・・・・・あぁそうか根本を女装してくれた人だ！

学力はどうか知らないけど・・・

木内先生「では召喚してください」

菊入・岩下『試獣召喚（サモン）』

Bクラス　菊入真由美&岩下律子

数学　　１６３点　　１７９点

圭太「よし！これならいけるぞ秀吉！」
秀吉「わしでは難しいがのう」
圭太「まぁいい、行くぞ！試獣召喚（サモン）」
秀吉「試獣召喚（サモン）じゃ」

Fクラス　荒井圭太&木下秀吉

数学　　８９２点　　５４点

圭太『どうしたの菊入さんに岩下さん？』
菊入「Fクラスにいるのが疑問に思えて」
岩下「カンニングでもしたのかな～とおもって」
圭太『そうかな？』

相手の様子がおかしい

みんなひどいな！根本と同じ扱いにされるとは
秀吉も様子がおかしいな

圭太『ん？どうした秀吉？』
秀吉「どうしたらそんな点数を取れるのか不思議でのう」
圭太『そんなことよりさっさとやるぞ』
秀吉「分かっておるのじゃ」

そんなことでか?俺ってそんなバカに見られていたのか?失礼な!

菊入「勝てる気がしないけど・・・律子!」
岩下「真由美!」
菊入・岩下『行くわよ』

向こうの二人は息があってるな~・・・ここは本気でやらないと

圭太『本気で行くぞ!秀吉!』
秀吉「分かっておるのじゃ」

やっぱ一回戦だし・・・トレーニングでいいよね?

圭太『作戦変更!ウォーミングアップだ』
秀吉「・・・わかったのじゃ・・・」

なんだよ秀吉?その失望しましたという視線は?

俺たちが言い合っているといつの間にか囲まれていた。
そして、相手の召喚獣がいっせいに切りかかった。

圭太『秀吉!お前は攻撃担当で俺は相手の武器での攻撃を封じる!わかったか?』
秀吉「わかったのじゃ」
圭太『いい返事だ!』

相手が秀吉に攻撃を仕掛ける
が圭太のＭ９２Ｆの銃弾ではじく・・・日本刀を持っている意味がないような?
その間に秀吉が切り込む

それが繰り返して五分・・・

木内先生「勝者！Ｆクラス荒井、木下ペア！」

勝利した。

菊入「片方は倒せれると思ったのに・・・」

岩下「一点も削れないなんて・・・」

まぁ俺が守備担当したらこうなるよね？

菊入「あ、あの・・・荒井君？」

圭太「はい？」

なんでしょうか？

菊入「こんな場所で言うのはなんですけど。そ、その・・・私と付き合ってください」

圭太「Ｗｈｙ？」

岩下「ちょ、ちょっと真由美！抜け駆けはさせないわ・・・あの荒井君！私とも付き合ってください！」

圭太「そうだよ？菊入さんに岩下さん！こんな俺に告白だなんて誰かの嫌がらせでも受けてるの？」

そうだよ！きっとそうだ

菊入・岩下『本気です！』

圭太「俺が・・・何をしたというんだ？」

優子「本当に何をしたんだろうね・・・・・圭太？」

椎「まさかこんなことになるとはね・・・・・圭太？」

秀吉「返答と行動によってはどうなるのかわかっておるかのう？・・・・圭太？」

ん？優子に椎？

圭太「どうやってここに来たんだ！？優子、椎！」

優子「秀吉から聞いたのよ」

そうですか・・・・主犯は秀吉ですか・・・・

優子「それよりわかっているわよね圭太」

圭太「あぁわかっている」

椎「Ａクラスで監きｎゲフンゲフンッ拉致しておかないと」

圭太「どっちも一緒じゃねえか！」

ヤバイ！ガチで監禁される！

雄二に遺言を残さなければ・・・

圭太「秀吉！雄二たちに遺言だと伝えておいてくれ」

秀吉「何をじゃ？」

秀吉君？そんなに殺気を出してたら、お兄さんしゃべりつらいよ！？けど残しておかないと！

圭太「Ｆクラスに貢献できなくてすまないと・・・ちょっと待つんだ優子！その鎖は何だ！？」

優子「鎖だけど？」

圭太「そして椎！その首輪は何だ！」

椎「ただの首輪だよ」

優子・椎「監禁するためにね！」

こうして圭太はAクラスに監禁された。

☆

明久サイド

僕たちが召喚大会で一回戦を突破することができたけど、問題は、Fクラスに起きた

???「マジきったねぇ机だな！これで食べ物を扱っていいのかよ！」

雄二がFクラスの扉を開けるとともに罵声が聞こえてきた。

客A「うわ・・・。確かに汚いな・・・」

客B「クロスで誤魔化していたみたいだね」

客C「学園祭とは言っても、一応食べ物のお店なのに」

その様子を見たお客さんが口々に呟く。

明久「雄二、早くしないと経営に響くよ」

雄二「そうだな・・・。秀吉、ちょっとこっちに来てくれ」

秀吉「？なんじゃ？」

雄二「至急用意してきてほしいものがあるんだ」

雄二が秀吉に耳打ちする。秀吉に頼むってことは、演劇用の小道具かなんかだろうか？

圭太（明久！よくわかったじゃないか！）

ん？圭太の声が心の中に聞こえたような？

雄二「明久。あの小悪どもの特徴をよく覚えておけ」

雄二が、僕にそういうとモヒカンと坊主に近寄っていく

坊主「まったく、責任者はいないのか！このクラスの代表をゴペッ！」

雄二「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点でもありましたでしょうか？」

モヒカン「不満も何も、今連れが殴り飛ばされたんたが・・・・」

雄二「それは私のモットーの『パンチから始まる交渉術』に対する冒涜ですか？」

こんなにすごい交渉術はないと思う

モヒカン「ふ、ふざけんなよこの野郎・・・・！何が交渉術ふぎゃぁ！」

雄二「そして『キックでつなぐ交渉術』です。最後には『プロレス技で締める交渉術』が待っていますが？」

モヒカン「わ、わかった！こちらはこの夏川を交渉に出そう！」

坊主「ちょ、ちょっとまてや常村！お前、俺を売ろうとでも言うのか！？」

慌てているのが夏川でモヒカンが常村か・・・

雄二「それで常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるのか？」

常夏コンビか・・・雄二！うまいじゃないか

常村「い、いや、もう充分だ。退散させてもらう」

雄二「そうかそれなら――――」

大きく頷いたあと、夏川の腰を抱え込む雄二。

夏川「おい！俺はもう何もしてないよな！？どうしてそんな大技をげぶるぁ」

常村「お、覚えてろよ！」

倒れた、坊主を抱え込んでFクラスから出て行った。

客A「さすがにこれじゃ、食っていく気はしないよな」

客B「せっかく美味しそうだったんだけどね」

客C「食ったら腹壊しそうだもんな」

客E「店、かえるか」

客F「そうしようか」

明久「あ、お客さん！」

そんなお客さんに深々と雄二が頭をさげる

そんななか秀吉たちがテーブルを持ってきてくれた。

美波「あれ？テーブルを入れ替えてるの？」

そんなとき、後ろから女子の声が聞こえてきた。

明久「あ、おかえり。美波に姫路さん。結果はどうだった？」

姫路「はいっ！なんとか勝てました」

美波「そんなことより、テーブルを入れ替えちゃってもいいの？演劇部にあるテーブルってそんなに多くないはずでしょ？」

美波の指摘ももっともだ。

雄二「ふぅ。こんなところか」

小さく息を吐く雄二・・・・・・ってあれ?

明久「圭太は?」

秀吉「それがのう圭太から遺言じゃ『Fクラスに貢献できなくてすまない』じゃ」

圭太、君にいったい何があったんだ

明久サイド終わり

圭太サイド

ここは何処なんだ?処刑所か?

圭太は体に鎖と首輪でAクラスによって監禁されていた。

第十七話　清涼祭　召喚大会（後書き）

圭太が監禁されてしまいました。
そして、召喚大会はどうなるのでしょうか？

第十八話　清涼際（前書き）

圭太が帰還するまで、明久サイドです。

第十八話　清涼際

召喚大会　第二回戦

明久「で、二回戦は誰なのさ雄二？」
雄二「対戦表を見た限りだと上がってきそうなのは――――お、予想どうりだ」

雄二の目線を追うとその先には対戦相手の姿があった。

明久「あれ？誰かと思えばＢクラスとＣクラスの代表のカップルじゃないか」
根本「よ、吉井に坂本！？お前らが相手か！」
小山「どうしたの根本君。Ｆクラスのバカコンビが相手なんだからこの勝負もらったの同ぜんじゃない」

僕たちってバカコンビなの！？
圭太（いまさら気づいたのか？明久（バカ））
ってまた圭太の声が僕の心の中に！？というより圭太！大丈夫なの
圭太（生きて帰ってこれるか分からない）
そうなんだ・・・

遠藤「それでは、二回戦をはじめてください。」

『試獣召喚（サモン）』

Ｂクラス　根本恭二＆Ｃクラス　小山友香

英語W　１９９点　１６５点

Fクラス　坂本雄二＆　吉井明久

英語W　７３点　５９点

ここである放送が聞こえてくる。

『荒井圭太君、荒井圭太君！召喚大会が始まります。至急来てください！』

そっか圭太も出ていたんだよね。
今は帰ってこれそうにないけど・・・
今はそれではない

明久「じゃあ雄二、例のものを」
雄二「おう！これの事だろ」

そういった雄二は『生まれ変わった私を見て』（根本の女装写真集）をとりだした。

根本「そ、それは・・・！」
明久「さて、根本君。この写真集をばら撒かれたくなかったら――」
雄二「おいおい明久、交渉相手が違うぞ？」
明久「え？そうなの？」

僕の交渉する相手を雄二が違うといってきたけど・・・？

雄二「おい、そこの根本の彼女だがＣクラス代表だが知られねぇが、

そこの女」

ずいぶんと知っていると思う。

小山「なにかしら？」

雄二「これを見てみろ」

といって雄二が1ページ目をめくる

根本「さ、坂本！わかった降参する！だからその写真だけは・・・・」

雄二「明久、そいつを抑えてろ」

明久「ん、了解」

雄二「よしよしさて、Cクラス代表。この写真集が見られたくなかったら、俺たちに負けるんだ」

根本「さ、坂本っ！お前は鬼か！？」

雄二で鬼ではないのならただのゴリラだろうか？

小山「・・・・・・いいわ、私たちのまけよ」

雄二「交渉成立だな」

遠藤「・・・・坂本・吉井ペアの勝利です。」

こうして二回戦は無事に勝ったのであった。

そして

『勝者、荒井圭太、木下秀吉ペア』

ん？圭太は帰ってきたの？

☆

明久「ただいま・・・・・・ってあまりお客さんはいないなぁ・・・・」

秀吉「お、もどってきたようじゃの」

それより圭太の姿はないし、どうやったんだろう？

秀吉「ばっちり勝ってきたぞい。そっちはどうじゃった？」

明久「無事勝ってきたよ」

秀吉「それは何よりじゃ。ところで、雄二の姿が見えんが？」

明久「うん。トイレに寄ってくるってさ！ってあのあと営業妨害は？」

康太「・・・・・・・・・・・・あれから、営業妨害は来てない。ここ以外で何かが起きてる可能性が高い」

明久「そうだね」

そうやって僕たち三人で考え込んでいると、

？？？『お兄さん、すいませんです』

雄二『いや。きにするな、チビッ子』

葉月『チビッ子じゃなくて葉月ですっ』

ん？　これは雄二と誰かさんの声だ。声の高さからまだ小学生くらいだろうか？

秀吉「雄二が戻ってきたようじゃな」

明久「あ、うん。そうみたいだね」

雄二『んで、探してるのはどんなヤツだ?』

人捜しか?僕も手伝おうかな・・・・・・

F『お、坂本。妹か?』

F『可愛い子だな~。ねぇ、5年後にお兄さんと付き合わない?』

F『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなぁ』

葉月『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探してるんですっ』

雄二『お兄ちゃん? 名前はなんて言うんだ?』

葉月『あぅ・・・・・・。わからないです・・・・・・』

雄二『? 家族の兄じゃないのか? それなら、何か特徴は?』

探してあげようという雄二の気遣いが感じられる。意外に子供好きかもしれない

葉月『えっと・・・・・・バカなお兄ちゃんでした!』

なんという特徴だ!

雄二『そうか』

流石に雄二でもこの特徴じゃあ・・・・・・

雄二『・・・・・・沢山いるんだが?』

Fクラスだからね

葉月『あ、あの、そうじゃなくて、その・・・・・・』

雄二『うん？　他に何か特徴があるのか？』

葉月『その・・・・・・すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

F『吉井だな』

やだな、泣いてないよ？

明久「まったく失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違い――」

葉月「あ！バカなお兄ちゃんだっ！」

雄二「絶対に人違い、がどうしたんだ？」

明久「・・・・人違いだといいなぁ・・・・って、キミは誰？　見たところ小学生だけど、僕にそんな知り合いはいないよ？」

葉月「え？　お兄ちゃん・・・・・・知らないって、ひどい・・・・・」

あ、マズイ！泣かせちゃったかも。

葉月「バカなお兄ちゃんのバカぁっ！　バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに！」

なんだろう、僕も泣きたくなってきた。

雄二「明久――じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

秀吉「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

雄二と秀吉の言葉が突き刺さる。

葉月「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのにーーー」

ガラッ！

あ、姫路さんと島田さんだ。

美波「瑞希！」

姫路「美波ちゃん！」

美波・姫路「「殺るわよ！」」

明久「ごぶぁっ！？」

突如の攻撃に激痛が！

雄二「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」

美波「瑞希。そのまま首を真後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるから」

姫路「こ、こうですか？」

美波！そこで攻撃力を上げる指導をしないで！

明久「ちょっと待って！　結婚の約束なんて僕は全然――」

葉月「ふえぇぇんっ！　酷いですっ！　ファーストキスもあげたのにーっ！」
美波「坂本は包丁を持ってきて。五本あれば足りると思う」
姫路「吉井君、そんな悪いことをするのはこの口ですか？」
明久「お願いひまふっ！　はなひをきいてくらはいっ！」
美波「仕方ないわね。二本刺したら聞いてあげるからちょっと待ってなさい」
明久「あのね、美波。包丁って一本でも刺さったら致命傷なんだよ？」
葉月「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

ん？　お姉ちゃんってことはこの子は美波の妹？

明久「ああっ！　あのときのぬいぐるみの子か！」

あぁあの子か！

葉月「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月です」
明久「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」
葉月「はいですっ！」
明久「うんうん。それは良かった。それにしてもよく学校がわかったね？」
葉月「お兄ちゃん、この学校の制服着てましたから」
美波「あれ？　葉月ってアキと知り合いなの？」
明久「うん。去年ちょっとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」
美波「知ってるも何も、ウチの妹だもの」
明久「へ？」

へ？そうだったの？

葉月「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん！　ぬいぐるみありがとうでしたっ！」

学園長とは違って、礼儀の正しい子だ。

姫路「こんにちは、葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる？」
葉月「はいですっ！　毎日一緒に寝てるです」
姫路「良かった～。気に入ってくれたんだ」
雄二「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

そういえばそうだったね。

雄二「明久、お前忘れていたのか？」

なぜばれたんだろう？

葉月「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」
雄二「ん？　どんな話だ？」
葉月「えっとね、中華喫茶は汚いから聞かない方がいい、って」

もうそのことは終わったんだと思ったんだけど？

雄二「ふむ・・・・・。例の連中の妨害が続いてるんだろうな。探し出してシバき倒すか」

僕も同意見だ。

明久「例の連中って常夏コンビ？　まさか、そこまで暇じゃないでしょ」

雄二「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」
明久「そうだね。少なくとも、噂が流れてどこまで広がっているかを確認しないと」

かなりの勢いで広まっていたら大変だからね！

葉月「お兄ちゃん、葉月と一緒にいこっ」
明久「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あまり遊べないんだ」

僕は葉月ちゃんの頭をなでる。

葉月「む～。折角会いに来たのに～」
雄二「それなら、そのチビッ子も連れて行けばいい。飲食店をやっている他のクラスを偵察する必要もあるからな」
明久「ん～、そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯も食べに行く？」
葉月「うん」

天真爛漫ってこういう子のことを言うのかな？

美波「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」
秀吉「ワシも同行しても良いかの？」
雄二「構わんぞ」
康太「・・・・・・・・・・・・喫茶店なら任せておけ」
雄二「そうか。悪いな、ムッツリーニ」
姫路「いいんですか？　ありがとうございます。土屋君」

結構大人数になってきたね

雄二「それでチビッ子、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてく

れるか？」
葉月「えっとですね・・・・・・短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店――」
なんだって！？
明久「なんだって！？　雄二、それはすぐに向かわないと！」
雄二「そうだな明久！　我がクラスの成功のために、低いアングルから綿密に調査しないとな！」
さすがは雄二！よく分かっているじゃないか！
美波「アキ、最低」
姫路「吉井君、酷いです・・・・・・」
葉月「お兄ちゃんのバカ！」
秀吉「あやつら・・・・・・」
背後からの罵倒も気にならないほどに、僕の心は躍っていた。

第十八話　清涼際（後書き）

次の話には圭太は無事帰ってきます。
たぶん・・・

圭太「おい！作者！俺はこの後どうなるんだ！？」

作者「さぁ？」

本当にどうなることでしょうか？

第十九話　清涼祭　圭太復活？

現在Ａクラス

雄二「頼む！明久！ここだけは、Ａクラスだけは勘弁してくれ！」
明久「そっか。ここって雄二の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」
姫路「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」
明久「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだからーーー」

ムッツリーニ「・・・・・・・・・・・・・・（パシャパシャパシャパシャ！）」

ムッツリーニがＦクラスをほったらかしていた

明久「・・・・・ムッツリーニ？」
ムッツリーニ「・・・・・・・・・・・・人違い」
美波「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」
ムッツリーニ「・・・・・・・・・・・・盗撮」

正直者め。

明久「ムッツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことをしたら撮られてる女の子が可哀想だとーーー」
ムッツリーニ「・・・・・・・・・・・・一枚百円」
明久「２ダース貰おうーーー可哀想だと思わないのかい？」
美波「アキ、普通に注文してるわよ」

あ！口が勝手に！

ムッツリーニ「・・・・・・・・・・そろそろ当番だから戻る」
明久「まったく、ムッツリーニにも困ったものだね」
姫路「吉井君、その写真をどうするつもりなんですか？」

あ！バレた？

明久「やだな～。もちろん処分するに決まってるじゃないか。それよりそろそろお店に入ろう？　もうすごくお腹が減っちゃったよ」
姫路「あ、そうですね。入りましょうか」

さすがは姫路さん！僕の演技でも信じてくれているだなんて
こうしている間にも確認しないと

明久「うんうん。早く敵情視察も済ませないとーーー写ってるのは男の足ばかりじゃないか畜生！」
姫路「やっぱり見てるじゃないですかっ！」
明久「ご、ごめんなひゃい！　くひをひっぱらないで！」

頬を抓られた

美波「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」
霧島「・・・・・・おかえりなさいませ、お嬢様」

美波が開けたドアから出迎えてくれたのは、霧島さんだ。

姫路「わぁ、綺麗・・・・・・」

思わず姫路さんが感嘆の声を漏らすのも頷けるくらいによく似合っ

ているし
霧島さんは和服が似合いそうだがメイド服も中々似合っているから
驚きだよね。

明久「それじゃ、僕らも」
姫路「はい。失礼します」
葉月「お姉さん、きれ～！」
秀吉「邪魔になるぞい」

僕たちはＡクラスに入った。

明久サイド終わり

圭太サイド

島田「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

あっ！島田だ

明久「それじゃ、僕らも」
姫路「はい。失礼します」
？？「お姉さん、きれ～！」
秀吉「邪魔になるぞい」

それにみんなも！一人は知らないけど？
よしここは何とか脱出して雄二たちに合流しないと！

俺は鎖が体に巻きついている中、必死に雄二たちの元へと急いだ・・
・

☆

よし！後もうちょっとで・・・

優子「あっ！圭太！駄目じゃない抜けたりしたら」

ヤバイここで優子か・・・

圭太「明久！雄二！ヘルプ！誰でもいいから助けて！」

明久たちがこっちを見ているようだか、俺の姿をみて呆然としている。

圭太「とにかく！この鎖をはずしてくれ！」

明久「う、うん」

雄二「わかった手伝おう」

こうして俺の体から鎖が解けた。

圭太「でっ今何をしているの？」

明久「今は注文をしてるんだよ。・・・・えーと僕は水で」

まったくなんでそこで水が注文に入っているんだ？

圭太「助けてくれたお礼に何か奢ってやるよ！」

明久「えぇ！いいの！」

圭太「もちろん」

さっきの拷問に比べたら安い物さ・・・

圭太「じゃ俺も注文は何にしようかな？」
優子「さっきの拷問プレイがまだ残っていますｇ――」
圭太「止めてもらおう」

これを続けていたらきっと帰らぬ人になっているだろう

島田「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」
姫路「あ、私もそれがいいです」
葉月「葉月も！」
明久「あ、僕も」
秀吉「わしもそれがいいのう」

女子のみんなと明久と秀吉は決めたようだな。あとあの子は葉月というのか

圭太「さて改めて――」
雄二「んじゃ、俺は――」
翔子「・・・・・ではご注文を繰り返します」

俺が注文する前に翔子が遮りやがった！

翔子「・・・・・『ふわふわシフォンケーキ』を五つ、『メイドとの婚姻届』が三つ。以上でよろしいでしょうか？」
雄二「よろしくねぇぞ！？」

動揺した雄二の声、今の状況がこんなに平和に思える日が来ると思わなかった。

翔子「・・・・・では食器をご用意いたします。」

女の子たちと明久と秀吉の前には食器が・・・・

俺たち雄二と俺は・・・・・実印と・・・・・・婚姻届？

雄二「しょ、翔子！これウチの実印だぞ！？これをどうやって手に入れたんだ！？」

圭太「どういうことだ？優子に椎！婚姻届ってどういう意味？まさかまだ拷問が続いているのか？

だとしたら・・・・・って優子に椎！？俺の腕はそう簡単にそっちにまがらなぁぁぁぁ」

優子「どうしてこれでも気がつかないのよ！」

椎「そうだよね？優子！」

秀吉「危なかったのじゃこれで圭太が・・・・・（ブツブツ）」

秀吉？あぶなかったってどういう意味？ってあっ！そこの骨だけはぁぁぁぁ！

俺はちょっとの間意識を失った・・・・

圭太「・・・・・ハッ」

雄二「やっと気がついたか、圭太お前には悪いが女装してある任務を遂行してもらう」

圭太「また女装？もうやだよ～」

明久「仕方が無いじゃないか！営業妨害が続いてるのに・・・」

圭太「どういうこと？」

俺は拷問されている間の出来事をすべて話してくれていた。

圭太「・・・・・仕方が無いその任務見事に遂行して見せよう」

雄二「圭太では足りないな・・・よし！明久！お前も行って来い！」

明久「え！イヤだよ！って圭太！どうして引っ張るのさ！」

こうなりゃ！明久も生贄だ！

しばらくお待ちください

秀吉「本当に可愛いのう圭太／／」

圭太「秀吉！それは俺に対する嫌味か？それと明久よく似合っているよ♪」

明久「圭太だって！」

圭太「・・・・・・・・・・（シクシク）」

明久「・・・・・・・・・・（シクシク）」

秀吉「・・・・・・・」

こうしてAクラスについた

雄二「ん？本当に圭太か！？さらに綺麗になっているじゃないか」

圭太「酷い！酷いよ雄二！・・・・・（泣）」

雄二「こういう仕草も可愛いじゃねぇか」

圭太「うわぁぁぁぁぁん秀吉！雄二まで虐めてくる！」

秀吉「とても可愛いのう／／」

ここに俺の味方はいないのか！？

雄二「さて、本題に入るぞ！」

圭太「えぇーと俺たちがあの常夏コンビに近づいて、ワイセツ行為を取らせたらいいんだな？」

雄二「あぁたのんだぞ圭太に明久」

圭太・明久『任せて！』

こうして鬼退治ならぬ、女装してまで営業妨害退治が今ここに始まった。

☆

圭太・明久「イヤァァァこの人たち変態です！」

現在俺たちは営業妨害を退治中です！

常村「ちょっとまてそいつらは男・・・（ゴフッ）」

雄二「こんな公衆の前で痴漢行為とはこのゲス野郎が！」

あの～一応俺たちは男なんですが？

夏川「なにを見ていたんだ！？明らかにこっちが被害者じゃねぇか！」

明久がノリでバックドロップを決めていなければこういうことにならなかったと思う・・・

雄二「黙れ、変態どもが！ウェイトレスの胸をモミしだいていただろうが！俺の目は節穴ではないぞ！」

いや！正直に言うと俺たち男だから胸はない・・・って優子？どうしたさっきなんか出して？

圭太「どうかいたしましたか？優子様？」

一応、女装しているからね・・・

優子「変なことを考えていたからお仕置き・・・ゲフンゲフンッ折檻があるから――」

圭太「なんだと!?おい優子!俺は何にも・・・て俺の腕がちぎれるようにイタイィィィ」

バイバイ俺の意識!

こうして圭太は三途の川へと旅立った。

第十九話　清涼祭　圭太復活？（後書き）

やっと圭太が帰ってきました。

作者「圭太さん！こちらに帰ってこれた感想は？」

圭太「地獄から天国に来たって感じだ・・・というよりお前がそう仕向けたからだろ！？」

作者「ナンノコトカナ？」

こんな作者ですがよろしくお願いします。

あとできれば感想も・・・お願いします。

第二十話　清涼祭（前書き）

テスト期間ですが明日と明後日だけなので、更新ができるかなぁ？
という状況ですが、頑張ります。

第二十話　清涼祭

現在、召喚大会三回戦

相手の食中毒により不戦勝・・・・ん?食中毒?まさか!・・・・・・
そうだったらご愁傷様・・・

秀吉「で、三回戦は不戦勝じゃったと?」
明久「うん。相手が食中毒で棄権したんだ」

ん?奇遇だな・・・

圭太「奇遇じゃないか!明久、俺たちもだ・・・」
明久「本当に奇遇だね・・・」
圭太「まさかここからだとは・・・言わないよな?」
明久「とにかく祈ろう、ハズレを引いた人に・・・」
秀吉「ならば、済まぬがこっちの建て直しに協力してくれんか?」

秀吉・・・お前が悪いわけではないんだ

雄二「そうだな。一度失った客を取り戻す為にも、何かインパクトのあることをやる必要がありそうだな」
圭太「この教室でそんなことができるのか?」

Fクラスだし・・・設備的に・・・

秀吉「ふむ。それで何をするか、じゃが・・・」
圭太「雄二は何か思いついたか?」

雄二「任せておけ、中華とコレでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大なはずだ」
圭太「もうそれでいいんじゃない？何か悪寒がするけど・・・」
雄二に任せてみると雄二が刺繍がとても綺麗なチャイナドレスを取り出してきた。
秀吉「ほう。若干裾が短いようなきがするが、これならば確かにインパクトはあるじゃろうな。コレを宣伝用に――」
雄二「あぁ。これを――――明久が着る」
ちょｗインパクトがありすぎ
明久「ちょ・・・・・・！お願い、許して！メイド服にチャイナ服まで着たら、きっと僕はホンモノだって皆に認識されちゃう！」
明久・・・・もう俺なんか秀吉扱いになってきたんだぜ・・・（泣）
雄二「冗談だ（圭太）「チッ・・・」これを秀吉と圭太と姫路と島田に着て貰う」
圭太「男が着る時点でアウトだと俺はそう思うが？」
雄二「似合うんだからいいじゃないか」
やっぱり味方がいない・・・
島田「たっだいま～！って、なんだ。アキってばメイド服脱いじゃったんだ」
姫路「あ・・・・・・残念です。可愛かったのに・・・・・・」
葉月「お兄ちゃんたち。葉月もう一回みたいな～」

よかったじゃないか明久、人気もそこそこあるじゃないか！
根本とは違って・・・

雄二「姫路に島田、クラスの売り上げのために協力してもらうぞ」

雄二がそう言い放ったときに、明久が女子たちを囲む
正直言って気持ち悪い・・・

姫路「な、なんだか二人とも、目が怖いですよ・・・・・・・？」
島田「凄く邪悪な気配を感じるんだけど・・・・・・・」

正常な反応だと思うが？

雄二「やれ、明久」
明久「オーケー！へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替えイタァ！マジすんませんした！
自分チョーシくれてました。」

島田がいいパンチを明久に送り込む・・・さすがに今のは痛い・・・
普通に声をかけたらいいのにこの鈍感め！

雄二「弱いな、お前・・・・・・」
島田「どうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ？チャイナドレスは着たりすることは無いって聞いているけど？」
雄二「店の宣伝と明久の趣味だ、明久はチャイナドレスが好きだよな？」

明久、まさか本当ではないだろうな？

明久「大好――愛してる」
雄二「お前はホントに嘘がつけないやつだな」

言い換えようとした意味が無いと思う・・・

島田「し、仕方ないわね。店の売り上げのために、仕方なく着てあげるわ」
姫路「そ、そうですね！お店の為ですしね！」

女子たちも正直だと思う・・・

葉月「お兄ちゃん、葉月の分は？」
明久「え？葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」
葉月「お手伝い・・・・・？あ、うん！手伝うから、あの服葉月にもちょうだい！」

なんていい子なんだ葉月ちゃん！まったく、どこかのツンデレとは大違いだよ！

明久「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど葉月ちゃんの分は――」
康太「・・・・・・・・・・！（チクチク）」
圭太「どうした？康太？さっきまでいなかったはずだが？」
康太「・・・・・・俺の嗅覚をなめるな」

康太・・・その発言はかなりきわどいと思うが？

姫路「それじゃ、三回戦が終わったら着替えますね」
雄二「いや、今すぐ着替えてもらいたい」

島田・姫路『え？』
雄二「宣伝のためだ。そのまま召喚大会に出てくれ」
島田「こ、これを着て出場しろって言うの・・・・・・？」
姫路「流石に恥ずかしいです・・・・・・」

それはそうだな・・・

雄二「明久・・・・・・。お前は本当に――チャイナが好きなんだよな・・・・・・」

もうあそこまで言ってるんだ。ここでは否定できないだろう

姫路「もしかして吉井君、私の事情を知って――」
島田「仕方ないわね。クラスのためだし協力してあげるわ、ね、瑞希？」

ナイスだ島田！

姫路「あ。は、はい！これくらいお安い御用です！」

なんとか姫路も快諾してくれた。

島田「いくわよ瑞希」
姫路「はいっ」

チャイナドレスを片手に持って教室を出て行く二人。

康太「・・・・・・・・・・・・できた」
葉月「わ、このお兄さん凄いです！」
秀吉「ふむ。それでは着替えるとするかの」

圭太「仕方が無い、貢献できなかったしな」
明久「ちょ、ちょっと秀吉に圭太！ここで着替えるの！？きちんと女子更衣室で着替えないと駄目じゃないか！」

女子更衣室？なにそれ？俺には関係が無いはずだが？

圭太「ガチで俺は女子扱いになってきたような？」
雄二「気のせいだ。秀吉は秀吉で圭太は圭太だろう」

雄二の一言がかなりの救いだ・・・

明久「うん。雄二の言うとおりだよ。秀吉と圭太は性別が『秀吉』でいいと思う。男とか女とかじゃないさ」
圭太「秀吉は女っぽいところがあるからともかく・・・俺は関係が無いと思うが？」
明久「いいじゃないか圭太！」
秀吉「女として見てくれているのかのう？圭太？／／」
圭太「あっ！ゴメン秀吉！そういうつもりで言ったわけではないんだ！」
秀吉「・・・・・そうかのう？」

秀吉が少し不機嫌になったような気がするけど？

俺たちはチャイナ服に着替えて、Ｆクラスを手伝った。

☆

教頭がＦクラスにいるだと！？何かがあるな・・・

しばらくすると、教頭が明久を呼び止める。そして明久が茶葉を持

ってくるため教頭と離れる

教頭もいっしょにFクラスを出て行った。その後からは嫌な予感しかしない。

圭太「雄二！明久のところに向かってくれ！」

雄二「なぜだかは知らんがFクラスを頼む」

雄二は何か察してくれたようだ。

こうして、俺は召喚大会が始めるまで、Fクラスを手伝った。

☆

『それでは、四回戦を始めます。出場者は前へどうぞ』

マイクを持った審判の先生に呼ばれ、俺たちはステージへと上がった。

『なんだあの美少女たちは！？』

『Fクラスにあんな美少女たちがいたとは』

俺は男だい！それより視線が恥ずかしい・・・

圭太「秀吉！さっさと終わらせるぞ！」

秀吉「うむ」

圭太「でっ相手は？」

秀吉「また見ておらんのかのう？相手は――」

姉上とお主の妹じゃ・・・」

ヤバイ勝てる気がしない！教科によってはいけると思うが・・・

圭太「教科は？」
秀吉「古典じゃ」

古典か、危なかった・・・

圭太「行くぞ！試獣召喚（サモン）！」
秀吉「試獣召喚（サモン）じゃ！」

Ｆクラス　荒井圭太＆　木下秀吉

古典　　８７３点　　８９点

秀吉の点数が上がってきているような？

優子「行くわよ試獣召喚（サモン）！」
椎「試獣召喚（サモン）♪」

Ａクラス　木下優子＆　荒井椎

古典　　３６８点　　４８７点

椎って外国に居たくせに点数が高いな・・・きついかも

圭太『行くぞ！秀吉！』
秀吉「姉上はわしに任せるのじゃ！」
圭太『任せた！』

俺は椎に日本刀で横から切りつける
椎の判断力が高いなら反撃が帰ってくることも考えておかないと―
――

ザシュっ（日本刀で首を一刀両断した音）

Ａクラス　荒井椎

古典　　０点

――って、え？
椎の召喚獣が動かないとは・・・ん？椎が何か言っているな？

椎「圭太の女装～♪」

こういうことか・・・・・ＯＴＬ
こうしてる場合じゃないな、秀吉を助けないｔ――

Ｆクラス　木下秀吉

古典　　０点

０点？・・・・・

圭太『やっぱりか・・・秀吉・・・』
秀吉「すこしは信用してほしいのじゃ・・・・・」
圭太『このザマじゃあ無理だ・・・』
優子「さて愚弟は始末したことだし、圭太行くわよ」
圭太『しゃあ！かかってこいやー！』

優子がランスを俺に向けて突っ込んでくる

ランスを日本刀で俺に触れないようにする、そして無防備になった
優子の召喚獣を

Ｍ９２Ｆで打ち抜く

Ａクラス　木下優子

古典　　０点

圭太『優子！この勝負は俺の勝ちだな』
優子「圭太の女装♪」

あの二人とも？負けた瞬間になぜにそこに食いつくの？
恥ずかしいじゃないか！

圭太「秀吉、もう行こうこの格好はもう嫌だ・・・」
秀吉「可愛いのじゃからいいではないか／／」

そうですか、ここには俺の味方は居ない・・・そうなんですね？

俺は一人でＦクラスへ走って逃げ込んだ

圭太「うわぁぁぁぁん！」

走っている中、泣きたくなったのはもっともだった。

第二十一話　清涼祭

Fクラスを手伝っていたとき

葉月「あ！バカなお兄ちゃん！お客さんがいっぱい来てくれたんだよ！」

明久たちが帰ってきたらしい、結果はどうなったかは知らないけど

圭太「雄二、どっちが勝ってきたんだ？」

明久「雄二！この美少女は誰なのさ？」

明久？なにを言ってる？冗談だよな！冗談だといってくれ！

圭太「雄二？明久は冗談を言っているんだよね？」

雄二「・・・・・・・・・・」

何ですか？その沈黙は、肯定しているということですか？

圭太「話をもどすぞ！ってどっちが勝ってきたんだ？」

明久「雄二、かな？」

パートナーである明久が、疑問形になっているんだけど？

島田「坂本の一人勝ちね」

姫路「ですね」

圭太「？どういうことだ？明久は召喚した瞬間にでも負けたか？」

明久「さすがにそれは無いよ！？」

そうか、そこまでバカじゃないか

圭太「それより喫茶店を手伝ってよ！さっきまで変な客にメアド聞かれたんだけど！」

明久「その人の気持ちがよく分かるよ」

圭太「なぜ分かる？」

明久「性別さえ分からなければ美少女だからね」

圭太「それは褒め言葉として受け取っていいのだろうか？」

もう何が何だか分からなくなってきた・・・

雄二「圭太に明久！そこに固まっていないでこっちを手伝え！」

圭太「だそうだ、明久」

明久「僕じゃないよ！」

雄二「そこの二人に言っている」

そうだったんだ！

俺達は準決勝が始まるまで、喫茶店を手伝っていた

☆

明久「それじゃ、準決勝にいってくるね」

姫路「はい。頑張ってくださいね」

島田「アキ、負けたら承知しないんだからね！」

明久「わかってるって」

明久は人気だな・・・雄二と違って・・・

圭太「雄二！負けんなよ」
雄二「当たり前だ」
圭太「妻に負けるなんて笑えてくるしね」
雄二「翔子とはそこまで行かないぞ！」
圭太「んじゃ、決勝戦で」

雄二たちはFクラスを出て行った。

俺たちが準決勝までまだまだ時間はあるし準決勝まで喫茶店を手伝った

そして時間がきた

圭太「秀吉～準決勝だぞ、準備は良いか？」
秀吉「いつでもかかって来いなのじゃ」
圭太「それは頼もしいな」

『出場選手の入場です』

常村「ゲッ！Fクラスの」
夏川「女装する変態じゃねぇか」
圭太「失礼な！変態に変態といわれる筋合いは無い！」

失礼な奴らだな、やっぱり教頭・・・じゃなくてクソメガネの手先か

常村「Fクラス相手じゃこの勝負もらった同然だな」

Fクラスだからって・・・

圭太「・・・クラス・・・って」
夏川「どうした?びびったのか?それはそうだろう、なんせFクラスだからな」
秀吉「圭太?」
圭太「Fクラスだからってなめてんじゃねぇぞ!雑魚ども!」

久しぶりにキレたな～俺
中学校以来だな～ってあれは反抗期だったかな?

圭太「秀吉～ここは俺一人でやる」
常村「俺たちに一人で良いのか?」
圭太「もちろんだ!俺を誰だと思っている」
夏川「しらね～な!Fクラスぐらいしかしらね」

『では召喚してください』

常夏『試獣召喚(サモン)』

Aクラス　夏川俊平＆　常村勇作

日本史　　２０９点　　１９７点

常村「どうだFクラスじゃこんな点数お目にかかれないだろう」

これぐらい明久だって取れてるけど?

圭太「雑魚ども、俺の点数をよく見ておけ」
夏川「貧相な点数をかw」
圭太「試獣召喚(サモン)」

Ｆクラス　荒井圭太

日本史　　９３２点

常夏「９００点を超えた！？」
圭太『こんなのＡクラスじゃお目にかかれないだろう？』
常村「こんなのカンニングだ！」
夏川「そうだ！」

この俺がカンニング？笑わせるな

『カンニングは一切ありませんでした。』

高橋先生が言うのであれば相手は、なにも言い返せないだろう。

圭太『さてＡクラスがＦクラスに無様に負けてもいいのか？』
常村「二人対一人だ！三年を舐めてんじゃねぇぞ！」

二人の召喚獣がいっせいに飛び掛ってくる
息はいいな・・・だがな！

俺には腕輪があるんだぜ？

圭太『９００点チャージ』

俺の点数から９００点引かれる
そして

圭太『電撃の・・・咆哮！』

俺のＭ９２Ｆから姫路の熱線の倍の電撃が二人の召喚獣にせまる
フィードバックがとてもきついが・・・

常村「こんなのよければ関係など無い・・・ッ！」

召喚獣を避けさせようとするが召喚獣は動かない・・・むしろ召喚
獣が電撃の軌道に入ってきている

夏川「どういうことだ！？」
圭太『この電気には、磁力が発生している』

磁力があるならば、磁力に吸い寄せられる装備がある
相手にとってはチート的な腕輪だ
この腕輪は違うのにもできるけど・・・これだけで充分だ

説明している間に相手が全滅していた。

『勝者！荒井、木下ペア！』

こうして俺たちは準決勝を簡単に終わらせた。

☆

Ｆクラスへ帰還する前に雄二たちの元へ結果を聞きに行っている。

圭太「明久、雄二！結果は？」
明久「雄二が役にたたないから、秀吉に手伝ってもらって勝ってきた」
圭太「わかった！なら決勝戦で、やりあうか？」
明久「圭太の点数じゃフィードバックがきついよ」

いいじゃないか俺にもついているんだし
しかも実験台だよ！？

康太「・・・・・・・・・・・・雄二」
圭太「康太じゃないか！どったの？」
康太「・・・・・・・・・・・・ウェイトレスがさらわれた」
明久「えぇ姫路さんたちが！？」
雄二「やはり俺と明久と圭太に直接やりあっても勝ち目がないと考えたか。」

クソメガネのくせにちょこまかと・・・

圭太「で誰がさらわれた？」
康太「・・・・・・・・・・・・姫路に島田に秀吉に葉月に椎に木下」

そこまでやるか普通？
特に優子と椎は関係が無いはずだが！？

明久「ムッツリーニ！行き先は？」
康太「・・・・・・・・・・・・近所のカラオケボックス」
圭太「なぜそこまでわかるんだ？」
康太「・・・・・・・・・・・・とうちょ・・・このラジオ」

盗聴器ですか、なぜ持っているのかは追求しないでおこう

こうして俺たちはカラオケボックスを目指して走っていた

第二十一話　清涼祭（後書き）

やっとテストが終わりました。
これで更新ができると思ったら、また近いうちにテストが・・・
もうテストはいやですね。
困ります。

はいっということでこれからもよろしくお願いします。

第二十二話　清涼祭

現在カラオケボックス

『さてどうする？坂本と荒井と――吉井だったか？そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』

盗聴器から人攫いの声が聞こえる。

『待て。吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズイ。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしてたらしいからさ』

『坂本ってあの坂本か？』

『あと荒井ってのは、坂本よりも上だ。学校に手を出しに行ったやつらが全員病院送りで、敵をとろうとした組長たちも病院送りらしい』

『荒井ってのはそこまでやばいのか？』

中学校の方でこのことは隠されていたはずなのに・・・なぜ知っている？

あいつらの手下か？

吉井（雄二、圭太、この連中は？）

雄二（今回の黒幕だろうな）

圭太（ねぇ雄二）

雄二（なんだ？）

圭太（なんであのことが知られているの？）

雄二（手下しかないだろう）

やっぱり手下なのか？

葉月『お、お姉ちゃん』
島田『アンタたち！いい加減葉月を離しなさいよ！』

葉月と島田の声が聞こえる。

『お姉ちゃんだってさ！かわいい！』
『ギャハハハハハ』
優子『あんた達！こんなことして恥ずかしくないの！』
『あ？うぜ～奴だな』
椎『とにかく葉月ちゃんを離しなさいって行ってるのよ！』

優子に椎の声が聞こえる

雄二（まて明久、勝手に行動するな）
圭太（今は、様子を見てから本格的に潰すからあせるな）
明久（圭太はなんとも思わないの？妹もこの中に入っているのに）
圭太（椎は義兄妹だ）
明久（何でさ！？）
圭太（いつかは話す、聞きたいのであれば、今は我慢だ）
明久（・・・・・・・・・・・・うん分かった）

なんとか明久を抑えることができた

康太『・・・・・灰皿をお取替えいたします』
『おう。で、このオネーチャンたちどうする？ヤッちゃっていいの？』
『だったら俺はコッチの巨乳チャンがいいな！』
『あっズリー！それなら俺は二番ね！』

パーティールームから気味悪い笑い声が聞こえる

姫路『あ、あのっ！葉月ちゃんを離して、私たちを帰らさせてください』

『だってさ～どうする？』

『それはオネーチャンたちのがんばり次第だよな？』

姫路『やっ！さ、触らないで――――』

島田『ちょっと、止めなさいよ！』

『あーもう。うっせぇ女だな！』

島田『きゃぁっ』

ドン、という何かを突き飛ばした音が聞こえる。

それと同時に明久がパーティールームへと入ろうとする

雄二（おい、明久）

明久はドアを行きおいよく開ける

明久「おじゃましまーす！」

なんて明るい挨拶なんだ！っと俺は思ってしまった

姫路「よ、吉井君？」

島田「アキ・・・」

盗聴器から明久が入った事を確認する。

明久「それじゃあ失礼して・・・・・・」

明久が何かをする

明久「死にくされやぁぁ」
「ほごあぁぁぁぁ」

明久が作戦を無視して攻撃を開始する。

圭太「雄二、王子様役の明久が攻撃開始したけど？」
雄二「お前もその中に入っているんだがな」

明久が王子役でしょ！？
違うの？

雄二「明久がバテてるかもしれないから行くぞ」
圭太「あっ！へ～い」

俺達はパーティルームへ向った

パーティールームでは明久がキマッていた

そんな明久にパンチが送り込まれた

雄二「やれやれ・・・・・・この阿呆が。少しは頭を使って行動しろって――――のっ！」
「げふっ」

雄二がボコっていた・・・・・・もうこの映像はゲームでたとえるならもうチートだ

圭太「明久～作戦が台無しじゃない――――かっ！」

俺もそこに居た奴らをボコっておく

「坂本に荒井ってやつじゃねぇ――――ゴパァ」

流石は俺だ！セリフを言わせないように殴ってみたｗ

「坂本よぉ。このお譲ちゃんがどうなってもいいのか？」

葉月ちゃんを羽交い絞めにしていた。小学生でこういう体験はトラウマになるんじゃないか？

「いいか？おとなしくしていろよ？さもないと、ヒデェ傷を――――」

康太「・・・・・・・・・・・・負うのはお前」

康太がクリスタルの灰皿でチンピラを殴る

結構痛そうだ、考えただけでも痛みがきそうだ。

葉月「お、お姉ちゃん！お姉ちゃーん！」

葉月ちゃんが康太の活躍により離された

圭太「雄二！こいつら倒した後どうする？トラウマでも植えつけとくか？」

雄二「せめても病院送りにしといてやらぁぁぁぁ」

せめても病院送りってどういうこと？

「よそ見してんじゃねえぞ！」

圭太「俺が余所見でもしているとでも？」

少々お待ちください

圭太「雄二どうする？このゴミどもは」

チンピラの塔がパーティールームで出来上がっていた

明久「ゴミ処理所に持っていこうよ」

雄二「それじゃあ意味が無いだろう・・・・・・」

圭太「んじゃ！明久！黒幕を聞き出しとけ」

明久「こいつらが黒幕じゃないの！？」

雄二「当たり前だ明久（バカ）」

明久「バカ呼ばわりしたな！」

明久たちが後処理をしてくれることを確認して

俺は優子たちの元へ歩いていく

圭太「優子に椎に秀吉、大丈夫か？」

優子「大丈夫にも何もさらわれたのよ！？」

圭太「まさか黒幕がここまでやるのかと考えてなかった・・・すまない」

秀吉「謝罪よりもこれを解いてほしいのう」

圭太「なんだ？秀吉の趣味か？」

秀吉「違うのじゃ！・・・・・・圭太はこれがいいのかのう？（ボソっ）」

後半は聞こえなかったが縄を解いてやる

雄二「それじゃあ無事解決したことだし！戻るか」

俺達は文月学園へ向った

この仮は返させてもらおうか・・・クソメガネ

第二十三話　清涼祭

誘拐騒ぎも解決して、喫茶店一日目が終了したFクラスの教室。
そこに俺と雄二と明久で貸切状態になっていた。

雄二「そろそろ来る時間だぞ」
明久「？来るって誰が？」
圭太「これぐらいも分からないほどのバカに成長したんだね。」
明久「バカに成長ってあるの！？それより誰が来るの？」
雄二・圭太『学園長（ばばあ）だ』

雄二は、もうババアで執着してるんだ・・・

明久「学園長がわざわざここに来るの？」
雄二「俺がここに呼び出した」
明久「なんで呼び出す必要があるのさ！」
雄二「用事もクソも・・・・・ババアが原因があるはずだからな」
明久「ババアが原因――――てえぇぇぇ！？」

明久もババアで執着してるんだ・・・一応上の人だからね？

圭太「雄二の考えはどこまで行ってるのか知らないけど、多分学園長が絡んでると思う」
明久「あ、あのババア！僕らに何かを隠してたのか！？」
学園長「・・・・・やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶だねぇクソがきどもが」

あの～学園長？その中に俺は入ってますか？

雄二「来たかババア」
明久「出たな悪の根源め！」
圭太「明久、学園長は黒幕ではないって」
学園長「おやおや、いつの間にか黒幕扱いされていないかい？」
学園長？おれの話し聞いてました？
雄二「黒幕ではないだろうが、俺たちに話していないことは充分に裏切りだと思うがな」
学園長「・・・・・。やれやれ。賢しいヤツだとは思っていたけど、まさかアンタに考えに気がつくとは思って無かったよ」
雄二「この召喚大会の景品の回収ぐらいなら俺たちじゃなくて高得点の圭太や翔子に頼めばよかったはずだ」
明久「それはそうだね」
雄二「そこから違和感に気付いたんだ」
流石は雄二！俺なんか最初からは分かって無かったよ！
雄二「圭太は分からなかったらしいな」
圭太「なぜにわかったんだ！」
明久「本当に分からなかったんだね」
明久！俺に同情の視線をぶつけるな！
雄二「で、あのときにババアに提案をひとつだしたが覚えているか？」
明久「提案？」
圭太「そこで雄二は学園長を試したってわけか・・・・・」

その探りで学園長の考えが分かってきたんだな・・・・・・・

雄二「そのせいで、営業妨害に姫路たちを誘拐が決定的だった。ただの嫌がらせでここまではしないだろう」

学園長「そうかいそこまで手段を選ばなかったか・・・・・・すまなかったね」

学園長が俺たちに頭を下げる

圭太「学園長!?悪いのはクソメガネのほうですよ?」

学園長「あんたたちに妨害が及んだ時点で当たり前さね」

雄二「さて、こちらの種明かしは終わりだ次はババアだ」

明久「まだババアがなにか隠してるの?」

圭太「当たり前だろう?高得点者を使えば景品は簡単に手に入るが、俺たちを使った。その時点で何か隠していると思わないか?」

学園長「はぁ・・・・・・あたしの無能をさらす話だから、できれば伏せておきたかったんだけどね」

学園長は、やっと真相を話してくれた。

学園長「あたしの目的は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃないのさ」

明久「ペアチケットじゃない!?どういうことですか?」

雄二が身震いしているような?

学園長「あたしにとっては企業の企みなんてどうでもいいさね。あたしの目的はもう一つの賞品さね」

雄二「もう一つというと『白金の腕輪』とやらか」

圭太「ゲームで言うサブウェポン見たいなやつか?」

学園長「そんな感じさね。そこでその白金の腕輪を勝ち取ってもらいたかったのさ」
明久「回収してほしいわけじゃなくて？」
雄二「回収が目的だったら俺たちに依頼をする必要がないだろう？そもそも回収なんて真似は極力避けたいだろうしな」
学園長「本当に頭が回るガキさね・・・・・そうさ。できるなら回収なんて真似だけはしてほしくないさね。新技術は見せてナンボだからさね」

明久は分かってくれたかな？

明久「それで、白金の腕輪は僕たちじゃないと駄目なんですか？」
学園長「・・・・・欠陥があったからさ」

学園長が苦々しく顔をしかめていた。
こんなことを生徒たちに明かすのだから無理も無いと思う

圭太「それでその欠陥と明久と雄二を使ったわけを聞かせてもらえますか？」
学園長「欠陥というのは学力によって反映されてしまうからさね、そこであんたらみたいな
『優勝の可能性を持つ低得点者』ってのが一番都合がよかったからさ」
明久「よく分からないんだけど褒められているってことでいいのかな？」

褒められているってことでいいんじゃない？
明久だし

雄二「いや、お前らはバカだと言われているんだ」

明久「なんだとババア！」
圭太「説明がないと理解ができない時点で否定できないと思うんだけど・・・・・・」
学園長「話を戻すさね。二つある腕輪のうち片方はフィールドの作成用はある程度までは耐えられるんだけどねぇ・・・・・・片方は平均点程度まで暴走する可能性があるのさね」
明久「それって褒められているんだととっていいんだよね？」
雄二「いや、バカにされてる。ものすごい勢いで」
明久「なんだとババア！」
雄二「いい加減自分で気づけ！」
圭太「まさか明久、直接バカって言ってくれないと分からないのか？」
明久「なんで分かったのさ！？」

否定しないんだね・・・・・・・・

雄二「そうか。そうなると、俺たちの邪魔をしてくるやつは学園長の失脚を狙っている立場の人間
――――――」
圭太「そこであのクソメガネか・・・・・・・」
学園長「竹原で間違っていないさね」
明久「それじゃあ、ぼくらの邪魔してきた常夏コンビとか、チンピラとか、」
圭太「明久の考えで間違っていないと思うよ」
明久「あのさ、これってまずい話じゃない？」
雄二「学校の存続がかかっていた話だったな」
明久「だった？どういうことさ？」
圭太「その手下どもは俺が入念に潰しておいといた」

常夏コンビにはとても腹が立ったしね。

腕輪で潰しておいたよ

明久「それじゃあ、圭太たちに腕輪を回収してもらったら？」
圭太「それじゃ、デモンストレーションってのができないじゃないか」
明久「そうだったね・・・圭太に勝てる気がしないよ・・・」
圭太「雄二は俺たちに勝つ作戦があるはずだ」
雄二「もちろんだ」

雄二もできているようだし、がんばってもらわないと

学園長「それじゃ、明日は頼んださね」

明久・雄二・圭太『おうよ！』

その後俺は・・・・・・

優子「遅かったじゃない」
椎「けっこう待ってたんだからね」
圭太「すまない明久がバカをやっていたからな」
秀吉「そうだったのかのう」

どうした？みんな？その納得しましたっていう空気は！

圭太「それより帰るぞ！また絡まれるとだるいからな」
優子「大丈夫よ、圭太がいるじゃない」

俺が何でもできると思ってんの？

こうして俺達は、家に帰っていった

優子「ねぇ圭太、今日は圭太の家に泊まっていい？」
圭太「それはかまわんけど何で？」
秀吉「今日の出来事があったからじゃ」

そうか・・・あれは結構きついモンな

圭太「まぁいいけど？親に連絡は？」
優子・秀吉「しておいたわ（のじゃ）」

準備がいい事で！

圭太「というより俺の家に泊まることが決まっていたような言い方だな！」
椎「気にしない♪」

そして優子と秀吉は俺の家に泊まっていった。

第二十四話　清涼祭

圭太の家にて

圭太「えーと今日の晩御飯は～」

現在調理中

圭太「まぁ～ここは簡単にっと」

少々お待ちください

圭太「晩御飯完成！っと」

優子「できたみたいね」

圭太「ず～っと見てたからな・・・・・・食器ぐらいは並べてくれてもいいはず・・・・・」

椎「それなら秀吉君がやってるよ」

椎！お客さんにさせるのか！？食器を並べるのはお前じゃないのか！？

圭太「椎・・・・・普通はお前がやるはずなのだが？」

椎「別にいいじゃない」

圭太「良くない」

秀吉・・・・・済まぬ、こいつに常識を教えたときにしか反論できない

圭太は秀吉が並べた食器に盛り付ける

圭太「それじゃ～～いっただっきま～す！」

優子「（もぐもぐ）」

食うの早いなー（↑棒読み）

圭太「そうだ秀吉、決勝の教科は？」

秀吉「また見ておらぬのか？決勝戦の教科は物理じゃ」

物理か・・・・・・あいつらそんなに点数あったっけ？

優子「圭太、もちろん優勝するのよね？」

椎「負けたりしたら～どうなるのか分かっているよね？」

駄目だ！今、『そんなの無理です♪』とか言ったら殺される！

圭太「う、うん大丈夫だよ・・・・・・多分」

優子「如月グランドパークに行きたいな～」

ぐっ！追い討ちが！

圭太は秀吉に支援を要求する

圭太（秀吉！この話をそらしてくれ！）

秀吉（なぜじゃ？）

圭太（もちろん、（優子）「なんで秀吉と会話してるの？（プシュっ　圭太の目を指す音）」）

圭太「目が・・・・・・目が！切り裂かれるように痛いぃぃぃぃぃぃぃ！」

俺が何をしたって言うんだ!?
俺は、目が潰されて生まれたての小鹿のように立ち上がる
圭太「優子に椎は・・・何で・・・如月グランドパークに・・・行きたいんだ?・・・誰か好きな人でもできたのか?」
俺は目の痛みに耐えながら話す
優子「そ、それは~~ねっ／／」
椎「そ、そうだね~~／／」
くそっ目がいかれてる時点でどうなっているのかわかんねぇ!
というより早く寝て目を回復したい!
圭太「俺は寝るけどお前たちはどうする?」
椎「私は~圭太の部屋で寝よっかな?」
優子「椎、それだけはさせないわ!」
優子の言うとおりです!
優子「私たちも圭太の部屋で寝れるのだったらいいけど?」
椎「む~~仕方が無い」
圭太「ちょっと待つんだ!女子たちは椎の部屋だろう?」
俺は何とか言い聞かせて
俺の部屋に秀吉
椎の部屋に優子ということになった
なったはずだった・・・・・・・・・・

翌朝

圭太「今何時～～？」

なんだと体が動かないだと！？
俺は初めて金縛りを受けているような気がする。というより楽しい♪
まずは右腕を動かしてみよう

・・・・・・

右腕が重いだと！？
頭は動くはず！

圭太は頭を動かすと
優子と椎と秀吉が俺の布団に入っていた

圭太「なんでここに優子たちがいるんだーーー！」
優子「圭太・・・うるさい」
圭太「お前たちのせいでこうなっているんだ」

まったく、隙を見せたらこうなるわけか

圭太「秀吉に優子にはすまないが俺は早く喫茶店の準備をしなくちゃいけない」
秀吉「わしもなるべく早く来るのじゃ」
圭太「ありがとうな」
秀吉「礼を言われるまでもないのじゃ／／」

秀吉はいつも優しいな

圭太は喫茶店へと走った

明久「圭太じゃないか！」
圭太「おう明久！今日は早いな～」
雄二「回復試験を受けてたからな」

明久がこんな早くに回復試験！？

圭太「今日は雨がふるかな」
明久「天気予報みたけど雨は降らないよ！？」
雄二「朝早くからだったからな～眠いぞ～」

翔子を呼んでみようかな？

雄二「やめろ！圭太！俺の明日がなくなる！？」

雄二もこうなっているし止めてあげよう

島田「アキ、おはよ～」
姫路「おはようございます、吉井君」

姫路と島田たちがきた

秀吉「なるべく早く来たのじゃ」

圭太「秀吉も一緒のタイミングで来てたのか」
康太「・・・・・・・・・・・・姫路たちに異常はなかった」
圭太「そうかそれは良かった」

それより昨日は喫茶店を手伝っていないしな

圭太「雄二に明久は休んでいてくれ」
雄二「すまないな」
明久「眠たいからそうするよ」

雄二と明久は喫茶店を出て行く

圭太「そんじゃあ喫茶店を始めるぞ！」

それと同時に喫茶店がはじまった

第二十五話　清涼祭

『さて皆様。長らくお待たせ致しました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います』

現在、召喚大会決勝戦

『出場選手の入場です。』

俺たちはステージに上がった

『二年Ｆクラス所属・坂本君と吉井君です』

明久たちもステージに上がっている

『そして、対する選手は、なんと二年Ｆクラス所属・荒井君・木下君？です』

どんまい秀吉・・・

秀吉「わしは男じゃ！」
圭太「俺は知っているぞ」
明久「秀吉は秀吉だよね！」
圭太「明久（バカ）は黙ってろ」
明久「酷いじゃないか！」
圭太「それより雄二」
雄二「？なんだ」
明久「僕のことはスルー？」

明久は黙って下さい。

圭太「俺たちに勝てる自信はあるのか？」

そう、ここで雄二たちが負けたら不味いことになる

雄二「俺が負けるとでも思っているのか？」

いい返事だな雄二

圭太「俺たちに勝てよ？お前ら、試獣召喚！」

秀吉「試獣召喚じゃ」

Fクラス　荒井圭太＆　木下秀吉

保健体育　　２３点　　７６点

圭太『あれ！？俺、何か点数が低いんですけど？』

明久「何で圭太がこんなに点数が低いの！？」

秀吉「圭太は保健体育が低いからのう」

あれっ？保健体育！？

圭太『くっ！なんて強力な作戦なんだ！』

雄二「作戦も何もお前がバカだからだ、圭太」

俺が明久だとでも言うのか！

明久「圭太が無力なら簡単だね雄二」

雄二「よし行くぞ明久！」

明久・雄二『試獣召喚（サモン）！』

Ｆクラス　坂本雄二＆　吉井明久

保健体育　　１０５点　　７６点

明久「雄二が保健体育を教える理由がやっとわかったよ」

あいつら・・・・・俺の上を行きやがって・・・・・・・

秀吉「圭太の点数なら誰でも上じゃからのう」

ゑ！？そうなの！？

『それでは始めてください』

圭太『秀吉は明久を！』

秀吉「こころえた」

俺は雄二の攻撃が来る前に日本刀を構える

雄二「せいぜい持ってくれよ？圭太」

圭太「そんな俺に負けるんじゃねぇぞ！」

雄二の召喚獣が俺に向けて飛び掛ってくる

そして右ストレートが飛んでくる

圭太『そんな攻撃が俺に当たるとでも思ってんのか？』

右ストレートをよけて日本刀で召喚獣ので切りつける

Fクラス　坂本雄二

保健体育　　７３点

なかなか減らないな

雄二「これぐらいがどうした！」

雄二の召喚獣が左ストレートで俺の胴にめがけてきた

俺が避けたらのために右ストレートも構えている

圭太『こんなの！』

俺は後ろに回った

雄二の召喚獣は左ストレートを放ったあとだった

圭太『もらった！』

俺は日本刀で一刀両断にしようとした。

雄二「こっちこそもらった！」

雄二の声とともに雄二の召喚獣の右肘が

・・・・・俺の鳩尾に

圭太「鳩尾がぁぁぁぁぁああ」

俺の点数が無くなった為、フィードバックがとてつもなく痛い

秀吉「すまぬ圭太」
圭太「・・・・・どうした?秀吉?」
秀吉「圭太よりも早く負けてしまったのじゃ」

俺は明久たちの方向を見る
明久たちはガッツポーズをしていた。

明久「本当に圭太に勝てるだなんて夢みたいだよ」
圭太「俺に勝ったのは雄二だ」

明久よ、人の手柄を持って行くんじゃない・・・

雄二「召喚大会が終わったことだし喫茶店を手伝うぞ」
圭太「わかってるけど・・・フィードバックが・・・」
秀吉「大丈夫かのう?」
圭太「ん?あぁ、慣れたら大丈夫だと思う」

フィードバックに慣れる時が来たら・・・ね?

圭太たちは大会の会場を出て喫茶店へと向かった

『ただいまを持って清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速

やかに撤収作業を行なってください』

明久「お、終わった・・・・・・」
秀吉「流石に疲れたのう・・・・・・」
康太「・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

本当に疲れたな・・・・・・精神的な疲れで

圭太「なんで俺がまた女装して接客しなきゃいけないんだ？」
明久「圭太は綺麗だからいいじゃないか！」
圭太「明久（バカ）だって女装すれば可愛いじゃないか！」

なんだろう・・・このやり取りすると悲しくなってくる・・・・・・

雄二「明久に圭太、学園長室に行くぞ」

まさかこの格好だとは言わないよな？

圭太「着替えてからそっちに行くよ」
明久「駄目じゃないか！」

明久が俺にしがみついてくる

秀吉「ふむ。ならばわしも」
明久「させるかっ！秀吉と圭太だけは着替えさせない」
秀吉「なっ！？何をするのじゃ明久！」
康太「・・・・・・・・・・・・（フルフル）」

明久は俺から離れて秀吉にタックルした

圭太「んじゃ！着替えてくる」
雄二「あぁ、わかった」

俺は更衣室へと向かった
なぜ俺が更衣室にいかなければならないのかというと康太が鼻血を
海に沈むからだという

（ｂｙ明久　談）

圭太「俺の制服がいとおしい気がする」

女装するとそうなるんだって・・・

携帯がポケットからなり始めた
連絡先は雄二か・・・

圭太「なんだ？」
雄二『不味いことになっている。常夏コンビが・・・・・・・いた！』

ブツッ（電話を切る音）

なんだよ～どこの嫌がらせだよ～

そう思ったのも、つかの間

ドォン！パラパラパラ

ドォン？パラパラパラ？

雄二「外したぞ明久！もうちょい下だ！」

雄二の声が聞こえる

ヒュ～・・・・・・　　ドォン！

花火が当たった後を見ると放送機材が壊れていた

圭太「これって見つかったら・・・・・・ていがk、退学だよね？」

言い直してみたけど・・・そうなるよね？

須川「荒井、打ち上げでも行くか？」

圭太「ん？あぁ、先に行っていてくれ」

明久たち・・・・・・生きて帰ってこれるかな？

西村「吉井に坂本ぉっ！無事に帰ることができると思うなよ！」

帰って来れないらしい・・・

近所の公園にて

明久「いてて・・・・・・。随分と殴られたよ」

雄二「くそっ！鉄人め。あの野郎は手加減を知らないのか」

雄二と明久が無事ログインしました。

圭太「大丈夫・・・・・・か？」

雄二「大丈夫に見えるなら、病院にいって来い」

まったく心配してやってるのに

俺は近くにおいてあった缶ジュース？をあけて飲み始めた

圭太「って苦いんだけど！？」

ラベルを見てみると酒っと言う字があった

圭太「誰だよ！こんなの買ってきたやつ！ってぬわぁ」

秀吉が俺に乗ってきた

というより秀吉の顔が赤い

圭太「秀吉・・・酒でも飲んだのか？」

秀吉「酒なんてのんでいないけど？」

秀吉って酒を飲むと標準語になるんだー（↑棒読み）

秀吉「圭太は好きな人がいるの？」

俺？俺か～・・・う～ん

圭太「知らないなって、俺に乗ったままで寝ないで！」

無責任だな。

優子「圭太～って秀吉！何してんのよ！」
圭太「秀吉をどかしてください！」

優子によって秀吉がどけられる。

圭太「それより優子」
優子「何？」
圭太「なんでここにいるんだ？」
椎「Aクラスと合同だから♪」

椎がいつの間にか来ていた

Aクラス？・・・っとなると

翔子「・・・・・・雄二」
雄二「何だ？」
翔子「・・・・・・子どもの名前は何がいい？」

あっちは激戦区に入っているな・・・
というか子どもの話まで進めているのか・・・

圭太「俺はもう帰ってもいいか？」

俺は激戦区から抜け出そうと試みた

優子「駄目じゃない！・・・せっかくゆったりとできるのに（ボソッ）」
椎「私はいつも一緒だけどね～♪」

優子の後半の言葉は聞こえなかったが気にしないでおこう

圭太「秀吉は俺が送っていくから帰るぞ！」

優子「・・・うん」

椎「は～い」

こうして俺たちの清涼祭が終わった

第二十五話　清涼祭（後書き）

やっと更新ができました！

清涼祭って結構、期間がかかるものですね。

圭太「作者がちゃんとしてくれたら良いんだけどな・・・」

失礼な！これでもちゃんとしてるよ！？・・・・・・・・・・・・

たぶん

圭太「やっぱり多分じゃねぇか！」

キコエナイナ？

圭太「おぉい！」

まぁこれからも

よろしくお願いします。

第二十六話　俺と椎（前書き）

圭太と椎の昔話です。

ちょっとシリアスです

第二十六話　俺と椎

現在Fクラスにて

明久「ねぇ圭太」
圭太「？なんだ明久」
明久「清涼祭の時に誘拐されたときのこと覚えてる？」

いきなり聞き出すことはそれですか？

圭太「あぁ、島田が飛ばされてーーーー」
明久「ちょ、ちょっとストップ圭太！」

明久が島田のために誘拐犯に立ち向かったことじゃないの？

明久「圭太と椎ちゃんが義兄弟ってことだよ」

そんなこと言っていたかな？

圭太「話すと言っていたなら話そうか」
雄二「ん？あぁ、あのことか」

雄二が俺たちのチャットにログインしました。

明久「雄二は知っているの？」
雄二「小学校が一緒だったからな」
圭太「聞かないでいいのか？明久」
明久「もちろん、聞くさ」

圭太「わかった」

それは俺が小学校に入る前の一ヶ月前だった・・・

そのころ俺は家で、ソファーに寝転んでいた。

ピンポーン♪

インターホンが家に鳴り響く

圭太「は～い」

俺が玄関を開けると

椎「圭太君！遊ぼ♪」

近所に住んでいる椎の姿があった

圭太「あれ？今日は俺ん家に来る予定は無いはずだが？」

椎「お母さんとお父さんが圭太の家に行けって言うんだもん」

ということは、椎の両親が計画を立てていた椎の誕生日パーティーが今日なのか

なんで俺が知っているのかというと

椎の両親が俺に伝えに来たのだから、もちろん椎はそのことを知ら

ない・・・
って今日がそのパーティーの実行日か・・・

圭太「まぁ、上がっていいぞ」
椎「おじゃましま～す」

そして俺の家には誰もいない、もちろん椎の両親と準備をしているから

椎「このお家が私たちの愛の巣になるのね」
圭太「なにボケたことを言っている」

こいつのボケは何か飛んでいる物が多かった

俺の部屋でトランプなどして遊んだ

そして、一通の電話が家に鳴り響く

圭太「すまんがちょっと電話に出るよ」
椎「別にいいよ」

受話器をとる、その相手は俺の両親だった

圭太「って何?用件は?」
圭太母「椎ちゃんは、いる?居るんだったら変わってほしいんだけど」
圭太「わかった・・・椎ーお前に電話」
椎「え?あっは～い」

両親の声はとてもあわてていた様子だった

何で椎に変わった理由は分からないまま
そして受話器を椎に渡す

椎「あ！はい！椎ですけど・・・・・・えっ！」

びっくりした声とともに椎がその場に崩れて倒れる。

圭太「椎？どうした？」

椎の顔を見ると・・・目には涙が浮かんでいた

椎「私の・・・私の親が・・・・・・」

うん。椎の両親が？

椎「交通事故で死んだって・・・」

親があわてるのも意味が分かった

椎はそのショックでまだ泣いている・・・

その姿をみた俺はなんて声をかけたらいいのか分からなかった・・・

そして、椎は椎の祖父母に引き取られた

一週間後には、祖父母たちも交通事故で死んだ・・・

葬式で椎にあったときは、椎は落ち込んでいた。

圭太「大丈夫か?椎?」

俺にはこのぐらいしか話せなかった。

椎「う、うん・・・」

その後に問題が起きた

椎はそのまま保育所に連れて行くか、誰かが引き取るかっという問題が

俺は、そのことを両親に話した。

そして、俺の両親は了承してくれた

あとは、本人の意思だ

俺は、そのことを本人に話してみた

圭太「椎・・・俺ん家に来ないか?」

椎「そんなことしたら・・・今度は圭太の家族が交通事故で死んじゃう」

椎は両親が交通事故でそして、祖父母も交通事故

自分のことを責めていたかのようだった

それぐらい・・・

圭太「それぐらいどうでもいい!それに俺たちがそんなに簡単に死ぬとでも思っているのか?」

椎「私は・・・私のせいで死んでいったのよ！」

椎は自分の誕生日で両親が死んだと思っている

圭太「そんなバカなことがあるとでも思っているのか？」

椎「そうなったじゃない！」

圭太「たしかにそうなったのかもしれないが、俺の信頼は無いのか？」

椎「・・・・・・・・・・・・・」

椎は深く考え始めた。

椎「・・・・・・わかった・・・圭太のことを信じる」

圭太「それでこそ椎だ」

こうして椎は俺たちが引き取った

小学校に入ったときに雄二と出会った

そのときに椎は自分の苗字を『荒井』と言いはじめた。

圭太「ということだ。明久」

明久「何か聞いてはいけなかったような気がするけど？」

圭太「大丈夫だ。椎は自分からそのことを言うからな」

明久「ということは・・・」

ということは?

明久「死んでわびろーー」

俺にパンチしてきた

圭太「ぬわぁっと何しやがる」

明久「家族でもない人が一緒に家にいるだなんて・・・うらやま・・羨ましいよ」

言い切った!本音を言い切った!

圭太「そんなことで怒るのかよ」

雄二「バカだからな」

そうかバカだからか

そして、明久はＦＦＦ団と一緒に俺と鬼ごっこ?を始めたのであった。

第二十六話　俺と椎（後書き）

オリ話です。初めてだから難しいですね。

まぁこれからもがんばっていきます。

第二十七話　ラブレター騒動！？

それは、ある日突然に起きた・・・

そして、ある朝

圭太「ふわぁ～～っと・・・ってまた優子たちがいるんだ？」

優子「別にいいじゃない」

そうなると俺の自由が無くなるのですが？

圭太「とにかく・・・着替えなきゃならないから俺の部屋から出てってくれ」

優子「えぇ～～」

秀吉「ワシはいいかのう？」

秀吉は男だからな

圭太「秀吉なら別にいいんじゃない？」

椎「じゃ～私は？」

貴女は女でしょ！？

圭太「もういいよ・・・スマンが秀吉も出てってくれ」

秀吉「・・・・・わかったのじゃ」

そして、秀吉がカメラをもっているのに疑問を抱いていいのだろうか

圭太「準備ができたら出てくるから、先に行っててくれ」
優子「準備ができるまで待ってるわ」
圭太「遅れたら優子の優等生の印象が悪くなるぞ」
優子「うぅ～それは避けたいわね・・・先に行ってるね」

優子は優等生だからな・・・

優子は文月学園へと向かった

数分後・・・

圭太「んじゃ！行きますか」
秀吉「いつも圭太はのんびりじゃのう」
圭太「悪いか？」

のんびりで何が悪い？

椎「圭太は昔からだから仕方が無いよ」

仕方が無いのかよ！

椎「それじゃ～行きましょ♪」
圭太「へ～い」
秀吉「行くかのう」

俺たちも文月学園へ向かった

雄二「おう圭太じゃないか！」

圭太「あ、雄二！」
翔子「・・・・・・私もいる」

翔子も一緒なのか

圭太「雄二と翔子はお暑いことで・・・」
雄二「んな分けあるかー！」
翔子「・・・・・・圭太、雄二が言うことを聞いてくれない」

雄二はまったくだな

圭太「雄二を裸エプロン状態にして、ビデオで撮ってあげたら？」
翔子「・・・・・・わかった。そうしてみる」
雄二「おい！圭太！なんてことをーーー」
圭太「雄二が素直じゃないのがいけない」

秀吉に椎もそう思うよね？
確認してみよう

秀吉「まったくじゃのう」
椎「女から逃げるなんてモテないよ？」

雄二はまずモテなーー

ヒュン（カッターが風を切る音）

雄二「圭太、今失礼なことを考えなかったか？」
圭太「いや～なんで雄二がモテないか考えていたところってうわぁ」

また投げてくるだなんて、危ないじゃないか！

そうして俺達は文月学園へと着いた

靴箱で事件はおきた

圭太「あれ？明久？」
明久「あ、あぁ圭太じゃないか！おはよう」
圭太「うん、おはよう」

明久がこんなに早くに学校にいるだなんて・・・
しかも明久がラブレターらしき物が手元にあった

圭太「明日は竜巻でもできるかな？」
明久「そこまで珍しいの！？」

それぐらいはあるだろう

明久「そ、それじゃあー先に行ってるね」

明久はＦクラスへと向かった

圭太「雄二」
雄二「わかってる。明久の調査だろ」
圭太「さすがだ雄二！」
秀吉「今のだけで分かるのかのう？」

俺達は幼馴染だからな

さて俺も靴箱を開けてみーー

ドサッ（手紙の音×３）

ん？手紙？

まさか！ラブレター？

俺はすぐさま雄二の姿を確認するが雄二は明久の調査に行っているようだ

よかった・・・雄二にみつかっていたらどうなっていたことやら

秀吉「どうしたのじゃ？圭太」

秀吉がいた・・・・・・

圭太「な、何でもないんだ秀吉」

秀吉「そうかのう？」

よし、これで秀吉を無力化に成功したはず！

圭太「そ、それじゃ、Ｆクラスに行くぞ」

俺達はＦクラスへと向かった・・・

そして、平和な日常が来るはずだった・・・

西村「それじゃあ出席を取るぞ」

「工藤」「はい」「斉藤」「はい」

「近藤」「はい」

次は雄二だったな

「坂本」「・・・・・・明久がラブレターをもらったようだ」
F『殺せぇーーー』

さすがは雄二！あの物がなんだったのか、わかったよ！

その後に、爆弾は落とされる・・・

秀吉「・・・・・・圭太も貰ったようじゃ」
F『あいつも殺せぇーーー』

あれ？・・・・・・俺も標的に入ってる？

圭太「秀吉～」
秀吉「素直じゃないからいけないのじゃ」

そこで駄目押しされても・・・

西村「それでは、出欠を再開するぞ」
「手塚」「吉井殺す」「藤堂」「荒井ブチ殺す」
明久「返事が殺すになってるけど！？」
西村「吉井！静かにしろ」
圭太「ならこの騒動をとめてください！」

本気でお願いします！

西村「このことは、吉井だけにしろ！・・・・・・再開しよう」
「村田」「吉井殺す」「小倉」「吉井マジ殺す」

よかった・・・標的から離れたようだ・・・

秀吉を・・・・・・・・・・・・・・・・除いて・・・・・・・・・・・・・

西村「これで出席を終わるぞ」

Ｆ『吉井を殺せぇーーー』

吉井「うわぁーーー」

吉井は地獄の鬼ごっこが始まった・・・

そして・・・・・・

優子「覚悟はできている？圭太？」

椎「圭太ちゃん？覚悟」

秀吉「無事に帰ってこれるかのう？」

俺も地獄の鬼ごっこが始まった・・・

椎「圭太～そう逃げないでよ～」

圭太「自分から処刑台に上ってたまるかぁ～～」

自分から死に行くやつがあるか！

俺は、走って椎たちがこれていないことを確認して

走って行くたびに明久とであった。

圭太「明久！」
明久「圭太じゃないか！・・・それで、どこに隠れる？」
圭太「決めてない！明久が決めろ！」
明久「う～～～ん、じゃあ屋上で」
圭太「屋上だな！」

こうして、俺達は屋上へと向かった。

ここで失態してしまったことを知らずに・・・

屋上にて

雄二「おう明久に圭太」
圭太「よう雄二！奇遇だな」
明久「本当に奇遇だね」

まさか雄二がいるなんて思っても無かったよ

雄二「圭太は大丈夫だったか？」
圭太「大丈夫にも何も秀吉のせいでーー」
秀吉「ワシがどうしたのかのう？」

くッ！先に回っていたか・・・

椎「まさかここまできて抵抗しようと思ってるんじゃないよね？」

何で椎まで！？

椎「圭太たちの会話が盗聴してたら聞こえてたんだよ♪」

盗聴があったか・・・

優子「本当にバカね・・・」

俺が明久とでも言うのか！

圭太「俺が明久だとでも言うのか？」

秀吉「明久と行動をともにしているだけで、一緒じゃのう」

しまった・・・・・

優子「それじゃあ圭太」

椎「手紙～見せてもらえるかな？」

それは理不尽だ！

圭太「フンッ！この俺が簡単に渡すとでも思ってい・・・間接がありえない方向にいいいいいいーー」

俺はこの後どうなっていたか分からなかった・・・

優子サイド

圭太を無力化にしてみて、手紙を見つけたのは良いんだけど・・・

私のほかに秀吉に椎までもが

ラブレターを出していただなんて・・・

こうなったら圭太を自分の物にして・・・っていけない！トリップ状態までいってたじゃない！

それより、意識を失った圭太はどうしよう？

・・・・・ま、こんなことになったのは圭太のせいだから、ここに置いていてもいいわよね？

手紙も処理して・・・

優子「それじゃあ、坂本君？ライター貸してもらえる？」

坂本「ん？あぁいいぞ」

秀吉「姉上！何をするのじゃ？」

何をするって？もちろん

優子「燃やすに決まってるじゃない」

メラメラメラ　（手紙が燃える音～）

優子「秀吉に椎、圭太のことは、こんな紙切れじゃなくて言葉で言いましょ？」

椎「・・・・・・わかった」

秀吉「・・・・・・わかったのじゃ」

これで私なりのケジメをつけてみたけど、大丈夫かな?

とても不安だけど・・・これくらいは自分の言葉で伝えなきゃね

こうして私は新たな目標に向かって進み始めた・・・

圭太サイド

圭太「・・・・・・・ハッ!」

俺が起きたときには優子と椎と秀吉がこそこそと話していた

話していたことは分からないが、何かを決めていたようだった

そして明久は・・・・・・

明久「ちょっと待つんだみんな!」

ＦＦＦ団と島田によって処刑されていた

明久よ・・・命運を祈る・・・・・・

第二十八話　プールっていいよね？

ある夜のとき

Ｐｒｒｒｒｒ（電話の音）

？今頃に電話か・・・相手は明久？

圭太「どうした？明久」

明久『鉄人の補習がーー』

ブツッ（電話を切る音）

何だったんだ？今の電話は？西村先生の補習とかーーー

Ｐｒｒｒｒ

圭太「今度は何だ？雄二」

雄二『スマンが身元引取り人となって文月学園に来てほしい』

俺が？身元引取り人？

圭太「理由は知らないけど、今から向かう」

雄二『すまん』

ブツッ

圭太「ということがあったんだ」
秀吉「それは災難じゃのう」

まったく俺は身元引取り人として行ってあげたんだよ？

雄二「明久の所為だからな」
明久「なんだと雄二！」
圭太「ったく・・・それでプールを掃除ってわけか」
雄二「そういうことだ」

プール掃除か・・・案外面白そうだな

圭太「雄二、プール掃除手伝うぞ」
雄二「何から何まで済まないな・・・あとプールは自由に使って良いそうだ」

マジですか！？

明久「ムッツリーニは？」
康太「・・・・・・・・・・・・パス」
雄二「ついでに島田に姫路に圭太の妹に木下姉に翔子も呼ぶが？」
康太「・・・・・・・・・・・・ブラシと洗剤を用意しておけ」

康太のスイッチが入ったようだ・・・違う意味で

秀吉「ワシも参加するかのう」
圭太「済まないな」

秀吉「圭太が言うまでも無いのじゃ」

そういってくれると嬉しいよ！

圭太「翔子を自分から呼ぶだなんて成長したね」

雄二「違うんだ圭太、女子のいる中で翔子を呼ばなかったらどうなるか分かっているか？」

もちろん！雄二の裸エプロンにビデオカメラだよね

雄二「分かってくれたか、圭太」

圭太「あぁ、っでいつになるんだ？」

雄二「土曜日にプールサイドに集合してくれ」

圭太「わかった」

土曜日にて

明久「遅いじゃないか圭太！」

圭太「すまねぇ椎がちょっと遅くなって」

こんなに遅くなるとは思っても無かった

雄二「それじゃあみんな集合したな」

俺はあたりを見渡すとみんながそろっていた。そして、葉月ちゃんも来ていたようだ

雄二「着替えた者からプールサイドに集合だ」

みんな『は～い』

秀吉「それなら、ワシは男子更衣室で着替えるかのう」
明久「駄目じゃないか秀吉！秀吉は女子更衣室だよ」
優子「吉井君？秀吉は男なのよ？」
明久「秀吉は秀吉さ！」
優子「・・・・・・」

Fクラスでは秀吉はこういう扱いなんだよ。優子

秀吉「ならば今日のプールで男じゃと見せ付けてやるのじゃ」

秀吉は秀吉で張り切っていた

そんなことより

圭太「なら、秀吉はどこで着替えるんだ？」
雄二「そのことなら問題ない」

雄二がある更衣室を指差す

男子更衣室に

女子更衣室に

秀吉更衣室（荒井も可）？

圭太「『荒井も可』ってどういうことなんだよ！」
明久「よく考えてみたら、圭太もそうだったね」
康太「・・・・・・・・・・・・圭太の着替え・・・ブシャァァァ」

康太、君は何を想像したんだい？

圭太「って雄二、俺はどっちに行けばいいの？」
雄二「秀吉更衣室じゃねえか？」
圭太「男子更衣室でいいじゃないか」

俺が反論すると雄二が女子たちを指差す

その女子たちは殺気立っていた

男子更衣室で着替えたら殺すと・・・ＯＴＬ

圭太「はいはい・・・秀吉と一緒に着替えたら良いんだろ？」
秀吉「圭太も一緒なのかのう／／」

こうして俺らは秀吉更衣室で着替えた

秀吉の視線が痛かったが・・・

プールサイドにて

圭太「おぅ明久たちは早かったな」

明久と雄二と康太は集合していた。

圭太「あれ？女子たちは？」

雄二「女子は着替えが長いからな」

暇だから雄二で遊んでみよう！

圭太「もしかして、翔子の着替えでも考えてるの？」

雄二「ば、バカなこと言ってんじゃねぇよ！」

そんなこんなで遊んでいる中

葉月「バカなお兄ちゃん」

圭太「明久～指名されたぞ～」

明久「僕はそんなにバカじゃないからね！？」

いや・・・否定しても意味が無いと思う。

明久「どどどどうしようムッツリーニ！あれってスクール水着だよね！そんな物着た小学生と遊んで逮捕されない！？」

康太「……弁護士を呼んで欲しい（ボタボタ）」

圭太「変態ども！暴走するな！」
雄二「小学生の水着で取り乱すな」

まったくだよ

葉月「お待たせしました。お兄ちゃん達」
明久「懲役二年で済みそうだね」
康太「……実刑は間逃れない（ボタボタ）」

ギリギリじゃなくて普通にアウトだからね！

雄二「お前ら冷静なフリしてるだけだろう」

そこへ島田が入る

島田「こ、こら葉月！」

胸元を隠した島田が走ってきた。

島田「お姉ちゃんのソレ返しなさい！」
葉月「あうっ。ズレちゃいました」

葉月の腹部が膨らんでいる。

明久「葉月ちゃんに返しなさいって言ったソレって、パットのこと？」
島田「ウチはこの一撃にかけるわ！」
明久「その一撃は記憶どころか僕の命が消えちゃうよ！」
康太「・・・・・・・・・・・・見え、見え・・・ブシャヤァァァ」

ヤバイ康太が死んでしまう

このままの調子でプールは大丈夫なのだろうか？

俺の中の不安が積もっていく中進んでいく・・・・・・

第二十八話　プールっていいよね？（後書き）

今日は変な切り方したけど・・・いいよね？

第二十九話　プール

現在・・・

圭太「康太の出血が止まらねぇーー」

康太を救出中・・・

圭太「ったく・・・どこまで変態なんだ？」

康太「・・・・・・・・・・・・男の本望　（グッ）」

その状態で男らしくしないでください！

数分後・・・・・

圭太「やっと終わった・・・」

プールに入る前に疲れたんだけど？

雄二「終わったようだな圭太・・・」

圭太「わかってたんなら手伝ってよ！」

それにしても、雄二がおかしい・・・

圭太「雄二・・・・・・何かあったか？」

雄二「翔子に目潰しされた・・・」

翔子「・・・・・・雄二に刺激が強すぎる」

そうですか・・・・・・

圭太「で、みんなはそろった？」
明久「秀吉以外そろってるけど？」

秀吉って男だよね？

秀吉「すまぬ、遅れてしまったのじゃ」

秀吉が遅れて来た

そして、秀吉の水着は上があった・・・

圭太「秀吉・・・水着に上があることに疑問に思わないのか？」
秀吉「トランクスタイプといって店員にいっておったがのう」
明久「店員の気持ちがよく分かるよ」

秀吉を見た目で判断しすぎだよ

雄二「よしこれでそろったようだな。俺も視力がだんだん回復してーーー（ブスッ）目が！一度ならず目が焼き付けるように痛いぃぃぃ」

雄二は・・・・・・・・・・・・置いていこう・・・・・・

圭太「よし！雄二と翔子の邪魔をしないように遊ぶぞ」
みんな『は～い』
雄二「圭太！俺を見捨てる気か！」
明久「ねぇ圭太、何して遊ぶ？」
雄二「オォイ！無視する気か！？」

だって・・・翔子の邪魔をしたくないし・・・

翔子「・・・・・・雄二、いまから一緒に保健室に行く？」

雄二「止めろ翔子！いろいろと危ない気がするぞ！？」

この中に入りたくないから・・・

そして、翔子はいつでも一途だなと感心していると・・・

椎「圭太！この水着どう？」

圭太「どう？と言われても」

椎「なにかあるでしょ！綺麗だとか、可愛いだとか」

よし、わかったよ！その中から選べばいいのか！

圭太「可愛い？」

椎「何で疑問系なのよ！」

圭太「ちょっと待って！そのまま右ひじと背骨が危ないことにーー」

俺が・・・・・・何をしたって言うんだ・・・

圭太「ーーーーーハッ！」
秀吉「大丈夫かのう？」
圭太「心配するんだったら、助けてくれたらよかったのに」

おかげでひじと背骨が痛む

そんなことより

圭太「そんなことより、何で膝枕してんだ？秀吉」
秀吉「悪いかのう？／／」
圭太「いや、疑問に思っただけだ」

そして、コッチを見ている視線をたどっていくと

明久がコッチをみて拳を固めている

明久「・・・・・羨ましいよ圭太　（ボソッ）」

何か言っていた様だが聞こえなかったな

圭太「それより女子の姿が見えないけど？」
秀吉「女子ならあっちで話しているようじゃのう」

女子たち（翔子を除く）は話し合っていた

それより今は・・・

圭太「よ～し泳ぐぞ！」
秀吉「待つのじゃ圭太！」

意識が飛んでた分遊ばないとな

明久でも誘ってみるか！

圭太「明久～今何してる？」
明久「あぁ、葉月ちゃんの提案でね『水中鬼』っていうのをやるんだよ」

水中鬼？聞いたことが無いが？

葉月「水中鬼はですね。鬼が逃げている人を溺れさせたら勝ちです！」

それじゃあ、鬼が有利じゃないか！

明久「その水中鬼で・・・霧島さ～ん」

明久が翔子を呼ぶ。何のためか知らない

翔子「・・・・・・何？」
明久「水中鬼って言うのをやってほしいんだ！やり方は、霧島さんが雄二を溺れさせて人工呼吸させたら霧島さんの勝ち」

翔子は明久の説明を聞いて、プールの中へ潜る

そして・・・・・・

雄二「ん?なにか足元に手が当たってるようなーーー」

雄二が・・・プールの中へ・・・

圭太「明久・・・・・なんて惨いことを・・・・・・」

明久「圭太?プールの中にいても大丈夫なの」

?プールの中に?

ここである一人の声が聞こえる

優子「圭太、水中鬼でもやらない?」

全力で否定しよう!

秀吉「ワシもやりたいのう」

椎「私もやりた~い」

駄目だ・・・『やりたい』が『殺りたい』に聞こえる

それよりもこの遊びから回避しなくては

圭太「やめろ!俺が帰って来れない様になるぞ!」

たぶん水中鬼をやったら帰って来れない自信がある!

椎「大丈夫よ♪ちゃんと人工呼吸してあげるから」

そういう問題ではない!

圭太「本当に止めてよ?ってマジでーーー」

そしてプールの中へ引き込まれる

駄目だ・・・聞いてくれていない

今は何とか酸素を補給しなくては!

圭太「ーーープハァッ・・・明久!こいつらをどうにかしろ・・・」

秀吉「圭太は往生際が悪いのう」

俺は命が掛かってるんですけど!?

そんなこんなで格闘すること数十分・・・

椎「圭太が溺れてくれない・・・」

圭太「溺れたくねぇ!」

死にたくないからな・・・

そしてプールがトラウマになりそうだ・・・

そこである人物が発生した一言によって戦場ができる

明久「それにしてもお腹すいたな~」

姫路「それだったら今朝作ったワッフルが3つーーー」

俺たちに電波がよぎる

雄二「第一回」
明久「最速王者決定戦」
圭太「ガチンコ」
雄二・明久・圭太『水泳対決～』
康太・秀吉『いぇ～い』

流石だな・・・ここでの一体感

雄二「明久、ルール説明だ！」
明久「オッケー！ルールはとっても簡単。ここのプールを往復して、最初にゴールした人の勝ちという、誰にでもわかる普通の水泳勝負です」

説明は簡単だが、負けたら一溜まりも無いよ

そして、男たちには負けてはならない勝負がある・・・

審判：優子

１レーン　秀吉
２レーン　康太
３レーン　圭太
４レーン　明久
５レーン　雄二

優子「位置について、よーーーいドン！」

優子の号令とともに

明久「くたばれぇー雄二ー」

雄二「明久ー」

明久たちはプールサイドで格闘していた。

そして、俺たちがターンをした後

明久「雄二！僕は秀吉を」

雄二「俺は圭太と康太だ」

明久たちは俺たちの妨害をしようとしていた

この俺を止めれるのならば止めてみよ！雄二！

そして、横から声が・・・

明久「あれ？何これ？」

秀吉「上が涼しいような気がするのう」

秀吉の水着の上を明久が持っていた

康太「ブシュュュュ」

康太は危ないラインまで行っているようだ

圭太「雄二！ここは停戦だ」
雄二「ムッツリーニを助けるぞ」
俺達はとてもがんばった
がんばったが・・・
西村「・・・・・・坂本、荒井、吉井に聞きたいことがある」
雄二「断る」
明久「黙秘します」
圭太「トラウマが蘇ります」
俺達は拒否の体勢をとる
西村「なぜプールが赤く染まっているのだ？」
雄二「逆に死者を出さなかったことに褒めてほしいぐらいだ」
明久「そうだよ鉄人！」
本当にがんばったな～～止血に輸血♪勉強になったよｗ
西村「まったくお前らじゃ話にならん・・・荒井、どういうことだ？」

俺は西村先生にプールの出来事を全部話した。

西村「合宿で木下の風呂は別にした方がいいかも知れんな・・・」

ここで秀吉の風呂が特別扱いになった。

やっぱり秀吉は秀吉という性別なのか疑ってしまった。

第三十話　強化合宿（前書き）

やっと強化合宿ですね！
ちゃんとできるか不安です。

第三十話　強化合宿

新学期になって二ヶ月がたち、俺達は変わりの無い通学路を歩いていた。

圭太「ん?明久じゃないか!」
明久「?圭太か!」

明久と出会った。

明久にしては、早く家を出ているようだった。

この明久が・・・

圭太「何で今日はこんなに早いんだ?」
明久「なんか早く目が覚めちゃってね」
圭太「んじゃ～いつもは?」
明久「ギリギリだね」

明久に何があったのか気になってきた・・・

秀吉「おはようじゃ。さてはお主、明日からの強化合宿に浮かれておるな?」
明久「あはは。そうかもしれないね」

え～と・・・強化合宿?

圭太「強化合宿って何?」

秀吉「圭太らしいのう」

強化合宿を知らないことが、俺って事？

明久「強化合宿って四泊五日だよね。修学旅行にみたいだから楽しみで――――」

明久が靴箱を開ける

明久「ん？なんだろう？」

明久はロッカーの中身を探り始めた・・・またラブレターかな？

明久「ーッ！！」

秀吉「うん？どうしたのじゃ明久？」

明久「今日はいい天気だね」

秀吉「異常事態じゃな」

明久「さ、流石は秀吉・・・・・・。僕の完璧な演技を一瞬で見破るなんて・・・・・・」

え？今さっきのって演技だったのか？

圭太「たぶん、演技も何も無いな」

明久「と、とにかく大したことじゃないから、見なかったことにしてくれない？」

まて・・・待つんだ俺・・・明久がラブレターを貰っているはずが無い・・・

圭太「ま、まあいいだろう」

ここは、ちゃんとした情報を得てからばらすことを・・・

明久は俺たちより早く靴箱から離れる。

圭太「秀吉・・・・・どう思う?」

秀吉「たぶんじゃと思うのじゃが・・・・・・ラブレターじゃとは違うじゃろうな」

秀吉もそう思うんだね。

俺達はFクラスへ向かった

Fクラスにて・・・

明久が人生の不条理に落ちたかのようなムードを漂わせている

秀吉「明久。一体何があったのじゃ?」

明久「べ、別になんでもないよ。あはは。」

圭太「嘘をつくな。さっき窓からお前の声らしき声が聞こえたんだが?」

島田「アキ。なにか隠してるでしょう」

島田がいつの間にかきていた

島田「何か隠しているのかしら?まさか・・・・・。」

明久「やだなぁ美波、。本当に隠してなんか」
島田「まさか、またラブレターを貰ったなんていわないよね？」

島田は明久に対しての観察力はとても凄かった

明久「美波、言葉に気をつけるんだ。ラブレターという単語に反応して皆が僕に向かってカッターを構えている」

なんだろうこのクラスは・・・

なんか、一人になりたい気がした

圭太「秀吉」
秀吉「なんじゃ？圭太」
圭太「屋上に行ってくる」
秀吉「まさか・・・・・・」

まさか？

秀吉「圭太もラブレターを貰っておるのかのう？」

止めるんだ秀吉！ＦＦＦ団が俺を囲んでいるじゃないか！

圭太「秀吉・・・言葉に気をつけてよ」
秀吉「う、うむ疑ってすまぬのう」

ＦＦＦ団は何も無かったかのように俺から離れる

このときの団結力を試召戦争にだして貰いたい物だ

そして、圭太は屋上へと向かった

圭太「あれ？先客？」
雄二「おう圭太か」

雄二と康太が屋上にいた

圭太「雄二に康太の組み合わせは珍しいな・・・翔子の写真でも買いに来たのか？」
雄二「んなわけがあるか！・・・とりあえず、これを聞いてくれ」

雄二はポケットからＭＰ３プレイヤーを取り出し、再生ボタンを押す

雄二『愛してる翔子ー』

雄二は素直になったんだな

雄二「この声は秀吉が声真似したもので、この会話はその一文だ」
圭太「な～んだつまらないな」
雄二「圭太・・・・・俺の未来をなんだと思っている」

翔子のどｒ・・・・・奴隷なんじゃない？

圭太「康太は雄二から何を聞いてたの？」
雄二「俺の話はスルーか！？」

バタンッ！（屋上のドアが開く音）

明久「助けてムッツリーニ！僕の名誉が危険なんだ」
圭太「お前の名誉は何かあったかな？」
雄二「後にしろ。今は俺が先約だ」
明久「あれ？雄二？それと圭太！さりげなく僕を罵倒してなかった？」

空耳か何かじゃないかな～

明久「ムッツリーニ、何の話？」
康太「・・・・・・・・・・・雄二の婚約が近いらしい」
圭太「それじゃ、結婚式の会場はどこなんだ」
雄二「決まるはずがねぇ！」
明久「雄二と霧島さんの結婚なんてすでに決まっていることより、僕が校内の皆に女装趣味の変態として認識されそうなんだよう！」

そういえば明久と俺は戦友だったな・・・女装関係で・・・

雄二「なんだと？お前が変態だなんて、それこそ今更だろうが！」
明久「だまれこの妻帯者！人生の墓場に帰れ！」
雄二「うるさいこの変態！とっととメイド喫茶に出勤しろ！」
明久「・・・・・・」
雄二「・・・・・・」
圭太「傷つくなら黙っておけばいいのに・・・」

まったく・・・どこのバカなんだ？

康太「・・・・・・・・・・・・明久は？」

明久「実は、僕のメイド服パンチら写真が全世界にＷＥＢ配信されそうなんだ」
圭太「その過程は？」
明久「ゴメン。端折りすぎたね」

明久の事情説明中

明久「そんなわけで犯人を捜してほしいんだ」
雄二「なんだ。明久も俺と同じような境遇か」

う～ん・・・・・・ん？もうそろそろ時間だな

圭太「もうそろそろ、ＨＲだぞ」
雄二「もうそんな時間か！？」

そんな時間なんだって！

俺達はＨＲに遅れないようにＦクラスへと向かった

西村「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりが入っているだろう。」

西村先生は大きな箱を抱えていた

西村「さて、明日から始まる『学力強化合宿』についてだが、だいたいのことは今配っているしおりに書いてあるので確認して置くように」

といって、しおりが配られる

俺はしおりを確認した

西村「特に他のクラスの集合場所を間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うからな」

Aクラスはリムジンバスで移動ってことになるのかな?

ならFクラスはーーー

西村「いいか、他のクラスと違ってわれわれFクラスはーーーーー現地集合だからな」

『案内すらないのかよ!?』

Fクラスの扱いに俺と全級友が涙した・・・・

第三十一話　強化合宿

現在、木下家にて

圭太「それより、木下家に来るのは何ヶ月ぶりだろう」

一時、身を隠してから一度も来た事が無いな

優子「圭太が振り分け試験前に隠れたときから来てないじゃない、しかもFクラスに行ったと聞いたときはもうーーー」

圭太「あ～それについては反省しています。」

Aクラスにはいけない事情があったからな

優子「もう過ぎたことだし、いいわ」

秀吉「それでは圭太、ワシの部屋にでも来ぬか？」

圭太「久しぶりだな～」

優子「ちょっと秀吉に圭太！そんなことのために呼んだんじゃないのよ！大切なことがあるから呼んだんじゃない」

え～と・・・大切なこと？

優子「圭太には、明日リムジンバスで強化合宿場にいくから」

あれFクラスは現地集合じゃないの！？

圭太「そうなると迷惑じゃないか？」

優子「それについては大丈夫よAクラスのみんなと高橋女史と学園

長に了承は取っているわ」
秀吉「それではワシも」
優子「却下よ」
秀吉「いくらなんでも早すぎるのじゃ！」

俺もそう思う・・・

圭太「なんで俺だけなんだ？雄二とかもいるだろうし」
優子「代表も講義したんだけど・・・圭太だけが、大丈夫みたい」

くそっ！翔子の奴隷が・・・

それより、何で俺が？

圭太「何で優子は俺をＡクラスに呼ぶんだ？」
優子「椎もいっしょよ、それに・・・」

それに？

優子「圭太と一緒の時間が少ないから／／」

そうなのかな？

圭太「まっ今回はありがとうな」
優子「別にいいわよ／／」
秀吉「できればワシも一緒にいたいのう」
圭太「なんだ秀吉？優子と一緒がいいのか？」
秀吉「姉上ではなく圭太じゃ」

なんかうれしい物だな

それよりも良い友をもったな～

ってそれどころじゃない！

圭太「スマンが明日の準備があるから帰ーーー」

優子「それは必要ないわ」

どういうことだ？大切なことはもう終わったんじゃないのか？

優子「圭太には今日だけここに泊まってもらうから」

秀吉「流石じゃ姉上！」

ちょっと待つんだ！俺には明日の準備が

優子「そのことは椎に任せてるわ」

圭太「あの椎に任せただと！？」

正直どうなるかは不安です

圭太「・・・・・わかりました。って俺はどこの部屋に？」

たぶん秀吉の部屋かソファーだな・・・

優子「もちろん私の部屋よ」

え～と優子さん？俺は男だけど？

まさか俺が女装してそれが俺の性別だというのか！？

優子「ちょっと部屋を片付けるから待ってて♪」
圭太「ちょっと待って！っておい！」

優子は自分の部屋へ向かったようだ

圭太「秀吉」
秀吉「・・・・・わかっておるのじゃ」
圭太「あぁ俺の明日は無いようだ・・・」

たぶん秀吉には分からないだろう・・・俺たちの人生

俺が落ち込んでいる間に優子が戻ってきた。

優子「さあ入って良いわよ！」
圭太「・・・・・はい」

俺は正直に優子の部屋に入った

優子「圭太、荷物は机に置いて寝るときは私のベットで寝てね♪」

俺は机に荷物を置く

って何で！何で俺が優子のベットで寝なきゃいけないんだ？

そうしたら優子は何処で寝るの？

圭太「優子は何処で寝るの？」
優子「もちろんベットに決まってるじゃない」

そうして俺は優子の部屋を見渡すと、ベットは一つしかなかった・・

・

圭太「優子・・・なら俺は地べたで寝るよ」
優子「だめよ圭太、地べただと寝づらいでしょ？」

逆に一緒に寝ると寝づらいんですけど？

優子「とにかく圭太はベットだからね」
圭太「・・・・・・はい」

何かもう抵抗がしたくないほどに眠い・・・

圭太「早速だが、寝かせてもらうぞ・・・」
優子「話したいことがあったけどいいわ」

俺は優子のベットで寝た

次の朝

あれ？俺の横に優子がいる！？

ってあぁそうだったな・・・

圭太「優子～もう朝だぞ～」

優子「後もう少し～って圭太？おはよう」

優子お前が覚えていないのか？お前が言い始めたのにな

圭太「あぁおはよう優子」

優子「それよりまだ寝ていたいけど、どうする？」

圭太「どうする？って聞かれても、もう時間だぞ」

優子「わかってるけど～」

優子は布団からでた

そして

優子の格好は下着姿だった

圭太「え～と何かすまん」

とにかく誤ろう！俺の命のためにも

優子「誤らなくてもいいわよ・・・それよりなんとも思わないの圭太」

はい？

圭太「なんとも思わないけど？」

優子「そうならいいわ」

何かを思ったらどうしたんだろう？

圭太「ちなみに何か思っていたらどうなっていたんだ？」

優子「もちろん記憶を消すために実力行使といくわ」

実力行使だと!?危なかった～

それより優等生としての優子に対してはビックリしたな

初めて知ったよ

圭太「準備ができたら言ってくれそれまで家の外で待っている」

俺は優子の部屋を出た

家を出ると椎が待っていた

圭太「椎、荷物は？」

椎「こっちのかばんよ」

といってかばんを俺に渡す

圭太「ありがとうな」

椎「べ、別にいいわよこんなこと／／」

なんだ椎？熱でもあるのか？

優子「ごめ～ん待たせた？」

圭太「逆に早いことでビックリしているんだが？」

それより秀吉の姿が見えないな？

圭太「秀吉は？」

優子「先に行っているわ」

やばい口止めするのを忘れてた・・・

まぁ何とかなるだろう

圭太「それじゃあ行くか」

優子・椎『うん』

俺たちは集合場所へと向かった・・・

圭太「っというわけで、Aクラスの迷惑にならないようにします。あとよろしくお願いします。」

A「別に大丈夫よ」

A「これで女装してくれたら良いんだけどな」

A「・・・・・雄二がいない」

Aクラスの最初に発した言葉はうれしいけど、女装はしないよ!?

あと最後の人は翔子か・・・

工藤「荒井君覚えてる?」

え~と康太を出血死させようとしたやつか

圭太「あぁ覚えているぞ、保健体育で康太と戦ったからな・・・工

藤だったな」
工藤「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Ａクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から７８・５６・７９、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」
へぇ～シュークリームが好きなんだ。
優子「変なことを考えているんじゃないよね？」
椎「考えたことによっては・・・圭太？」
変なこと？考えてないけど？
圭太「変なことは考えていないけど？それがどうした？」
工藤「へぇ～いまどき珍しいね～」
何が珍しいのさ
工藤「普通は女子のパンチラに興味を持つはずなのに」
そういうことだったのか？
圭太「普通はそうなのか？優子」
優子「圭太は特別だと思うよ・・・いろんな意味で」
ちょっと待つんだ！
いろんな意味って何なんだ！？
そして俺たちは何だかんだでリムジンバスは強化合宿場に向かっていた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8958x/

俺と幼馴染とバカたちと！

2011年11月22日01時11分発行